

山鹿市文化財調査報告 第9集

くま べ やかた 隈 部 館 跡 IV
(総 括 集)

2009年

くま もと けん やま が し
熊本県山鹿市教育委員会

山鹿市文化財調査報告 第9集

^{くま}隈 ^べ部 ^{やかた}館 跡 IV
(総 括 集)

2009年

^{くま}^{もと}^{けん}^{やま}^が^し熊本県山鹿市教育委員会

序 文

隈部館跡は、山鹿市菊鹿町上永野の山中に残る戦国時代の館跡であります。城主は「肥後の国衆一揆」の中心人物として知られる隈部親永で、背後の高山には猿返城跡や米の山城跡などの砦跡が確認されます。麓に広がる上永野地区の集落は、当時の城下町と伝えられ、館にまつわる数多くの地名や伝承の地があり、一帯で、今なお中世の面影をしのぶ事ができます。

昭和49年3月には県指定史跡になり、以後、熊本県で屈指の中世城館跡として位置づけられてきました。館跡には、礎石建物跡や庭園遺構、柵型遺構など、一級品の遺構が現存しています。

この貴重な館跡については、昭和49年度から昭和51年度までは発掘調査と整備事業が行われ、平成5年度からは菊鹿町史編纂事業を契機とした調査研究が始まり、平成17年1月の市町合併後も継続して山鹿市教育委員会菊鹿分室で取り組みを行ってきております。

この程、長年の調査研究もまとまりをみしましたので『隈部館跡Ⅳ(総括集)』として調査報告書を刊行することになりました。第1回目の発掘調査から、実に35年の歳月が流れております。

ご指導を頂いた文化庁、県文化課、隈部館跡保存整備等検討委員会、関係各位に深くお礼申し上げます。

平成21年2月28日

山鹿市教育長 田 中 宏

本文目次

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査の組織	1
第2節 調査の経緯	1
第3節 地理的環境	2
第4節 隈部館の呼称	2
第5節 隈部館の概要	5
第6節 猿返城の概要	6
第Ⅱ章 隈部館跡	15
第1節 隈部館跡の現状	15
第2節 礎石建物跡	29
第3節 庭園遺構	35
第4節 (伝)富田安芸守屋敷跡	36
第Ⅲ章 猿返城跡	41
第1節 猿返城跡へのアクセス	41
第2節 縄張り	43
第Ⅳ章 米の山城跡	49
第1節 米の山城跡へのアクセス	49
第2節 縄張り	49
〔資料〕近世・近代の文献に見える猿返城跡・米の山城跡	55
第Ⅴ章 まとめ	58
写真図版	59
〔付論1〕「隈部館跡」庭園遺構について	68
〔付論2〕建物の性格について	76
〔付論3〕肥後の中世城館跡と隈部館跡	79
〔付論4〕戦国期の有力国衆の館跡	81
〔付論5〕城北村状調査 隈部氏編	86
〔付論6〕隈部氏関係基礎的資料の再検討	阿蘇品 保夫 巻末 1

挿 図 目 次

第1図	熊本県山鹿市（旧菊鹿町）位置図	2	第17図	建物跡2実測図	31
第2図	隈部館跡・猿返城跡・米の山城跡 位置図および字図	3	第18図	建物跡3実測図	33
第3図	隈部館跡・猿返城跡・米の山城跡 周辺地形図	7	第19図	石畳実測図	34
第4図	館関連地名位置図（上永野地区）	9	第20図	庭園遺構実測図	35
第5図	隈部館跡・猿返城跡周辺地形図	10	第21図	隈部館跡・（伝）富田安芸守屋敷跡周辺地形図	37
第6図	隈部館跡周辺地形図	11	第22図	（伝）富田安芸守屋敷跡測量図	38
第7図	隈部館跡全体図	13	第23図	（伝）富田安芸守屋敷跡 石垣位置図	39
第8図	隈部館跡測量図①	17	第24図	石垣実測図	39
第9図	隈部館跡測量図②	19	第25図	猿返城跡周辺地形図および林班図	42
第10図	（伝）馬屋跡周辺測量図	22	第26図	猿返城跡全体図	44
第11図	石垣A実測図	23	第27図	猿返城跡 I郭～IV郭測量図	45
第12図	石垣B実測図	23	第28図	猿返城跡 V郭～Ⅷ郭測量図	47
第13図	石垣C実測図	23	第29図	米の山城跡全体図	50
第14図	主郭平場～隈部神社周辺測量図	25	第30図	米の山城跡 山頂～西側尾根筋	51
第15図	主郭平場（礎石建物跡・庭園遺構）全体測量図	27	第31図	米の山城跡 山頂～堀切4	53
第16図	建物跡1実測図	29			

写 真 図 版

図版1	隈部館跡・猿返城跡 遠景	図版8	主郭南下 枡型遺構（虎口）
図版2	隈部館跡・猿返城跡 航空写真	図版9	堀切③を西方向から見る
図版3	建物跡1 西→東	図版10	隈部神社北側の堀切② 東→西
図版4	建物跡2 東→西	図版11	隈部一族の墓所西下の堀切①（土橋より北側）
図版5	建物跡3 西→東	図版12	（伝）馬屋跡 西壁
図版6	庭園遺構 南→北	図版13	隈部館跡航空写真 北→南
図版7	主郭入口 9段の石段		

例 言

1. 本書は熊本県山鹿市菊鹿町上永野に所在する、県指定史跡「隈部館跡」の調査報告書である。
2. 測量や実測調査は、山鹿市教育委員会菊鹿分室が主体となって行った。
3. 調査に際しては、上永野地区から多大な協力を得た。
4. 本書の執筆は原口隆志（菊鹿分室教育課主事）が行った。
5. 付論として、尼崎博正氏、西島真理子氏、大田幸博氏、阿蘇品保夫氏の各先生方から玉稿をいただいた。
また、桑原憲彰氏、東 亮憲氏の遺稿も掲載した。
6. 調査補助と図面および資料整理は石工みゆきさんと溝口真由美さんの助力を得た。
7. 本書の編集は、原口が行った。

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の組織

調査主体 山鹿市教育委員会菊鹿分室
調査責任者 田中 宏（山鹿市教育長）
調査者 原口隆志（菊鹿分室教育課主事）
調査事務局 八木田達博（教育部長） 木村理郎（文化課長） 中村幸史郎（文化課審議員）
岩井賢太（菊鹿分室教育課長） 早田弘隆（菊鹿分室教育課長補佐）
報告書作成 原口隆志 石工みゆき 溝口真由美

隈部館跡保存整備等検討委員会

委員長 服部英雄（九州大学比較社会研究院教授・文学博士）
副委員長 大田幸博（熊本県立装飾古墳館長）
委員 磯村幸男（福岡県文化財保護課長・元文化庁主任調査官）
石谷 正（九州大学名誉教授・前日本考古学協会会長）
尼崎博正（京都造形芸術大学教授・文化庁文化審議会名勝委員）

第2節 調査の経緯

年度	調査主体	内 容	調査成果
昭和49年	旧菊鹿町教育委員会	・昭和51年度までの3ヶ年、単県補助事業により隈部館跡の発掘調査を実施。	『ふるさとの自然と歴史』で発表（昭和52年3月刊行）
平成5年	旧菊鹿町教育委員会	・菊鹿町史編纂事業の一環として館跡の地形測量、野外展示された礎石建物跡等の遺構実測。 ・関連文献調査。	菊鹿町文化財調査報告第2集『隈部館跡』
平成8年	旧菊鹿町教育委員会	・隈部館跡関連の猿返城跡と米の山城跡の測量調査。	菊鹿町文化財調査報告第3集『猿返城跡・米の山城跡』
平成9年	旧菊鹿町教育委員会	・米の山城跡の石塁測量調査。	菊鹿町文化財調査報告第5集『米の山城跡Ⅱ』
平成10年	旧菊鹿町教育委員会	・米の山城跡の石塁測量調査。	菊鹿町文化財調査報告第6集『米の山城跡Ⅲ』
平成16年	旧菊鹿町教育委員会（山鹿市教育委員会菊鹿分室）	・隈部館跡の国史跡指定申請資料作成の一環として、野外展示遺構の再実測および周辺部の測量調査。	菊鹿町文化財調査報告第11集『隈部館跡Ⅱ』
平成17年	山鹿市教育委員会菊鹿分室	・隈部館跡の補足測量調査を継続。	山鹿市文化財調査報告第1集『隈部館跡Ⅲ』
平成18年	山鹿市教育委員会菊鹿分室	・隈部館跡の補足測量調査を継続。	—————
平成19年	山鹿市教育委員会菊鹿分室	・隈部館跡の補足測量調査を継続。	—————
平成20年	山鹿市教育委員会菊鹿分室	・隈部館跡の補足測量調査を実施。 ・（伝）富田安芸守屋敷跡の測量。	山鹿市文化財調査報告第9集『隈部館跡Ⅳ』

隈部館跡調査経過表

〔保存経緯〕

年度	内 容
昭和49年 昭和51年	<ul style="list-style-type: none"> ・3月23日に熊本県史跡指定。中世城館跡としては、県内で2番目の指定。 ・昭和51年度までの3ケ年の発掘調査に合わせ、旧菊鹿町教育委員会では、県補助事業により、検出遺構の保存と活用のために整備を実施。 ・礎石建物跡群には、縁石の設置。特に主殿と推定される礎石建物跡は、アスファルトによる礎石の固定。 ・主要遺構表示のための標柱設置。 ・地元で結成された隈部館跡管理委員会による見回りを平成20年度まで継続して実施。同じく管理委員会による年に3回の清掃作業の実施。
平成11年	<ul style="list-style-type: none"> ・(伝)馬屋跡の西側にある土地を旧菊鹿町で公有化し、環境整備を行う。堀切肩部の土塁を見れる状態にした。
平成14年	<ul style="list-style-type: none"> ・県指定地・隈部館跡周囲整備事業を県営中山間地域総合整備事業で実施。 ・県指定地に隣接する東側小谷を造成して駐車場を設置。
平成16年	<ul style="list-style-type: none"> ・駐車場に屋外トイレを設置。
平成19年	<ul style="list-style-type: none"> ・9月に、隈部館跡保存整備等検討委員会を設置。遺跡の保存整備のあり方等を検討。

隈部館跡保存整備経過表

第3節 地理的環境

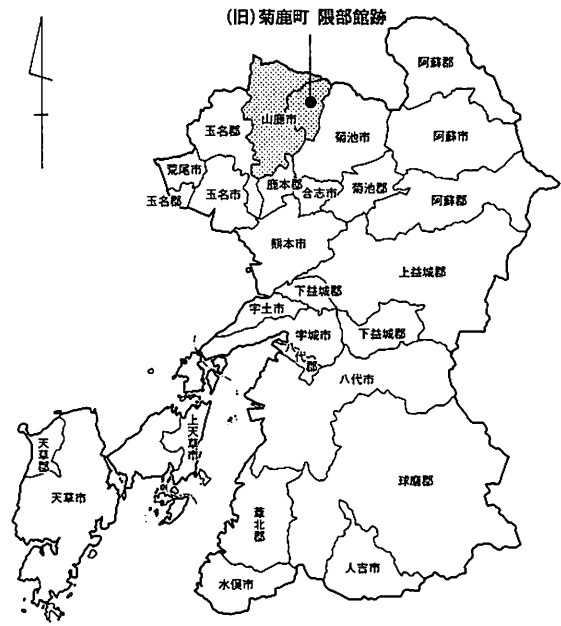
隈部館跡は、熊本県山鹿市菊鹿町上永野字高池に位置する。山鹿市菊鹿総合支所を基点とすれば、北東方向へ地図上の直線距離にして4.5km離れた山中にある。標高340～370m、周囲に樹木の繁茂が無いので、遠目に館跡の所在地が確認できる。南西麓直下の桑原・高池両集落との比高差は、110～140m。

今日、館跡には、高池集落から登る農道と、横尾集落から登る市道犬丸囲線がある。館跡の北東側背後には、「城床」の小名が残る高山（標高682.4m）と猿返し山（標高626.8m）が衝立の様な状態で眼前に迫っている。「城床」に登れば、約2kmの矢谷溪谷と、さらにその北奥には、八方ヶ岳（標高1051.8m）をはじめ、国見山・三国山の標高千mクラスの山々が連なっているのが見える。これらの山は福岡と大分の県境でもある。

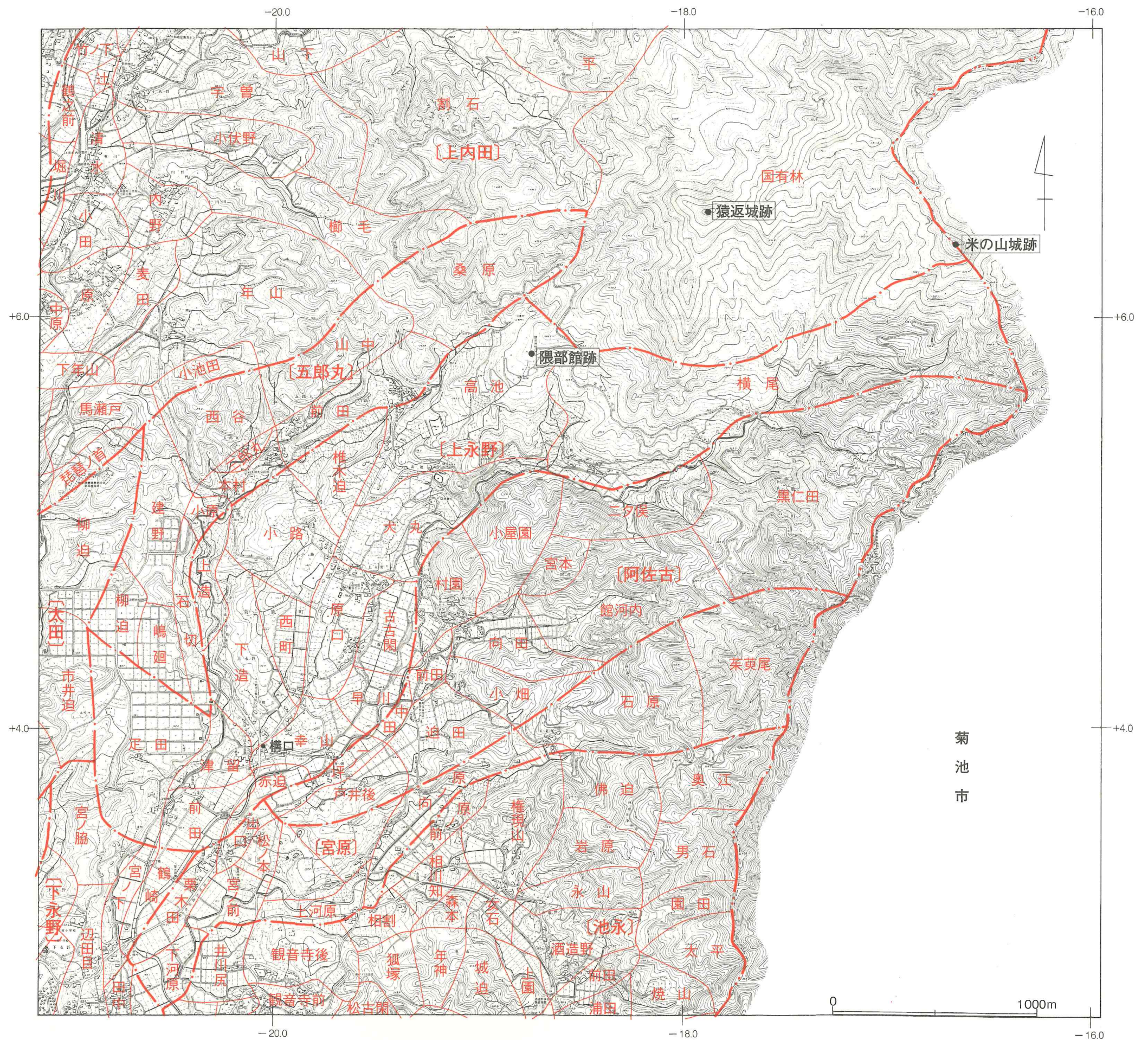
第4節 隈部館の呼称

「隈部館」の呼称は、昭和49年3月に県指定史跡となった際に付けられた遺跡名である。中世文書には、城主・隈部氏の持ち城に関する記載が無く、江戸時代の地誌になって「猿返城・永野城・隈部城・長野城」等の城名で登場し、一部に隈部親永の館跡との記載がある。地元では「隈部さん」「隈部ガ城」と呼んできた。

明和9年（1772）に森本一瑞が編述した『肥後国誌』には、猿返城の事として遺跡の具体的な描写がなされている「此城跡 大手舁形ノ跡 城ノ礎石 并若殿ノ部屋ノ跡 庭石泉水ノ跡 花園ノ跡等 于今



第1図 熊本県山鹿市（旧菊鹿町）位置図



第2図 隈部館跡・猿返城跡・米の山城跡 位置図および字図

歴然タリ」。これは、まさに今に残る隈部館の様子を描写したものに他ならない。現地を訪れた筆者の紀行文である。ただし同書は、隈部館を「猿返城そのもの」と解釈しており、背後の山の城床については全く触れていない。

類似の記述がなされた同時期の地誌には、天明4年（1784）に、寺本直簾が著した『肥後見聞雑記』がある。山鹿の記述に「此永野村は八方嶽の麓にて、此村の上に隈部親永の館跡・石垣等、今残れり」とあり、寺本も、この地を訪れていることが分かる。この書も「隈部親永の館跡」と記している。なお、この書では、その他の城として、菊鹿総合支所近くの日渡城を取り上げているが、城床としての猿返城や、米の山城に関する記述はない。

城名に関する資料は、肥後藩の公文書『慶安四年の差出』がある。慶安4年（1651）に、藩が古城の実態を幕府へ報告したもので、正保元年（1644）に提出された『国絵図』の説明書である。藩内を13郡に分けて山鹿郡の場合、6城の内、同じ上永野城として2城を並記しているが、規模については60間と48間と分けている。規模的に見て、両城は明らかに砦と思われ、それも山頂域の城域面積を示しているものと推定される。現況に照合すれば、前者が米の山城、後者が猿返城と見なされる。ここでは、隈部館の区域が除外された格好になっている。

『国郡一統志』は、隈部城と記している。この地誌は、北島雪山が藩に願って寛文7年（1667）から3カ年、藩内の寺社や古蹟を調査した結果をまとめたものである。肥後における最初の地誌で、時期的に見て、中世の様相を十分に遺す書として注目される。この時期、「隈部氏の城」との表現は興味深い。

『肥州古城考』には、猿返城と記されている。同書は、肥後の古城を群として最初に取りまとめたもので、辛島道珠が藩命によって、天和元年（1681）から著述にかかり、程なく完成したという。『肥集録』の場合には、永野古城と記されている。この書は、肥後の藩主や藩当局が藩の実態を把握するため、役人が作成したメモ書きの収録である。何代にも亘り作られたが、流布しているのは細川宗孝時代のもので、享保19年（1734）までの記述がある。この書も、公文書的な性格を持ち、同書第36項の「肥後国古城主之事」に米の山城と共に城名が記載されている。

隈部館の北東側背後に二つの山頂があり、地元で「城床」「猿返し山」と呼んでいる。県指定後に城床は、猿返城と解釈されて、隈部館と分ける考え方が確立した。しかし、本来は、山腹の館区域と山頂の砦区域で、『肥後国誌』でいう猿返城を構成する一つの城館である。

第5節 隈部館の概要

館跡が所在する山腹一帯は、昭和40年代初期にミカン畑として大規模に開墾された。この時、今に残る館の中心部は、当時、上永野地区の長老格であった中満源平、石坂仁八両氏（いずれも故人）の呼びかけで保存された経緯がある。この線引きによって、隈部神社の裏側の山腹ラインと、その西側斜面も旧地形のままに残ることになった。

館跡の所在地は、標高345m前後の山腹中にあり、北東側背後に「城床」と呼ばれる標高682.4mの高山を担っている。中心区域の主郭には、正方形の広い平坦地が造成されており、高所ながら正に、館そのものの様相を呈する。ここは地形の変化点で、城床からの山腹が急に傾斜を減じて末広がりの緩傾斜地をなす所である。この地形を最大限に利用したものである。

全体の縄張りとは、この造成地の主郭を軸に、裏側の城床に続く山付きの北東方向に2条の堀切が走り、西側に小段群を見る。防禦面からは、主郭裏側の堀切が小規模な事が特徴である。これに対して、正面側の主郭の南西縁部下には、大規模な堀切が造営されている。山腹の段下を東西に大きく掘り割ったものである。堀の肩部にあたる主郭側の崖面は急峻に削り落とされて、堅固な守りとなっている。素掘りで堀壁に石畳が

積まれた痕跡は無く、東側寄りには、(伝)馬屋跡からの大規模な土橋が通っている。土橋から東側の堀切は、市道犬丸囲線の建設時に一部が削られている。

地図上での直線距離にして220m下の(伝)大手門箇所から、登城道が上っている。ミカン畑に開墾された時に舗装されたが、ルートは、そのままという。この道は、(伝)馬屋跡の西縁部下を通って堀切の底部に至り、そこから鍵型に折れ曲がって(伝)馬屋跡の北縁に出る。それから主郭下の石垣を伴う完全な櫓型の虎口に入る。主郭への入口には、9段の石段が残っている。

主郭内には、少なくとも3棟分の礎石建物跡と原形を留めた庭園遺構が残っている。この地が山腹にある事を忘れさせる光景である。昭和49年度から3ケ年にわたり、菊鹿町教育委員会で発掘調査がなされ、検出された遺構は、一部が整備されて、今日に至るまで野外展示がなされてきた。歴史的にも、「肥後の国衆一揆」に関連した城館の一つとして知られる。城主の隈部親永は、国衆一揆の中心人物である。

〔館関連の地名〕

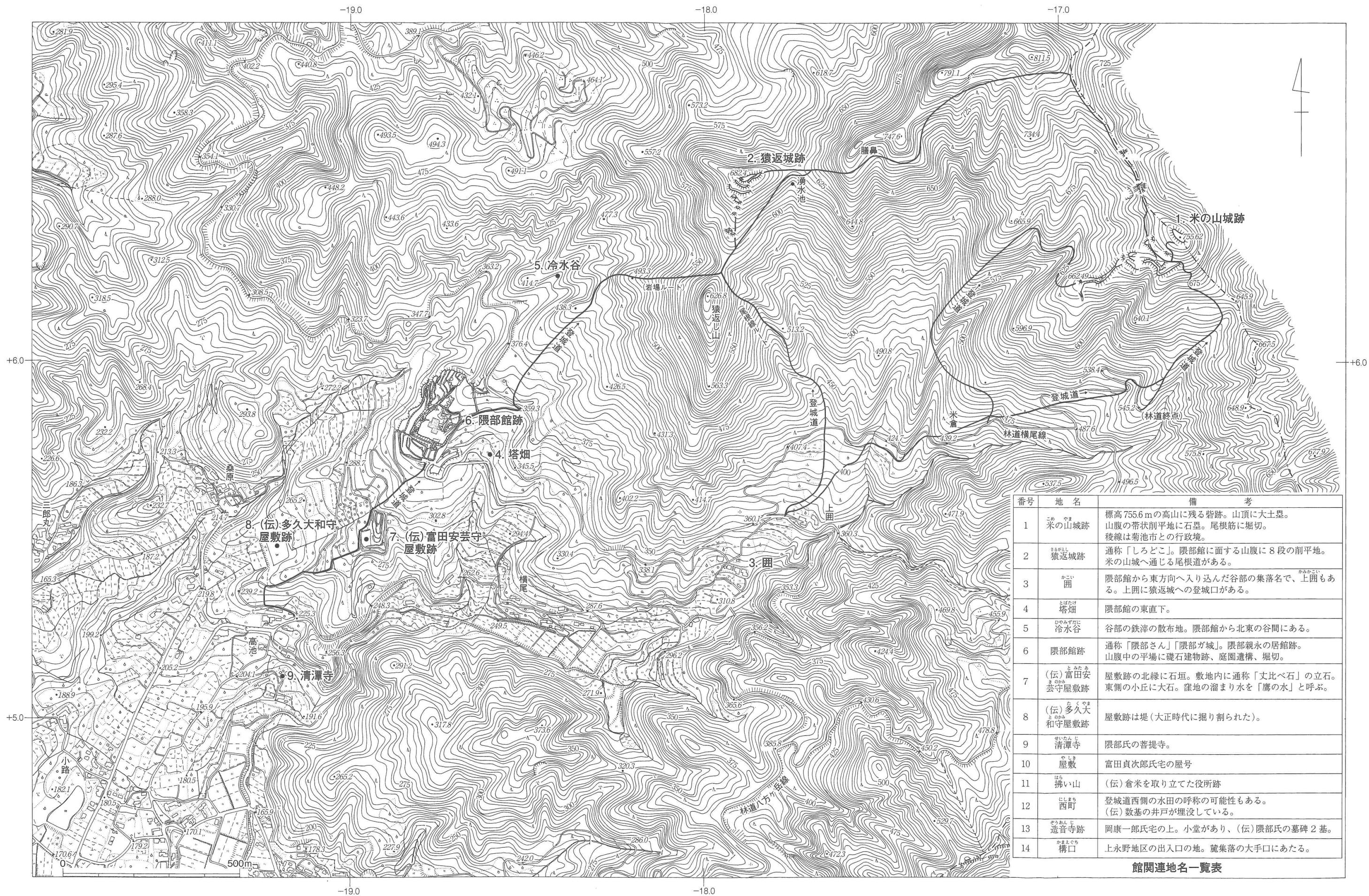
上永野地区には、多くの館関連の地名が残っている。地名表の作成にあたっては、〔付論5〕の東 亮憲氏の遺文(→86頁)を元に、上永野在住の中満二人氏、中満宣道氏などから示唆を受けた。

第6節 猿返城の概要

隈部館の北東側に壁をなすかのような連山があり、その中の一つ、標高682.4mの高山に築かれた砦跡である。山腹に位置する隈部館との比高差は337mもあり、台形状をなす山容は、さながら館に対する楯の様相を呈する。猿返城には、城床の山頂から標高619m強の山腹に、砦として遺構が残っている。登城道は、館背後の急な北東斜面の岩場ルートと、館から北東方向へ1.8km離れた谷部からの尾根線ルートがある。岩場ルートは、緊急時の連絡路と思われる。尾根線ルートは、林道八方ヶ岳線の枝道・横尾線の脇に入口があり、山頂までの所要時間は約45分。

縄張り、山頂から南西側の山腹には、8か所に小段や削平地が残っている。中には、南縁に土塁を残すものがあり、空堀の埋没が考えられる。この事を『肥後国山鹿郡村誌』は、「堅堀切七行アリ長三十間甚不深其下断岸」、さらに『山鹿郡中村郷地誌』は「切岸ノ上ニ堅堀七筋アリ長三十間計深二尺ハカリニシテ広カラス」と記している。

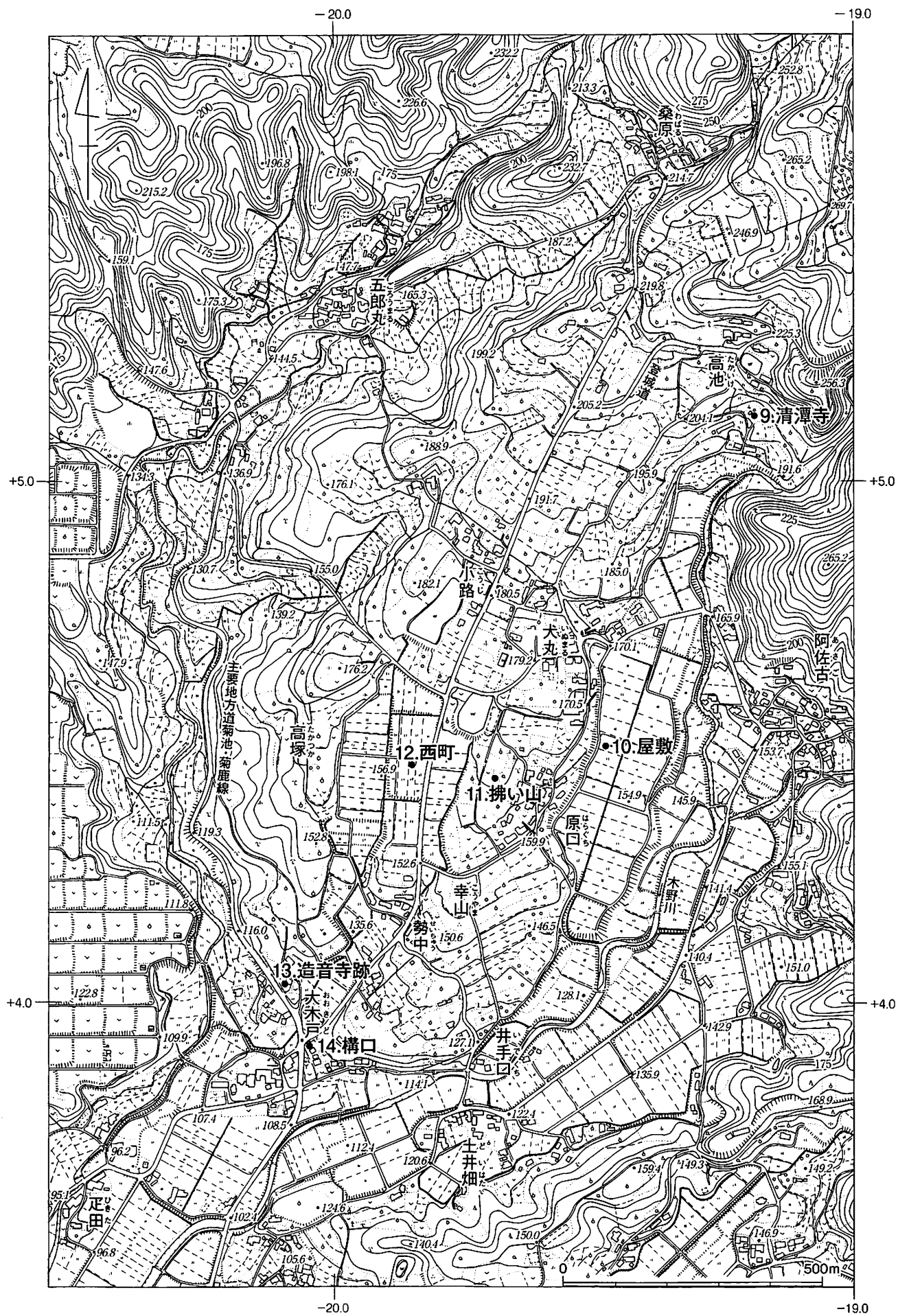
猿返城は、隈部館を高所から眺められる場所として最適である。敵勢の動きを監視して、万一の場合は、逃げ込み場としても活用できる。「有事の際は、裏側から隈部館へ食糧や武器、兵士を送り込むことが出来る」と郷土史に詳しくあった木庭春生氏(元菊鹿町文化財保護委員長)も生前、力説しておられた。



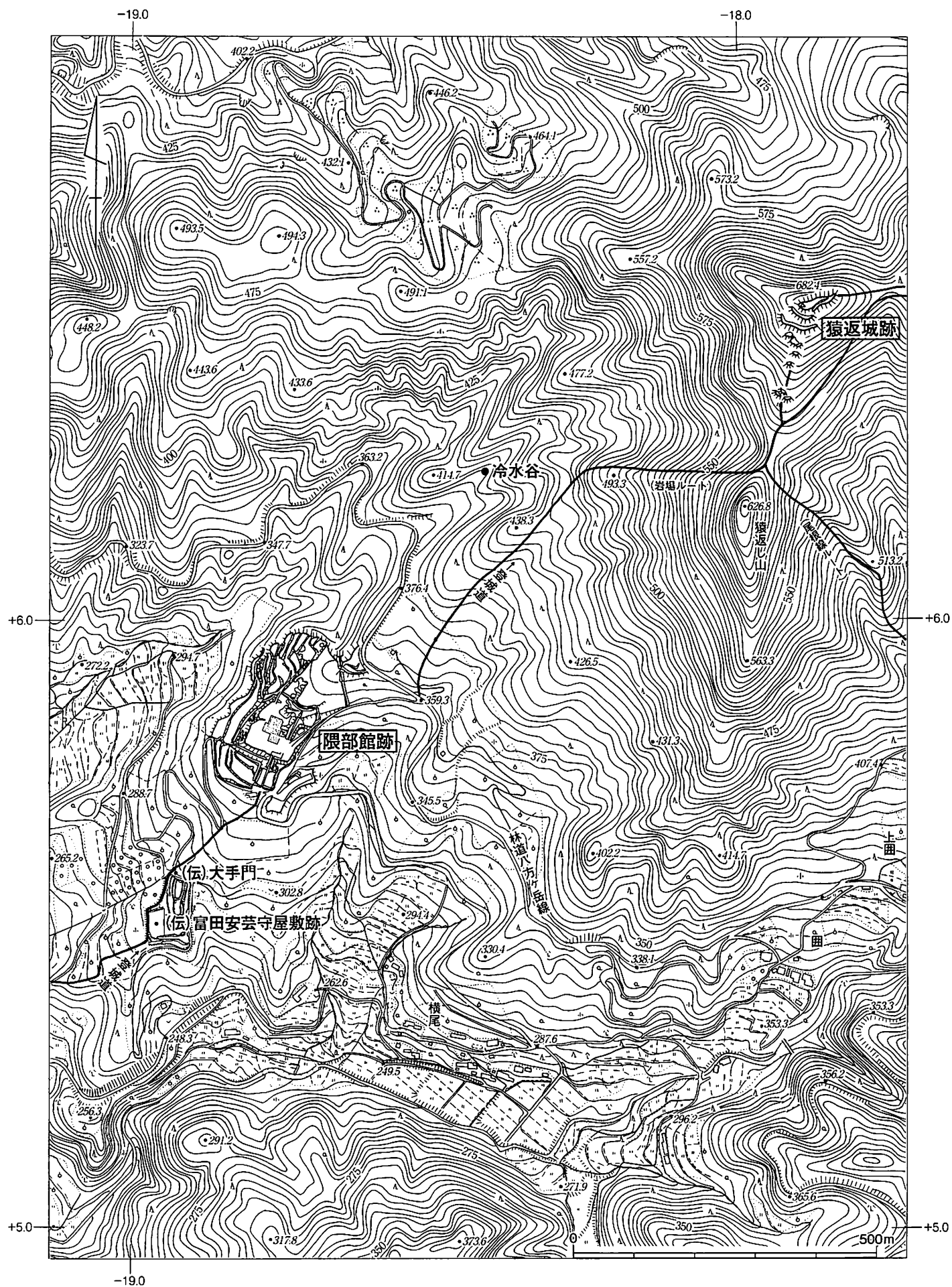
番号	地名	備考
1	こめやま 米の山城跡	標高755.6mの高山に残る砦跡。山頂に大土塁。 山腹の帯状削平地に石塁。尾根筋に堀切。 稜線は菊池市との行政境。
2	さるがえし 猿返城跡	通称「しろどこ」。隈部館に面する山腹に8段の削平地。 米の山城へ通じる尾根道がある。
3	かこい 囲	隈部館から東方向へ入り込んだ谷部の集落名で、上囲もある。 上囲に猿返城への登城口がある。
4	とびたけ 塔畑	隈部館の東直下。
5	ひやみずだに 冷水谷	谷部の鉄滓の散布地。隈部館から北東の谷間にある。
6	隈部館跡	通称「隈部さん」「隈部ガ城」。隈部親永の居館跡。 山腹中の平場に礎石建物跡、庭園遺構、堀切。
7	(伝) 富田安 芸守屋敷跡	屋敷跡の北縁に石垣。敷地内に通称「丈比べ石」の立石。 東側の小丘に大石。窪地の溜まり水を「鷹の水」と呼ぶ。
8	(伝) たくやま 多久大 和守屋敷跡	屋敷跡は堤(大正時代に掘り割られた)。
9	せいだんじ 清潭寺	隈部氏の菩提寺。
10	やしき 屋敷	富田貞次郎氏宅の屋号
11	ほら 拂い山	(伝) 倉米を取り立てた役所跡
12	にしまち 西町	登城道西側の水田の呼称の可能性もある。 (伝) 数基の井戸が埋没している。
13	せうおんじ 造音寺跡	岡康一郎氏宅の上。小堂があり、(伝) 隈部氏の墓碑2基。
14	かまえぐち 構口	上永野地区の出入口の地。麓集落の大手口にあたる。

館関連地名一覧表

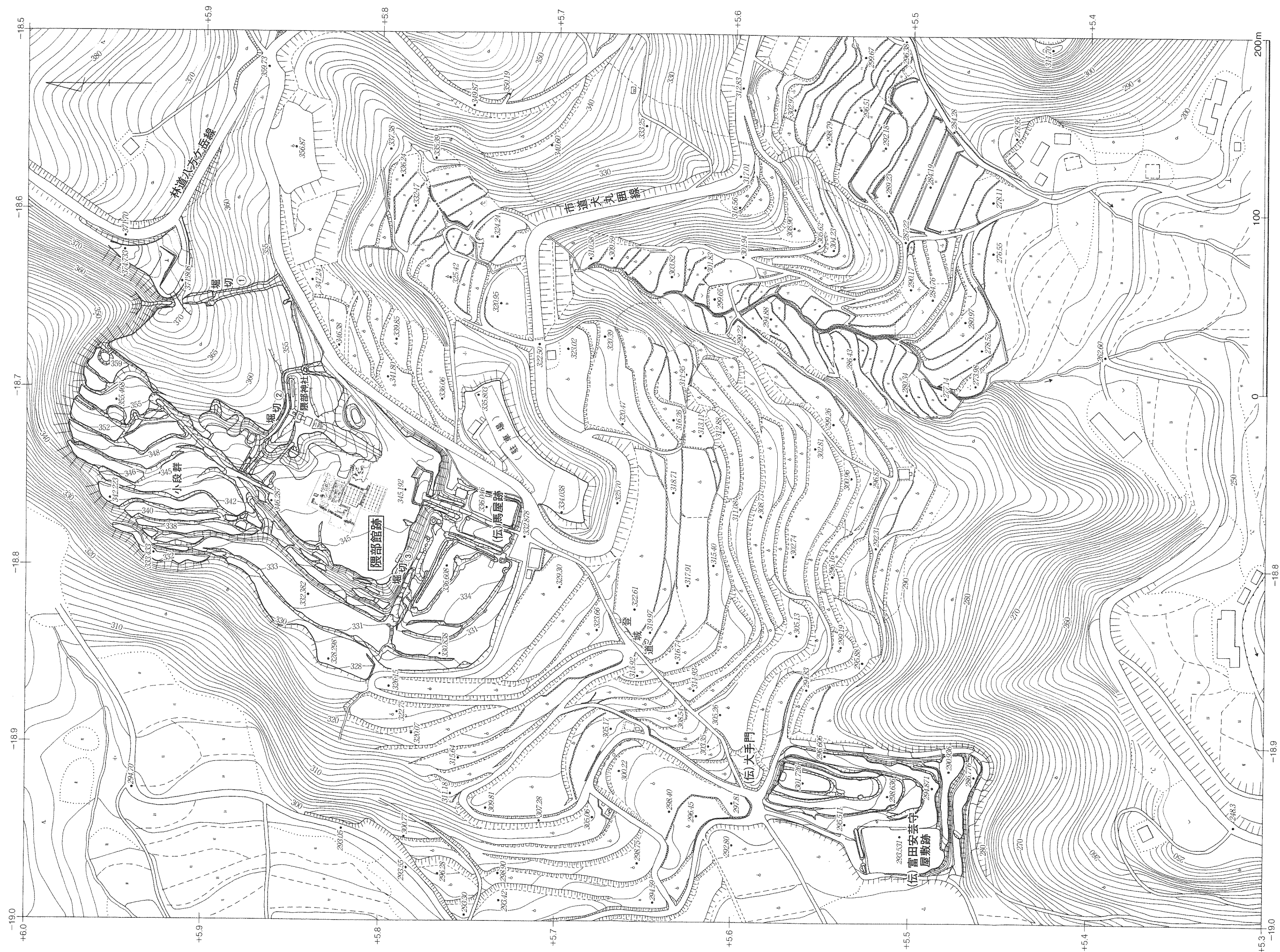
第3図 隈部館跡・猿返城跡・米の山城跡 周辺地形図



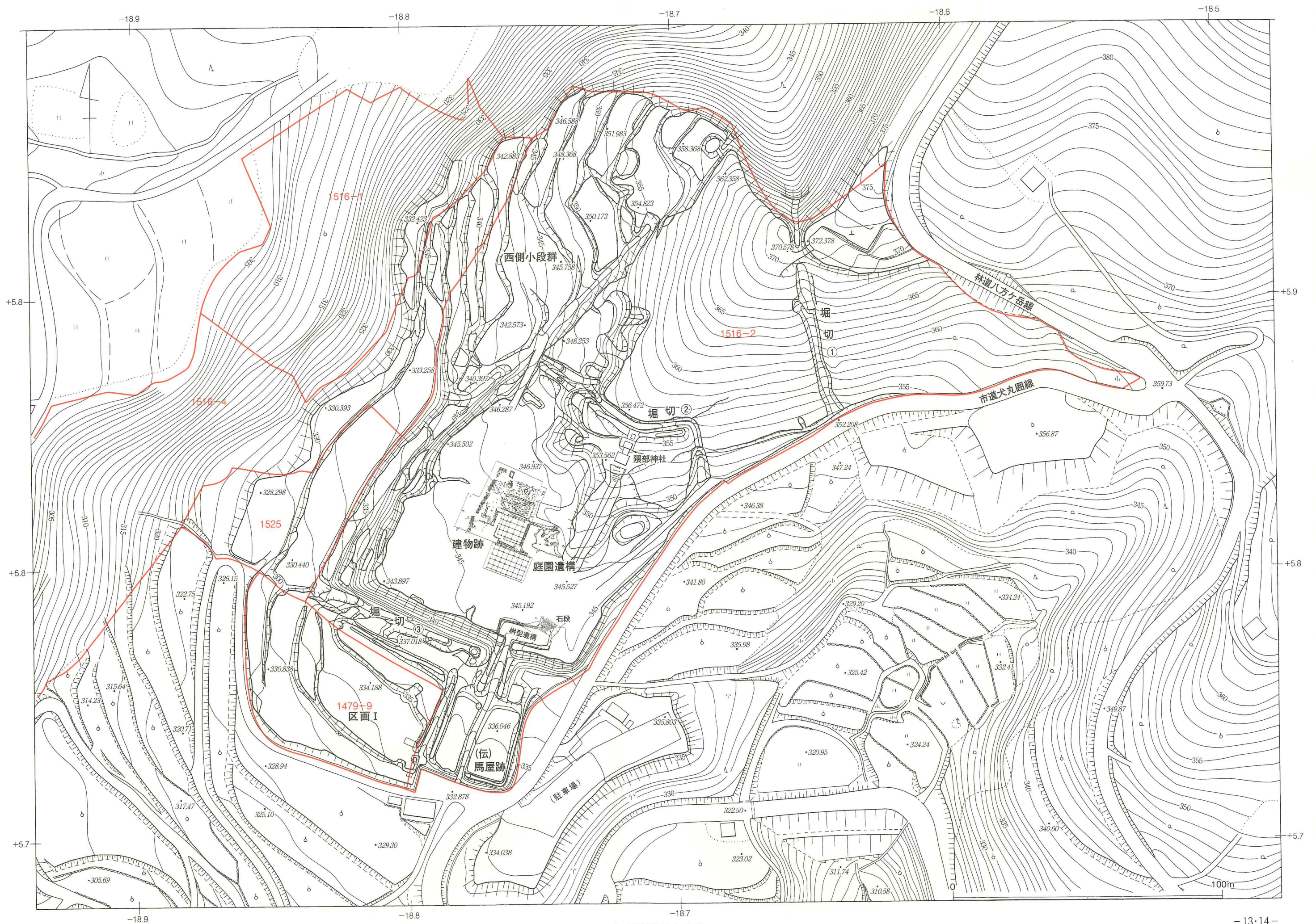
第4図 館関連地名位置図（上永野地区）



第5図 限部館跡・猿返城跡周辺地形図



第6図 限部館跡周辺地形図



第7図 限部館跡全体図

第Ⅱ章 隈部館跡

第1節 隈部館跡の現状

〔主郭〕 地形の変化点にあたる山腹の緩傾斜地を造成した広い平場である。長軸102m、短軸78～82mの長方形区画で、中央部の標高は345～347m。ただし、山付きの北東一角を、長さ・幅共に57m分を削り残す格好になっている。多分に地形の制約によるものと思われるが、尼崎博正教授は、この小山を「今に残る庭園の築山に見立てた可能性が高い」との見方をされる。その意味から、一部については、意図的な削り残しの可能性も残る。この小山には、昭和11年に隈部神社が建立されており、帯状に下る裾部は長さ35mの参道に利用されている。中心部は、標高353.5m、参道登り口の南側裾部との比高差8.0m。広さは、長径25m、短径11.5m、拝殿・本殿の裏面に石祠がある。

平場は、山付きの北東側と縁部の南西端で約2.0mの比高差を有するが、見た目に全くの平地である。削平の度合いは、特に東西方向で顕著である。中心部には、2棟の礎石建物跡があり、それらの北隣りも角礫の密集箇所があって、少なくとも1棟分が確認できる。

一方で、これらの建物群の東隣りに庭園遺構が残り、一帯は、館跡にふさわしい様相を呈する。山中にいる事を忘れさせる景観である。主郭の周辺斜面部については、尾根続きの北東側を除き、三方が急峻に削り落されている。西側斜面部には、小段と犬走りの様な帯状の削平地がある。

〔堀切③〕 主郭の南下を走行する大規模な堀切である。地形の第2の変化点となる主郭の段差下に造成されており、馬屋と接する東寄りに本格的な土橋の通路がある。堀切の長さは、土橋を境にして西側で70m、端部は開墾により壊れている。東側は市道の建設時に切られており、20m分が残る。図面上での計測値であるが、上場幅は西側で18～21m、東側で13m。堀底は、西側で全体幅12～6.0m、段堀で、一段低い主郭側の堀底は2.0m幅に狭まる。その上、細かく見ると障子堀の様に凸凹している。その部分の深さは0.5～1.0m、堀底は、土橋の西下寄りで標高336.50m。一方、段上りの南側の堀底は平坦面があり、幅4.0～6.0m。主郭との比高差は、南側の段堀で6.9m、北側で8.4m。これに対して堀切の南側肩部に積まれた土塁①と南側の段堀との比高差は1.4m。土塁は長さ38m、上場幅1.2～2.0m、下場幅3.5m。これから南下は、開墾が入っている。

〔堀切②〕 やや小規模な堀切である。隈部神社の真裏にあり、形状は、東寄りで南東側へ大きく折れ曲がり、あたかも電光堀^{でんこうぼり}の様相を呈する。底部は、中央部寄りで標高354.5m、上場幅5.0m、底部幅2.0m弱、堀壁の残存は極めて良好である。この堀切の両端部は堅堀に変化している。南東側の堀底は3段に分かれ、全長25m、上場幅は2.5～7.0m。下部にかけて漸次、末広がりとなるが、市道犬丸団線の工事の際に端部を切られている。一方、西側の堀底も3段に分かれ、全長27m、上場幅は最大で5.5m。3段目の造りは、かなりしっかりしており、長さ9.0m。この堀切②には、地形の下部にあたる南側に土塁が積まれている。土塁の高さは、東寄りで1.0m。

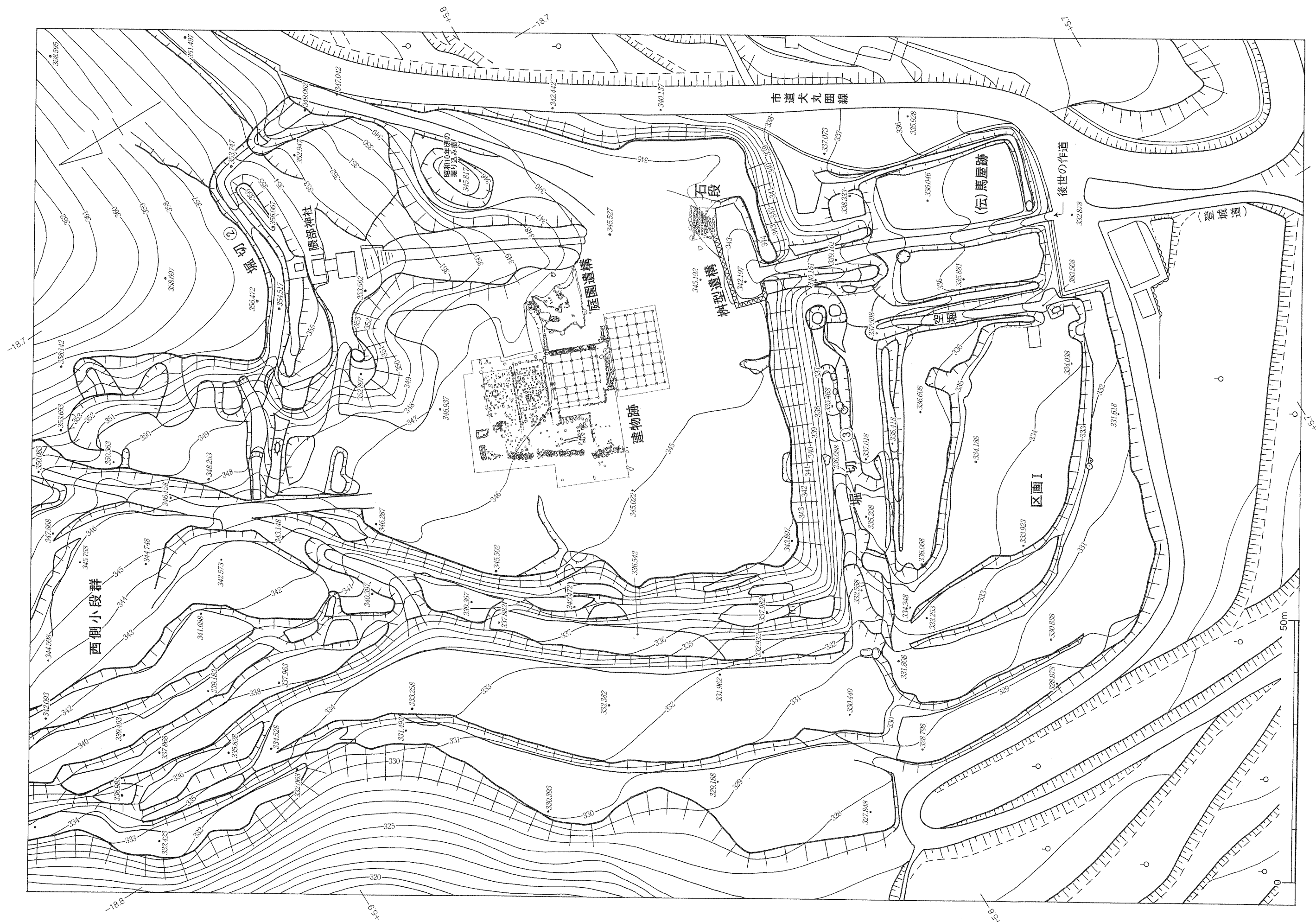
〔堀切①〕 堀切②から標高にして15m程登った標高370m箇所に造設されている。ここには、北西方向から大きな谷が尾根筋に食い込んでおり、堀切の設置箇所に相応しい場所である。谷部には、堀切から変化した堅堀が下っている。堀底幅は1.8m、標高370mから標高363mまで手が加えられている。一方、標高371mの尾根筋部分は、幅2m分が掘り残されて土橋のようになっている。これに対して、南南東側の山腹は、やや緩斜面をなすが、ここにも堀切から変化した堅堀が、標高352mの市道まで一気に下っている。

〔西側斜面部の小段群〕 主郭の北西隅から小道が下っており、これを境に山側の尾根筋に小段群が連なる。標高359～332mの間に、合計13段を数える。堀切②～堀切①間の尾根筋は全くの自然地形で、好対象の縄張りである。これからすれば、隈部館の向きは南西方向にあると考えられる。

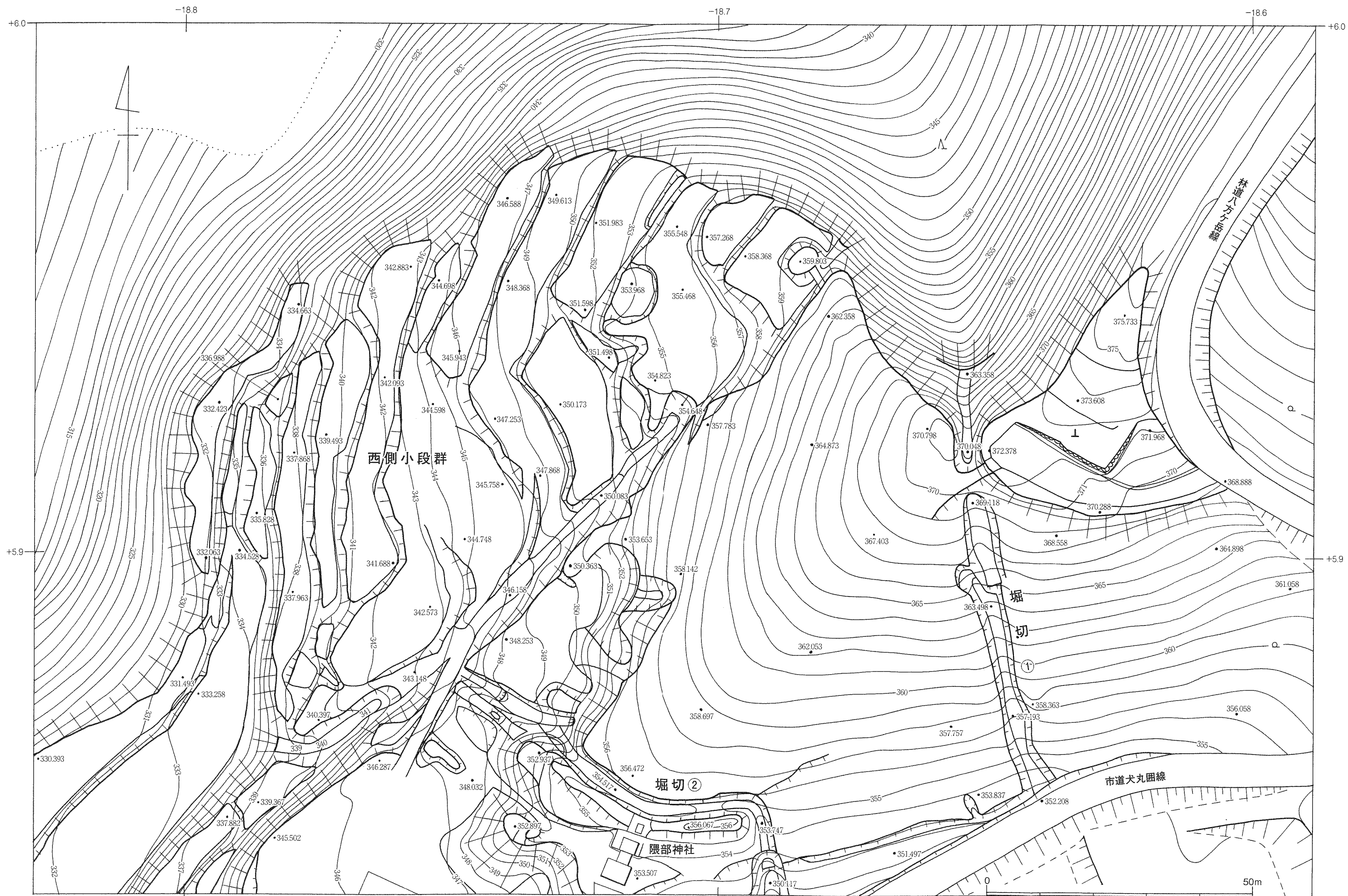
〔区画Ⅰ〕(伝)馬屋跡の西側区画で、間に空堀(登城道)を挟む。4ブロックに細分されるが、全体地形は長方形をなし、長軸63~68m、短軸39~50m。最上位は旧地形を保ち、北縁に土塁が残る。南北縁の比高差5.0m、主郭の南下に馬屋と区画Ⅰを配置すれば、縄張りとして上手く収まる。



隈部館跡航空写真 南→北



第8図 腰部館跡測量図①



第9図 限部館跡測量図②

〔(伝) 馬屋跡〕 主郭の南東側に突き出た区画で、標高336m、長軸27m、短軸24～26m。区画を東西に二分する通路は、後世に作業道として造られたのであろう。南縁を断ち割る凹道は木材の搬出路と考えられる。

注目される遺構に、土橋側を除く三方を巡る石垣がある。土塁を積み上げて、内外壁を積み石で化粧したものである。内壁の石垣の残りは大方、良好である。外壁にも所々に積み石が顔を覗かせているが、残存状態は悪い。いずれも、大小の自然石が野面積みされている。崩壊した積み石は、外壁に一部が散在するものの、大方、片づけられている。後世に転用目的で持ち去られたのであろう。

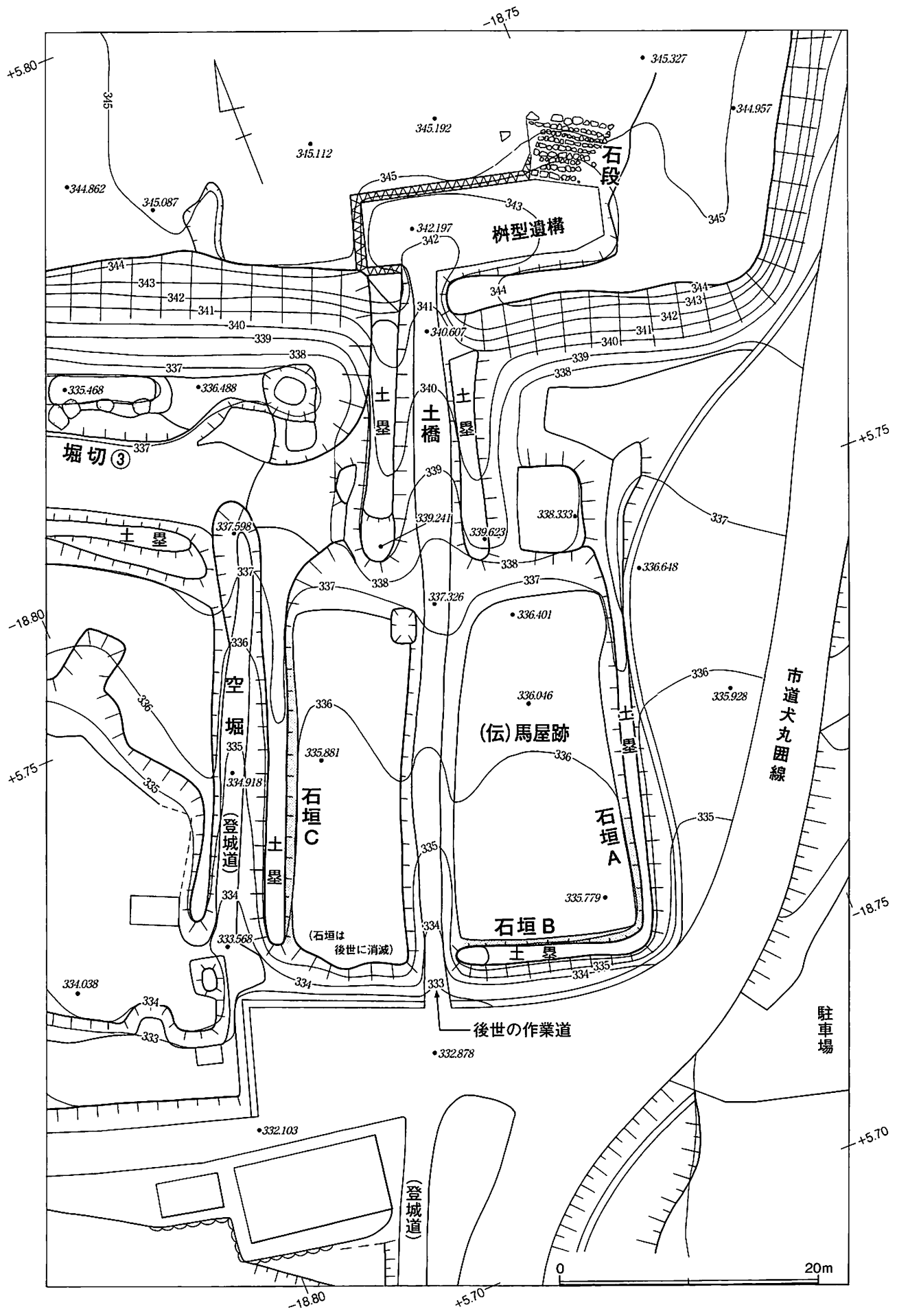
石垣A：東縁石垣で、長さ8.7m、最大の高さ1.0m弱。最大の積み石は、長さ0.7m、幅0.3mもある。崩壊が進んで上位ラインが凸凹している。

石垣B：南縁石垣で、通路から東側が残っている。長さ12.8m、最大の高さ1.0m、残存状態は良好で、今日、石塁としての体裁を残している。特に真中から西側半分は、大型の積み石が集中しており、堅固な造りの石垣となっている。積み石の中には、長さ1.0m、幅0.5mのものがある。図面を見ると、通路から西側部分の南縁は、後世に外側から削り取られている。この箇所の石垣は、この時期に全て消滅したと考えられる。

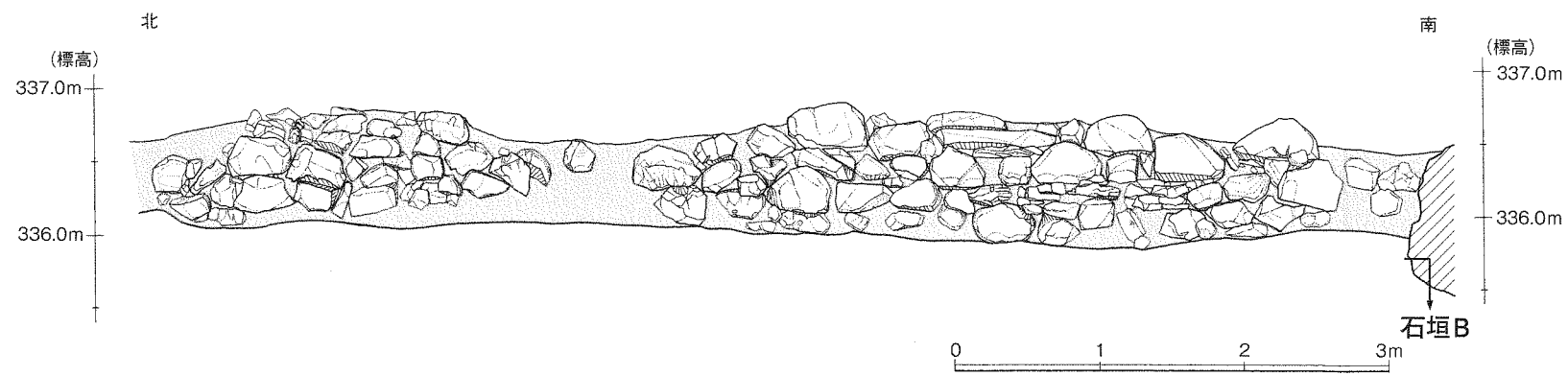
石垣C：大方の化粧石が崩落しており、石塁の保存状態は悪い。長さ23.7m、最大の高さ0.8m。積み石の中には、馬屋の積み石で最大のものがある。長さ1.1m、幅0.4m、横位に積まれている。近くから掘り出された大岩を、そのまま利用したのであろう。この石垣の外壁は、主郭へ至る空堀（凹道）の肩部にあたる。化粧石垣の積み石が一部に露呈している。崩壊した積み石の散在もある。なお、空堀の西側肩部には、積み石が見られない。



(伝)馬屋跡 東→西



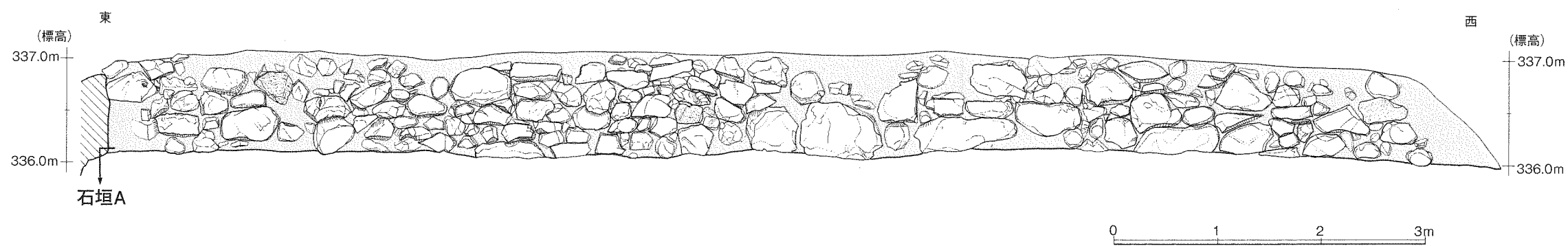
第10図 (伝)馬屋跡周辺測量図



第11図 石垣A実測図



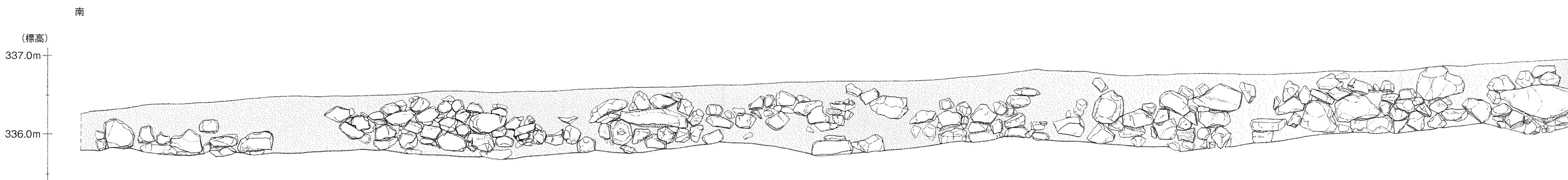
石垣Aと石垣B 南角



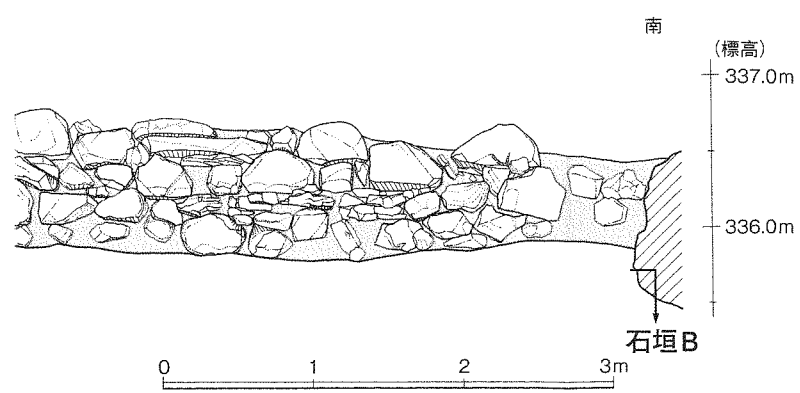
第12図 石垣B実測図



石垣B 西端



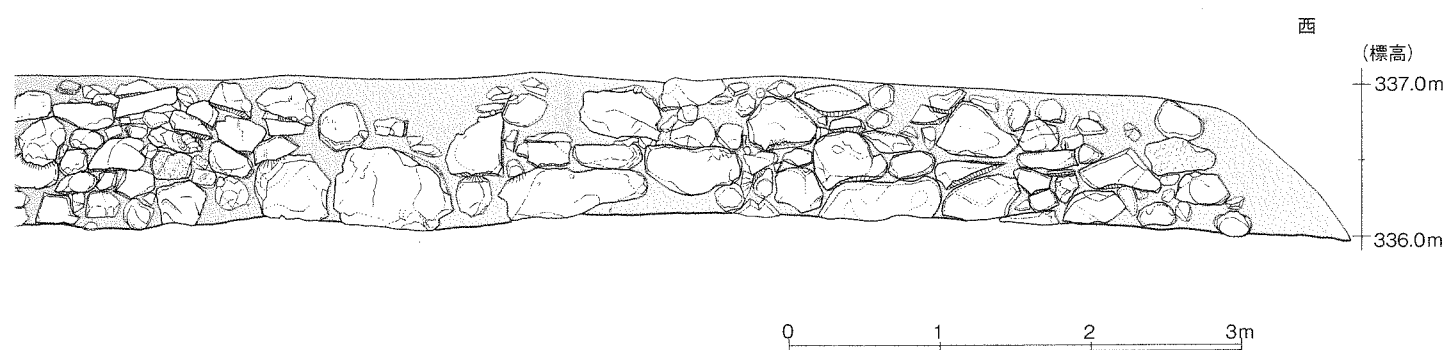
第13図 石垣C実測図



※石垣A・B・Cとも、スクリーントーンは、積み土を表す。



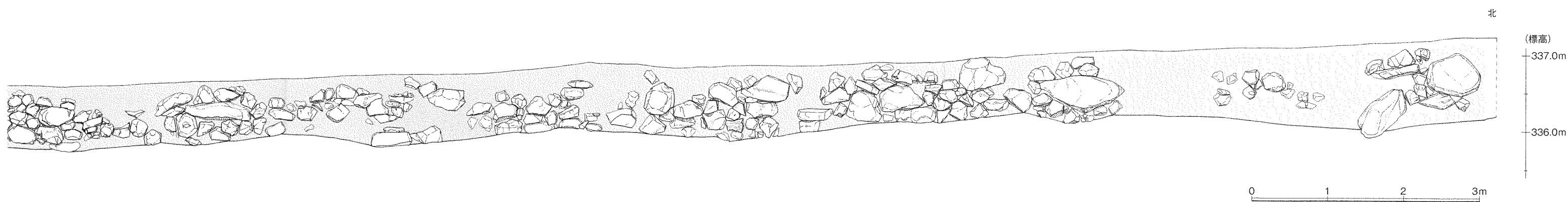
石垣Aと石垣B 南角



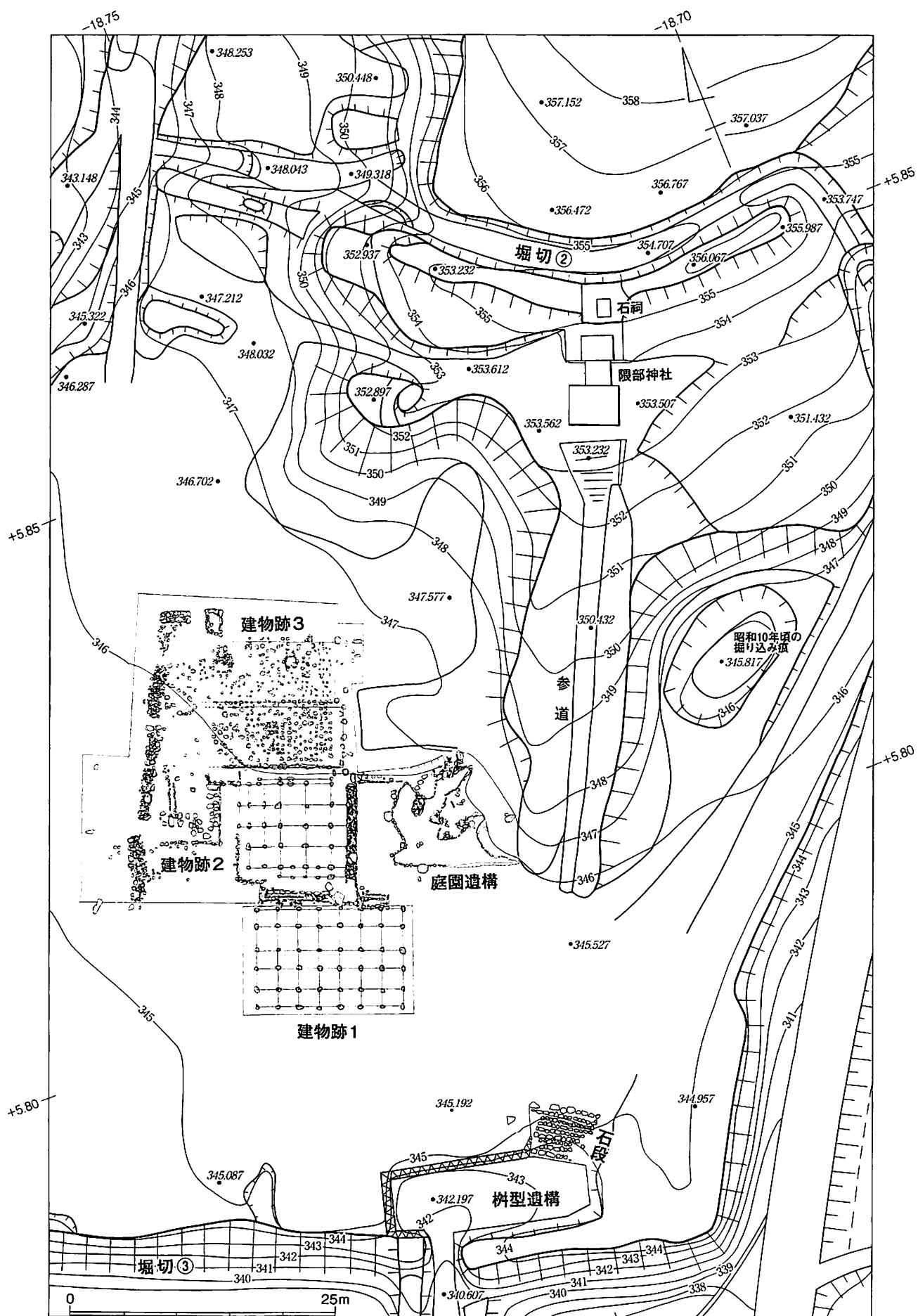
石垣B 西端



石垣C 北側



第13図 石垣C実測図



第14図 主郭平場～隈部神社周辺測量図



建物跡から見た庭園遺構



庭園遺構から見た建物跡

第2節 礎石建物跡

〔建物跡1〕桁行の標高は、北側で345.436m(西隅)～345.427m(東隅)、南側で345.362m(西隅)～345.252m(東隅)、ほぼ平坦な場所に建設されていることが分かる。

建物の構造は、梁間5間×桁行7間。桁行の方向はN22°W。規模は、梁間9.11m(30.1尺)、桁行13.79m(45.5尺)。梁間は、南から5.3尺—6.5尺—6.5尺—6.5尺—5.3尺。両端に5.3尺の広縁が付き、中の3間分(合計19.5尺)が部屋内(おそらく畳敷き)と推定される。対して桁行の柱間は、7間すべて6.5尺の均割りとなる。

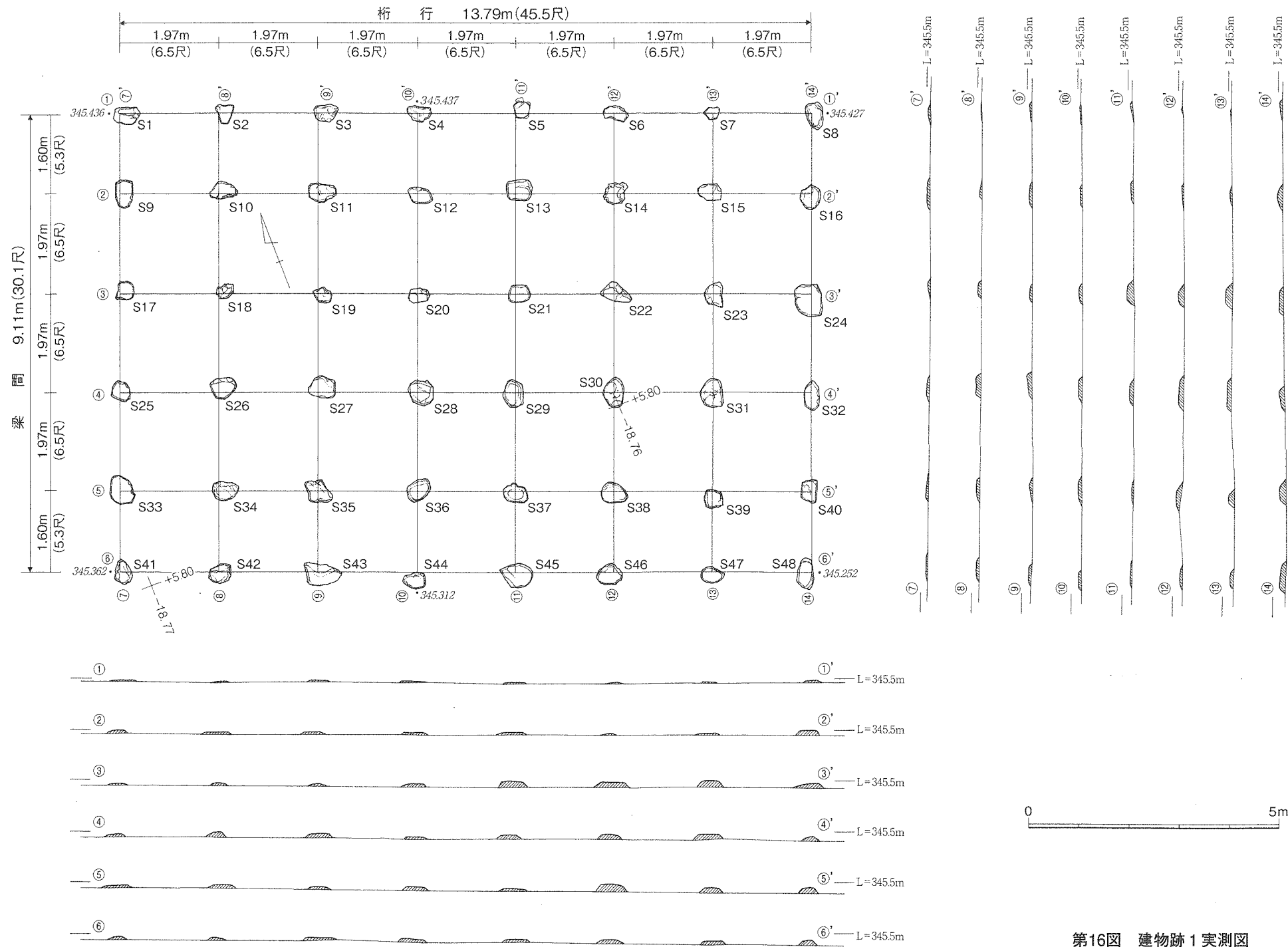
礎石は、北東側で扁平な小岩が用いられている。礎石の石質はS21のみが花崗岩である。他は安山岩。礎石の大きさは、ややバラつき、最大クラスでS22が長さ77cm、幅43cm。S30が長さ70cm、幅49cm。最小クラスはS18で長さ37cm、幅33cm。

建物の性格については、構造と規模から領主が来客と会うための公式な場の「主殿」と推定される。造りは、床・付書院を備えた正式な書院造りと推定される。屋根構造は「板葺き」や「こけら葺き」であろう。

根拠として、昭和49年度の発掘調査では、瓦片が全く出土していない事があげられる。建物跡1の時期は、想像される造りから、建物跡2・3と共に、隈部館の最終末にあたる16世紀半ばの親永時代と推定される。

一方、北側桁行の上段面には、間に雨落ち遺構1を挟んで建物跡2が並列する。比高差は、西隅で22.1cm、東隅で29.8cm。建物跡1は、発掘調査後に整備されて、地表面がアスファルトで固められている。

(注) 礎石建物跡の年代については、西島眞理子氏が本報告書の〔付論2〕で、親永時代の16世紀半ばと推定されている。



第16図 建物跡1実測図

〔建物跡2〕 標高は、北側で345.823m（西隅）～345.833m（東隅）、南側で345.657m（西隅）～345.725m（東隅）で、建物跡1と同様に、ほぼ平坦な場所に建設されている。

建物跡2の構造は、梁間4間×桁行5間（桁行は等間隔ではない）の本体部分に、3.0尺×21尺、3.0尺×13.0尺、1.5尺×22尺の張り出しが取り付けられている。

規模は、梁間7.88m（26尺）、桁行9.37m（31尺）。張り出し部分は、床・棚・付書院・水屋・道具収納棚、あるいは縁側と思われる。梁間は、6.5尺の均等割りである。一方、桁行は、庭園側より5.0尺—8.0尺—8.0尺—5.0尺—5.0尺となる。庭園に接した5.0尺分は「縁」ではないかと推定する。この建物も一間＝6.5尺を基準としている。庭園側に面した北側の隅柱礎石は、後世に何らかの理由で移動したものであると思われる。

礎石の石質は、建物跡1と同様にS66のみが花崗岩で、他は安山岩である。礎石の大きさは、最大クラスのS74で長さ83cm、幅51cm、最小クラスのS89で長さ32cm、幅28cm。

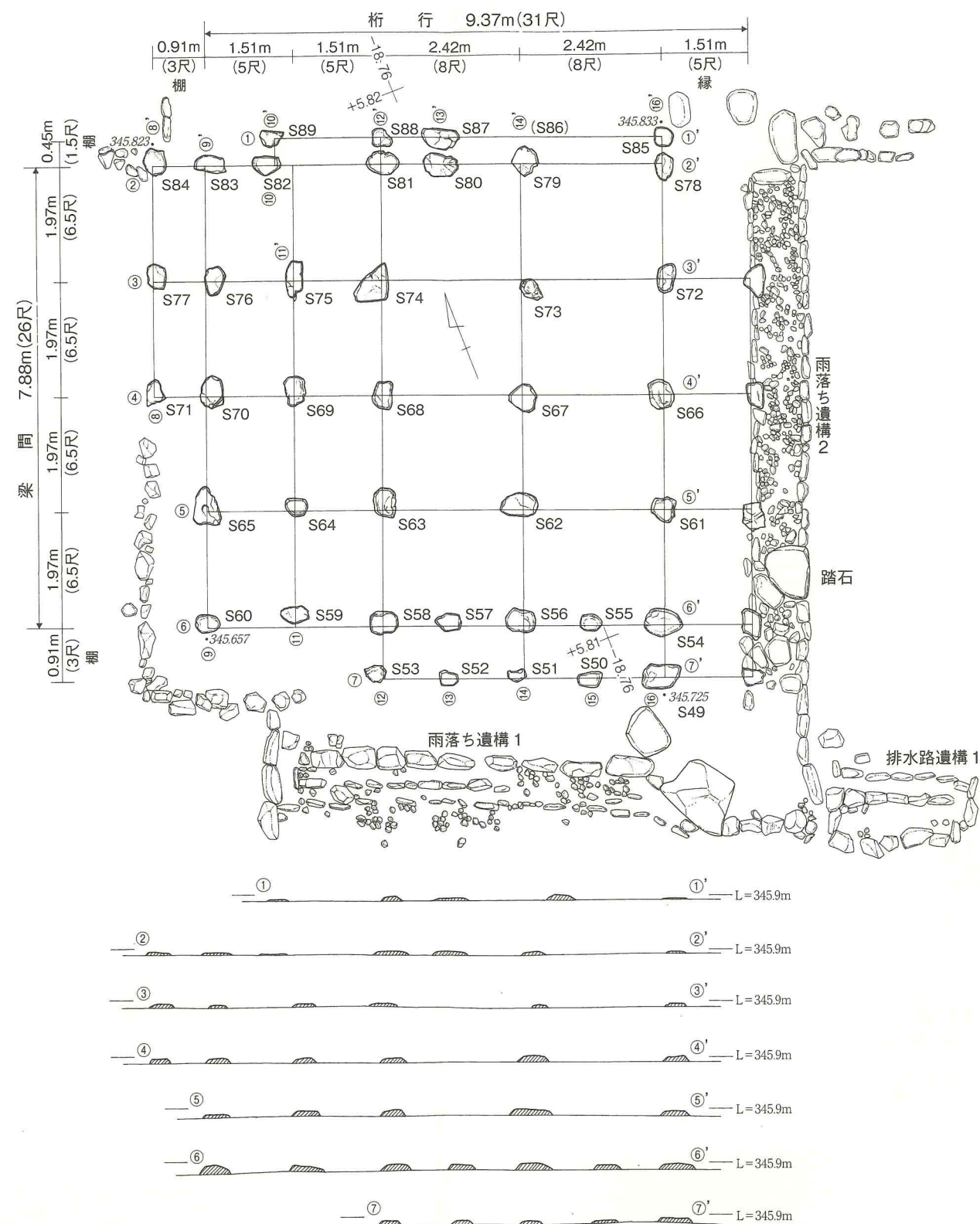
この建物の性格は、構造的に見て「会所」であったと推定される。「武家独自の社交や遊興の場の性格を持つ空間」との考えである。親永は、この建物に來客を招き入れ、四季折々の庭園を鑑賞しながら、連歌や茶の湯を催したのであろう。

後述するが、雨落ち遺構2に組み込まれた踏石の存在は、会所と庭園の強い結び付きを示唆している。会所の縁側から下りて庭園に佇む親永の姿が目浮かぶ様である。

〔雨落ち遺構1〕 建物跡1と建物跡2の間にある。長さ6.5m、幅1.0m。北縁に9個の小岩（長さ80cm、幅40cm～長さ50cm、幅30cm）を縁石として並べるが、南縁は、単に小振りの川原石の配列に留まる。

〔排水路遺構1〕 建物跡2の南東隅にあり、長さ2.6m、幅0.6m、側石には、細長い川原石（長さ40cm、幅15cm程度）が使用されており、南北両縁とも6個を数える。

〔雨落ち遺構2〕 庭園遺構に面する建物跡2の東側にあり、長さ11.3m、幅1.0m。両側の縁石は、細長い川原石（長さ40cm、幅10cm程度）が配列されている。床面には小さな川原石がびっしり敷き詰めてある。南端寄りには、庭園に下るための踏石（長さ90cm・幅75cm）が組み込まれている。

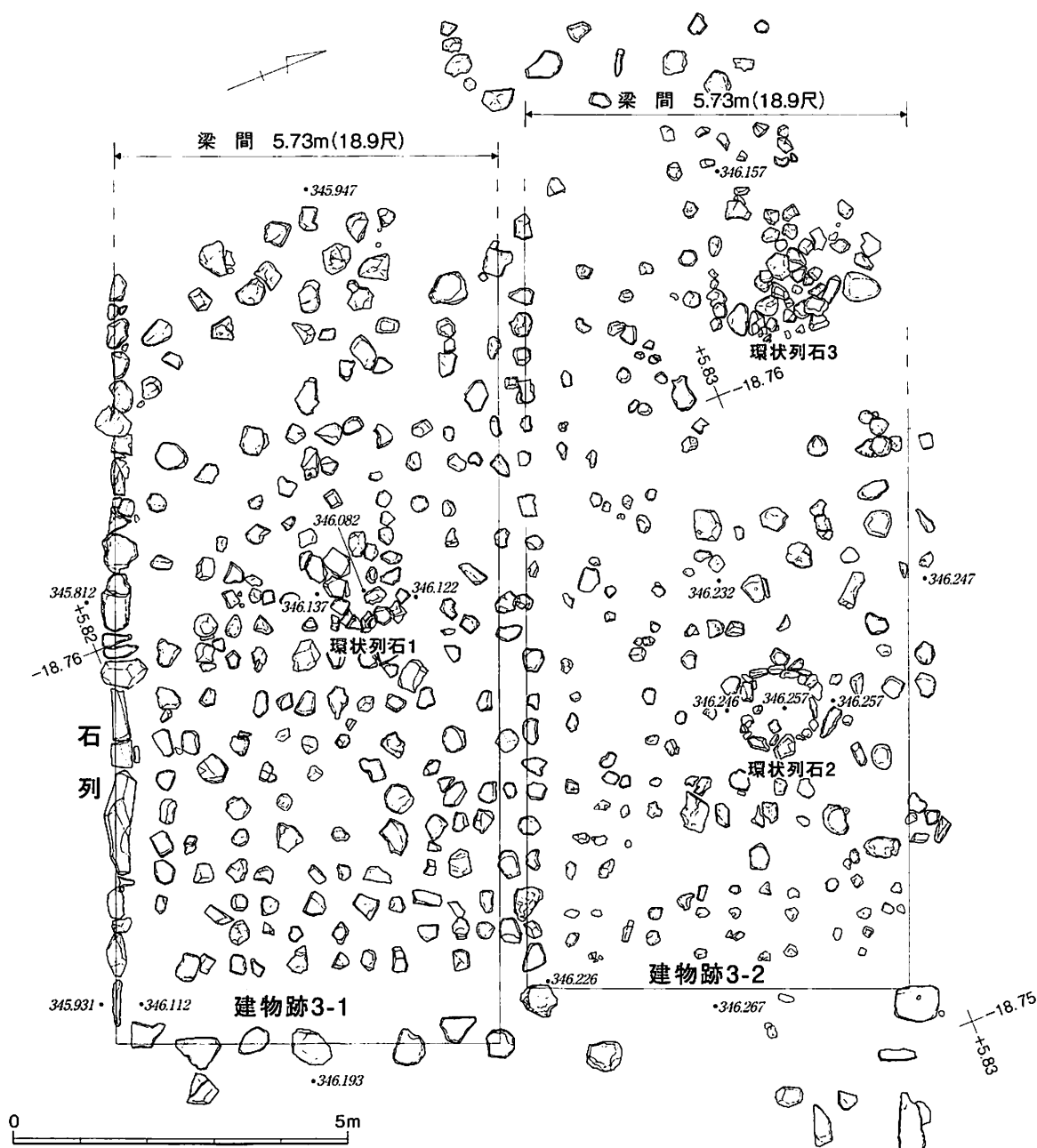


第17図 建物跡2実測図

〔建物跡3〕 標高346.267m～標高345.947mの範囲に、角礫（安山岩）が密集した状態にあり、長方形の区画を造り出している。梁間3間（5.73m・18.9尺）の建物が2棟分あるように見える。しかし、柱位置は明確でなく、裏返った角礫もあり、後世の移動や持ち去りも考えられる。建物跡3の構造は、転ばし根太を角礫に絡ませて固定した上で床張りをした可能性もある。建物跡2の北東縁には、長さ11.3mの石列がある。扁平状の小岩を縦に起こしたもので、高さ30～35cmの石壁ができています。

3カ所の環状列石については、その形状から炉跡と思われる。竹下輝幸氏（山鹿市文化財保護委員長）の示唆によれば、調査者の桑原氏から聞いた話として「類似の遺構が矢部の浜の館から検出されている」との事である。この建物跡3は、親水の私的空間で、食事をするような「台所」や「居間」であったと思われる。

環状列石：1は、角礫が密な南側の建物跡3-1内にある。直径は南北1.3m、東西1.5m。2は、角礫がやや疎の状態の建物跡3-2内にある。直径1.3m、南西隅がやや角張る。3は、建物跡3-2に認められるものの、形が崩れている。

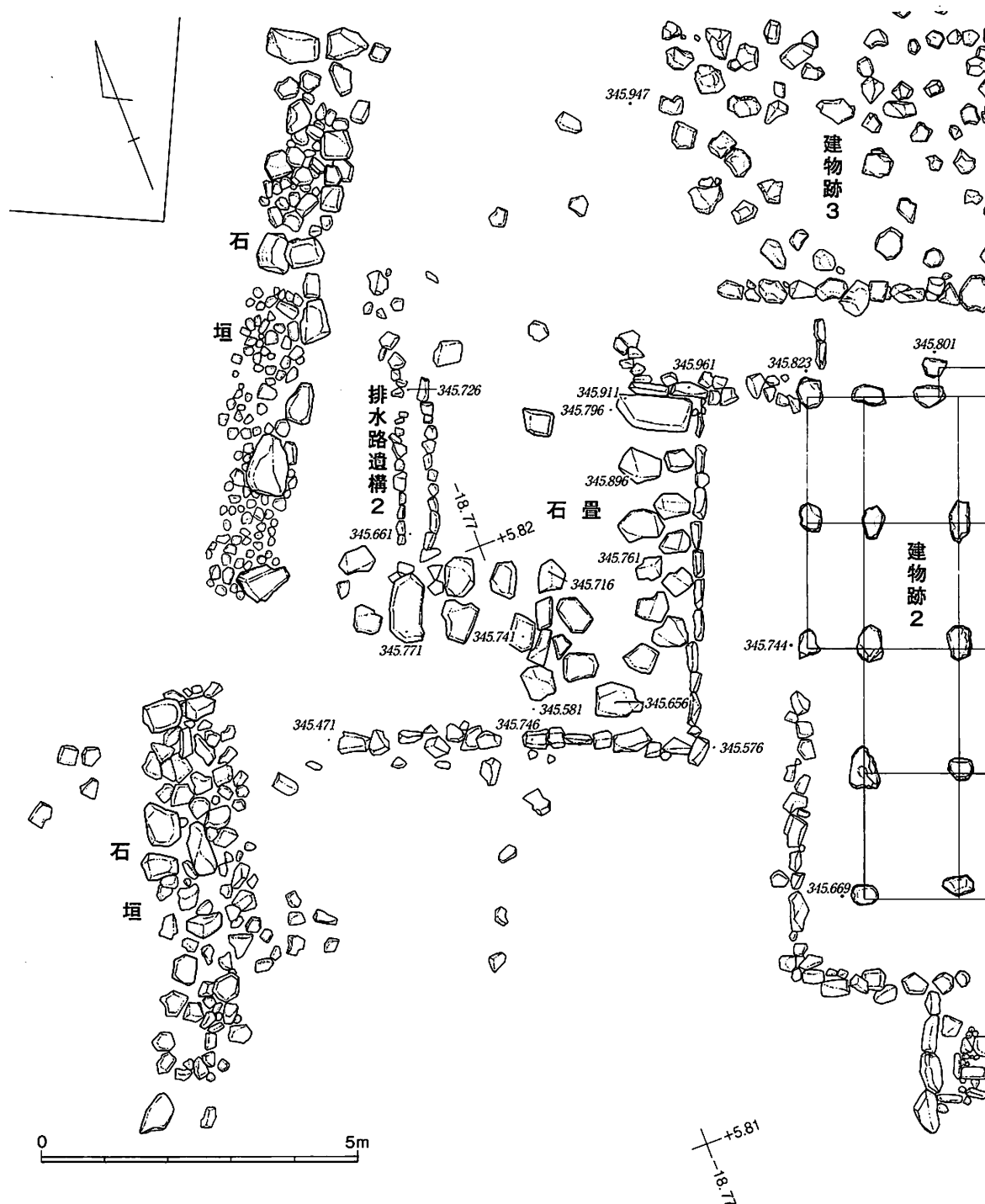


第18図 建物跡3実測図

〔排水路遺構2〕石畳の北西側にあり、長さ3.0m、幅0.6m。側石には、細長の川原石が使用されている。館時代は、もっと北側へ延びていたことが予想される。

〔石畳〕建物跡2の北西側に敷かれた石畳である。礎石クラスの小岩が使用されて重厚な造りとなっている。

〔建物北西縁の石垣〕部分的に壊れているが、4か所を繋ぎ合えると長さ28.3mが復元できる。北縁部は鍵型に折れ曲がり、石垣としての体裁を残す。長さ3.0m、上場幅1.1m、高さ1.2m。この石垣の1.4m先には、別の石垣が直行する。長さ2.5m、上場幅1.7m。両石垣の隙間は、建物跡3への出入り口であろう。



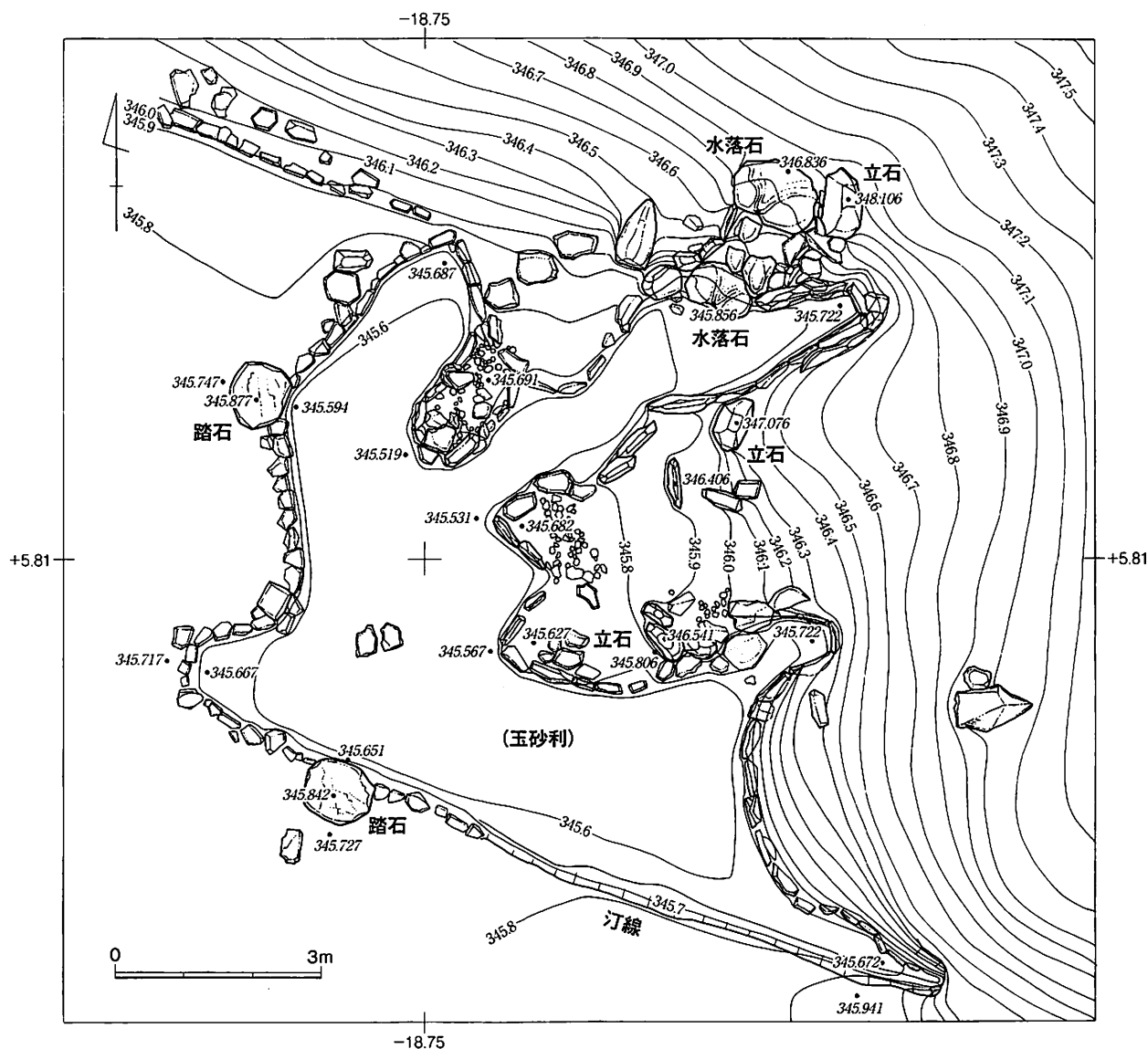
第19図 石畳実測図

第3節 庭園遺構

江戸時代に編纂された『肥後国誌』に、猿返城跡の事として「此城跡大手舁形ノ跡城ノ礎石并若殿ノ部屋ノ跡庭石泉水ノ跡花園ノ跡等于今歴然タリ」との記述がある。ここでの猿返城跡は、隈部館の事である。昭和49年の発掘調査時でも、検出地点においては、池跡の様な水たまりの窪地が恒久的に存在しており、その縁に立石の一部が顔を覗かせている状況下にあったとされる。そこで、調査者の桑原憲彰氏が、当初から狙いを付けて調査に取り組んだとの事である。その結果、池底には土砂の沈殿も検出され、立石なども完全な姿で検出された。ただし、導水路については、一部を検出したものの、東端が隈部神社の参道下にかかる所から、この部分については、未掘のままで終わっている（当時、調査に参加した竹下輝幸氏からの示唆）。

〔現況〕主郭平場の北東隅からは、小規模な尾根筋が張り出している。これは堀切②で断ち切られた尾根筋の残丘部分で、丘頂には今日、隈部神社が建立されている。神社の標高は353.562m、小境内から参道が平場へ直線的に下っている。裾部の標高は345.527m、この裾部の西側に庭園遺構がある。さらに、庭園遺構の西隣りには建物跡2、南西側に建物跡1、北西側に建物跡3が存在する。

庭園遺構は心字形をしており、建物跡2の雨落ち遺構2とは2.5mしか離れていない。雨落ち遺構の中には、長さ90cm、幅75cmの扁平な小岩があり、建物2から庭園に下りる踏石と思われる。



第20図 庭園遺構実測図

庭園遺構の規模は、現況で長さ13m、幅11m、ほぼ東西方向に主軸の向きがある。調査時の所見からすれば、東西の長さは、さらに参道下の東側へ延びる事になる。池を主体にした庭造りで、北東側の残丘は、築山に見立ててある。池の縁は、大半が小岩で縁取りされているが、南端の東側部分が単なる掘り込みの状態で行われている。この箇所は、後世に縁石が剥ぎ取られたものと思われる。平面的には、溪谷を2箇所に行造り、滝口に立石と水落石が存在する。水落石には、雨水が流れた痕跡が認められる。これにより、雨水の一部は、確かに上段の北側から池に流れ込む造りになっている事が分かる。これに東側からの導水が加わるので、雨天時には十分な水が池に溜まったと考えられる。この事は、先に述べた池底からの土砂の検出からも裏付けられる。

背後の残丘を築山に見立てることにより、庭園全体に奥行きをもたらし、ゆとりのあるものになっている。池の西縁と南縁には、雨落ち遺構2と同様にそれぞれ踏石が配してある。庭園遺構の残存状況は、極めて良好である。尼崎博正氏は本報告書の〔付論1〕で「隈部館跡庭園遺構は戦国期居館の基準である方一町を強く意識して計画され、機能分化された空間構造の「ハレ」の場の「奥」の会所の庭園として築造されたものと推測される」と記しておられる。

第4節 (伝)富田安芸守屋敷跡

隈部館跡の南西下に位置しており、古くから隈部氏家老の一人「富田安芸守の屋敷跡」として語り継がれてきた(注1)。隈部館跡から登城道を少し下った(伝)大手門付近にあり、山腹の一角が造成されて平場が確保されている。この地は、周辺地と同様に昭和40年代初期にミカン畑に開墾されたが、屋敷跡の平面プランにそれ程の変化はないとされる。

長方形の平場は、南北方向に主軸の向きがあり、長軸44m、短軸は北縁で27m、南縁で22m、中央部の標高は293.5m、隈部館跡の主郭南縁との比高差は50m。(伝)馬屋跡から登城道を下ると7～8分の程無い距離にあり、開墾前は、平場の北側寄りに一棟分の礎石建物跡が存在していた。桁行方向は東西方向にあり、個々の礎石は隈部館の主郭の主殿建物跡よりも一回り大きかったらしい。これらの礎石は、開墾時に平場が50cm近く地下げされたので、その際に全て撤去された。

今日、平場北縁の残存石垣が、屋敷跡としての面影を残している。土塁の両側面に自然石を野面積みした石垣で、隈部館跡の(伝)馬屋跡や米の山城跡の山頂直下にも見られる。したがって、大方の積み石が欠落した石垣ラインは、土塁のような景観を呈することになる。A～C箇所は、屋敷の内側に積まれた南面石垣である。A箇所は、長さ5.30m、高さ1.25m。東西両側が壊れている。積み石は全体的に大振りで、大石が10個を数え、根石に長さ125cm、幅40cmのものがある。この箇所は積み石が大きいために、かなりのインパクトがある。B箇所は、長さ4m分が壊されている。屋敷への出入り口に見えるが、後世に断ち切られた作業道である。C箇所は、長さ17m、上場幅1.7m。積み石の崩壊が進んでいるために土塁そのものに見える。積み石に大石はない。D～G箇所は、屋敷の外側に積まれた北面石垣である。D箇所は、長さ2.7m、高さ0.85m。最大の根石は、長さ120cm、幅40cmの大きさがあり、この上に、A箇所よりも小振りの積み石が乗っている。E箇所は、D箇所の東端からの張り出し石垣で、長さ1.25m、角隅の高さ0.8m。復元すれば凸の石垣となる。F箇所は、長さ3.15m、高さ1.1m、積み石はやや小振りで、長さ45cm、幅15cm程度のものが積まれている。残存状況は比較的良い。G箇所は、F箇所から6.2mの所にあり、部分的な残存である。長さ1.7m、高さ0.7m。

屋敷跡の東側は、舌状形の小山が壁をなしている。小山の最高所は、301.726m、屋敷跡との比高差は8.2m。隈部館跡の主郭方面から下る小尾根で、北端部は堀切で断ち切られている。その組み合わせは、主郭の庭園と隈部神社が建立された小山に類似する。屋敷跡と小山の間には、低平な带状削平地(比高差1.3m)が

あり、ここに「丈比べ石」(注2)と称される自然石がある。高さ1.8m、基底部の幅1.4m、先端部が尖っており、形状は、主郭の庭園遺構の立石に似かよる。小山の上面域は、主軸方向の南側に向けて7段にカットされているが、上位2段の削平の度合いは、非常に低い。全体の長さは107m、最上段と最下段の比高差は15m。上位部分の甘いカットは、開墾時の粗い造成であろう。小山の上段域には、上面が窪んだ大岩が座っている。長さは下場で4.5m、上場で2.35m、上場幅1.5m、側面に繁る5本に枝分れした樹木の存在もあって、岩の窪みの溜まり水は、年中、枯渇しないと伝えられる。地元では、この溜まり水を「鷹の水」と呼んできた。館時代の鷹狩りに関連した伝承とされる。

これらの事から、主郭と同様に屋敷跡にも庭園が造られていた可能性がある。実際、東 亮憲氏(地元の郷土史家)が作成された「隈部館の見取り図」には、この箇所に「庭園跡」との書き込みがなされている。ただし、確たる伝承ではない。

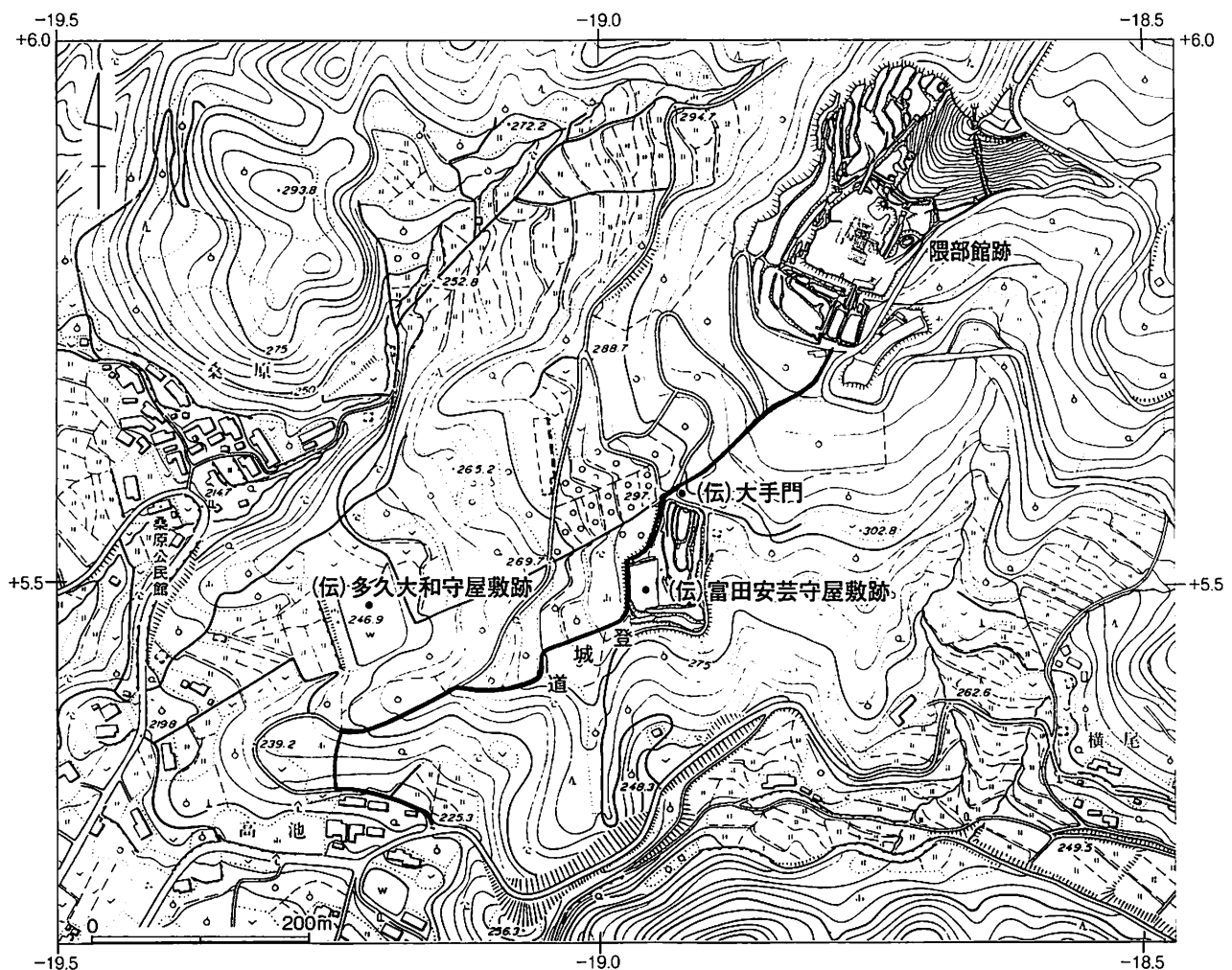
なお、屋敷跡の西縁下を通る野道は、隈部館跡への正式な登城道とされるが、この事が事実とすれば、南面石垣A箇所の西側に門構えがあったことになる。さらに屋敷跡の西縁にも石垣が積まれていたことになるが、遺構は観察できない。一方で、登城道については、多久大和守屋敷を経由する登城道もある。

(伝)多久大和守屋敷跡

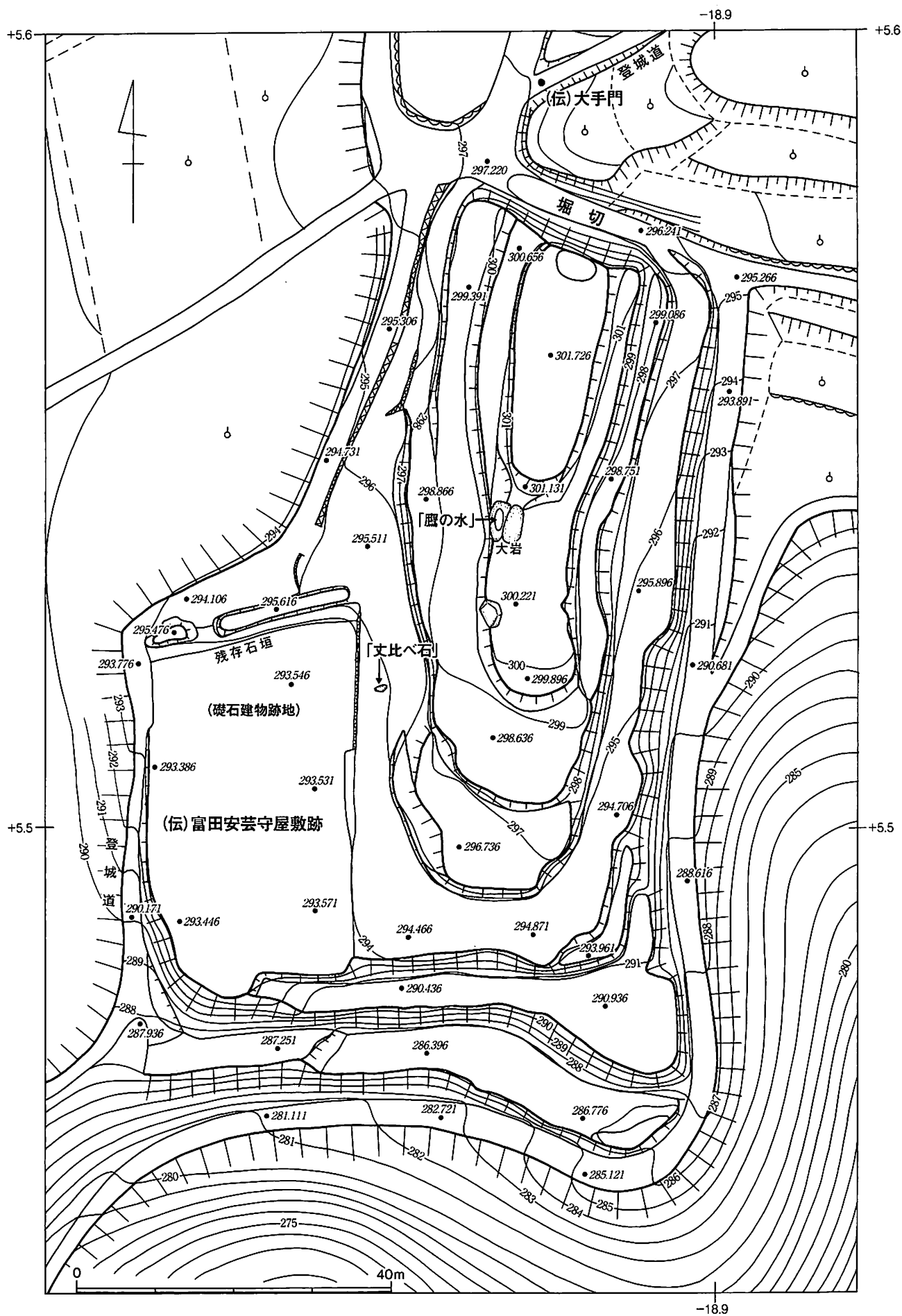
もう一人の隈部氏の家老である多久大和守の屋敷跡が伝えられる。ただし、この地は、大正年間に掘削されて溜め池となっている。富田安芸守屋敷跡の南西方向にあって標高246.9m。両屋敷跡の比高差は46.6m。

(注1)屋敷跡の様子については、上永野地区在中満二人氏・中満宜道氏などから示唆を受けた。

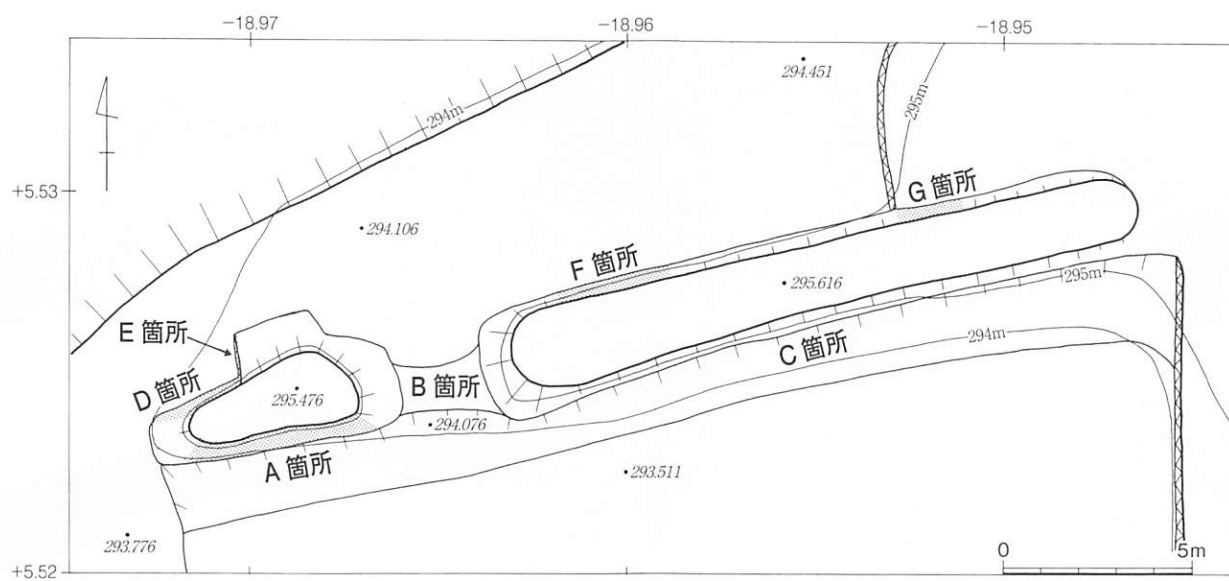
(注2)「丈比べ石」にも、二つの伝承が残る。故木庭春生氏(地元の郷土史家)は「この岩より背丈が大きくなると、隈部氏の兵士として徴兵された」。中満二人氏は「この岩より背丈が大きくなると、館に上がる駕籠屋さんに採用されなかった」。



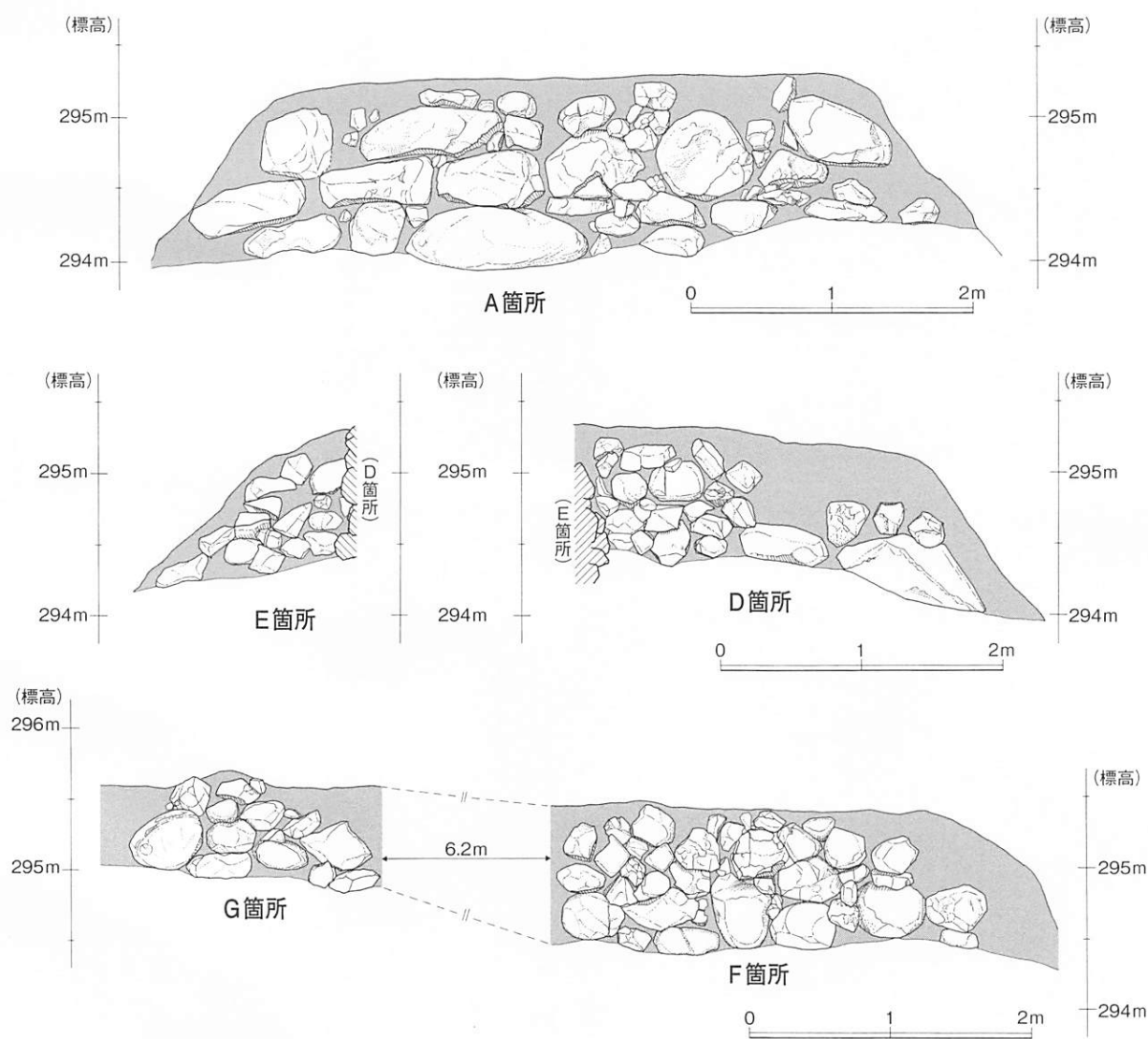
第21図 隈部館跡・(伝)富田安芸守屋敷跡周辺地形図



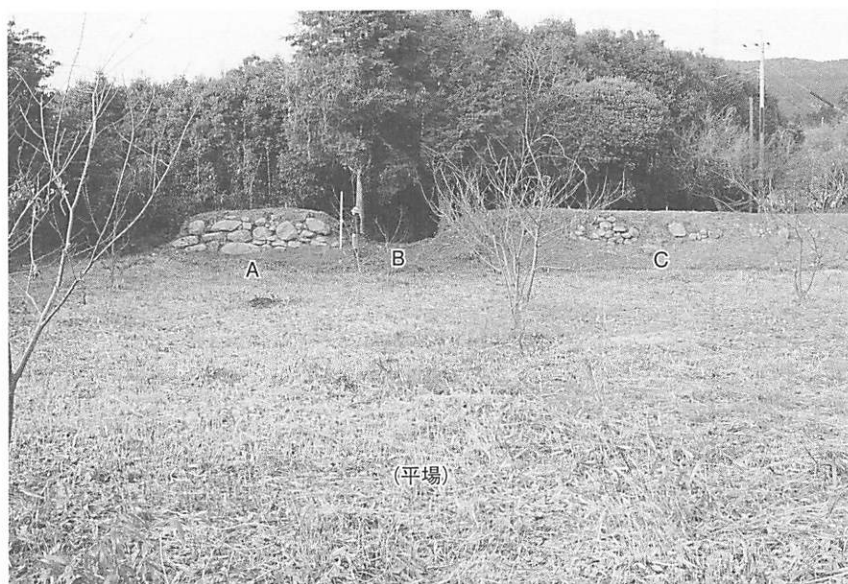
第22図 (伝)富田安芸守屋敷跡測量図



第23図 (伝) 富田安芸守屋敷跡 石垣位置図



第24図 石垣実測図



(伝) 富田安芸守屋敷跡 (平場)
と北縁の残存石垣



丈比べ石



大岩の「鷹の水」

第Ⅲ章 猿返城跡

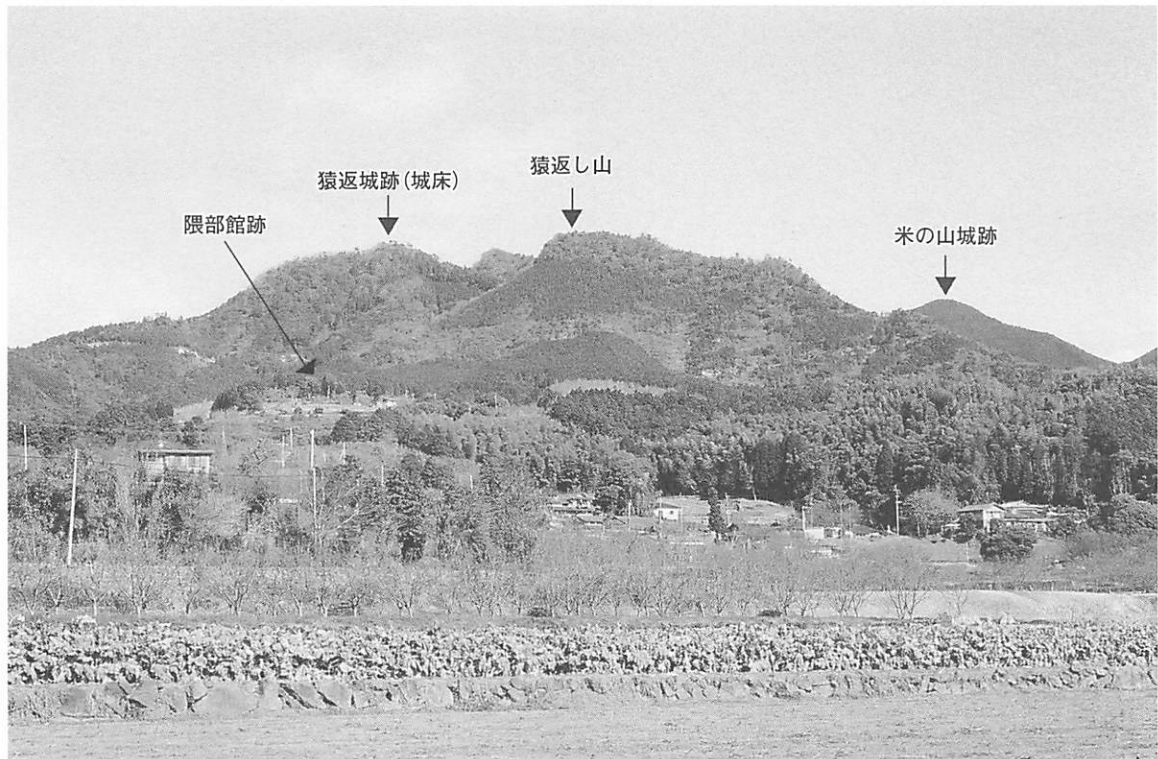
第1節 猿返城跡へのアクセス

標高682.4mの山に築かれた砦跡である。「猿返城」の城名は『肥後国誌』に見る様に、隈部館と砦箇所の総称であるが、今日、地元では、山頂の砦を「城床」、山腹の平場を「隈部館」と呼び分けている。

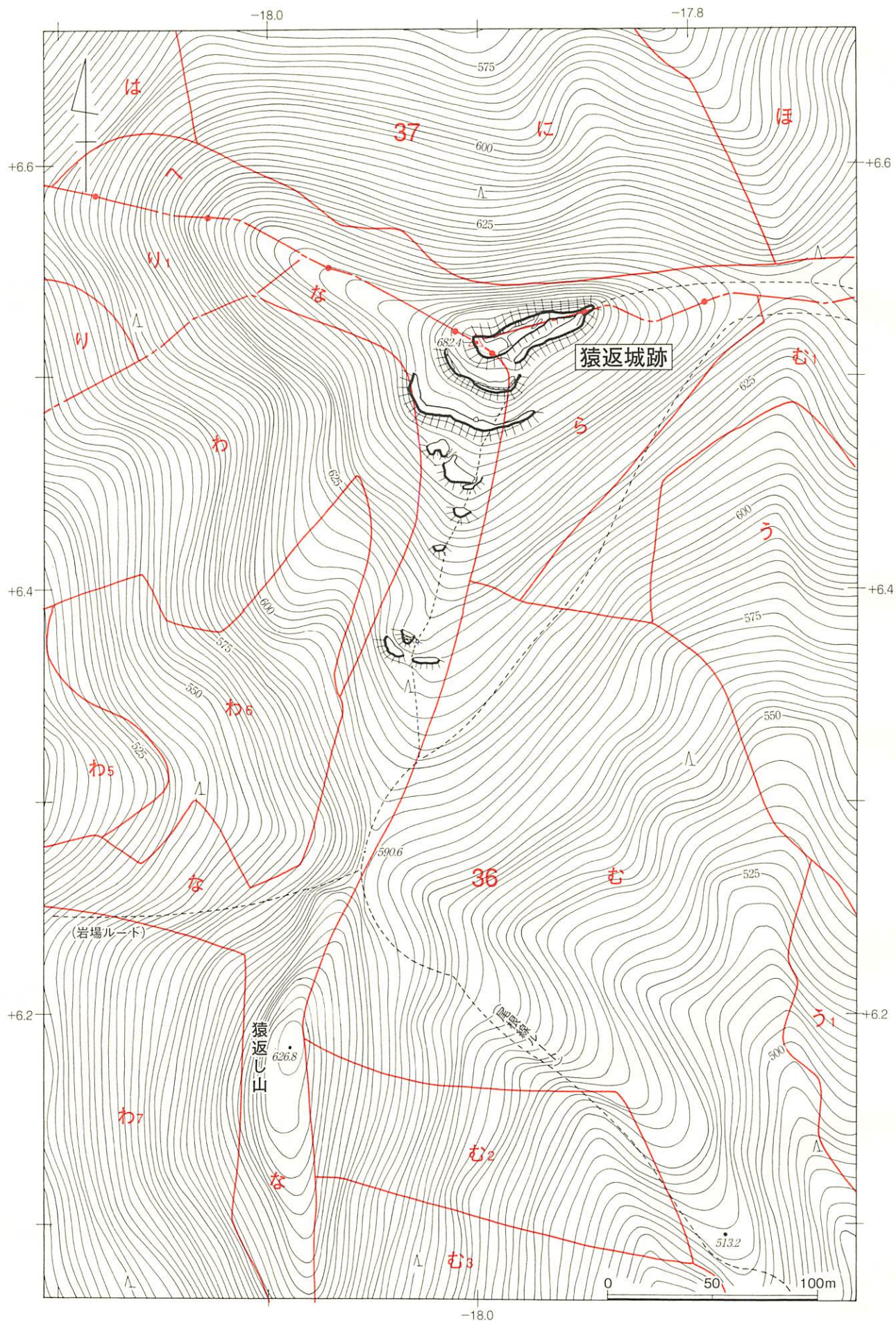
地形的には、館跡との比高差が337mもあり、台形をした山谷は、さながら楯の様相を呈する。登城道は、館の裏側から山付きの急な北東斜面に登攀する岩場ルートと、館の北縁から東へ1.8km回り込んだ谷部から、尾根を直線的に登る2ルートがある。猿返城跡は、隈部館の背後の守る砦で、山頂から標高619m強までの南側山腹に遺構が残っている。

岩場ルート：館の裏側からの山道であるが、途中から登るのにも下るにも困難が伴う程の岩場ルートに変化する。物資の運搬には不適で、緊急連絡路であろう。

尾根線ルート：林道横尾線（林道八方ヶ岳線の枝道）の途中に登山口がある。そこから谷部を下れば上^{かみかこい}圀地区へ出るので、本来の登城口は上圀にあったことが分かる。今の登山口から小さな谷川を跨ぐと、4m幅の尾根線を直線的に登る事になる。尾根の北斜面は絶壁で、15分も登ると山腹の切れ目がある。削平地らしき場所があり、地形的にも堀切が埋没している可能性がある。西縁には2つの巨石が座っている。これから先は、つづら折りの山道になり、ほどなく猿返城跡と米の山城跡を結ぶ山道に上がる。最後に二又道を左に折れて、急な山腹を登りきると猿返城跡の山頂に至る。山道は、急傾斜で登るのに楽ではないが、物資の運搬が可能である。山頂までの所要時間は、約45分を要する。



隈部館跡・猿返城跡 遠景
(高池集落南西下の畑地より)



第25図 猿返城跡周辺地形図および林班図

第2節 縄張り

〔山頂（Ⅰ郭）〕山頂部分には平場があり、北縁に土塁が積まれている（最高所は標高685.82m）。土塁の北縁下は、高さ240m程の絶壁となる。非常に風が強いところで、春先には、毎日のように深谷から強風が吹き上げる。平場は帯状をなし、東西方向に主軸の向きがある。全体規模は、長さ37.5m、幅11.5～4.0m。西端から東側へ13.5mの所で、0.8m強の段上がり箇所があり、平場が細分（Ⅰ郭－1・2）される。

Ⅰ郭－1：東側から西側への緩傾斜地で、比高差は0.8m。幅は11.5～5.5m、北西隅に三角点（682.4m）があり、場所的にも、砦の中心をなす区画である。

Ⅰ郭－2：中央部の幅は3.5～4.0m、ほぼ平坦地で、東側寄りで深さ10cmの窪地箇所がある。小空堀の埋没も考えられる。

土 塁：基礎部分は、地山の意図的な削り残しと思われ、米の山城跡の山頂に築かれた土塁に似ている。長さ21.5m、最大幅2.0m、高さ1.3m強。上場は、長さ6.0mの中央部分から東西両側へ緩傾斜する。比高差は東端で0.5m、西側で1.6m強。東端は、痩せ馬地形となって鞍部側へ下り、程なく急な岩場に吸収されている。

Ⅰ郭－3：Ⅰ郭－2との比高差3.7m。長さ40m、幅1.0～5.0m。ほぼ平坦地で南東隅に小土塁らしき痕跡（高さ10cm）が確認できる。位置的にもⅠ郭－1・2の補充的な平場と考えられる。

〔Ⅱ郭〕標高676mラインに残る弧状の平坦な平場である。南西側に張り出し、東西両側がすばまる。両端を結んだ直線の長さは37.5m、平場の南北幅は4.0～5.0m。南縁には土塁が積まれているが、中央部に崩壊箇所がある。遺構の残存から、Ⅱ郭には土塁を伴った空堀が存在したことが分かる。今日、埋め土の平場部分が2～3m幅で、土塁の上面幅は1.5m。特に、旧地形がはっきりしているのは南東側で、土塁の高さは0.5m弱。散兵線を思わせる遺構である。この空堀は、城を破棄する時、意図的に埋められた感じがする。

〔Ⅲ郭〕標高665mラインに残る弧状の平坦な平場で、Ⅱ郭と同じ向きにあり、同一の形状をしている。ただし、規模は遥かに大きい。両端を結んだ直線の長さは60m、平場の南北幅は、大方3.0～5.5m、東側寄りで1.0～2.5m幅に狭まる。但し、いずれの箇所も南縁に土塁状の高まりはなく、単なる平場の様に見える。これについては、土塁が完全に取り壊された可能性もある。中央部寄りの東側には、巨岩が座っている。腰曲輪の様な遺構である。

〔Ⅳ郭〕標高653mと654mラインに残る段違いの平場で、西側は一段高い。

Ⅳ郭－1：標高653mラインにあり、東西の長さ15m、南北の幅は最大で8.0m。東縁は土塁状に一段高くなっている。この箇所は、高さ0.2m強、南端の上面幅4.0m。

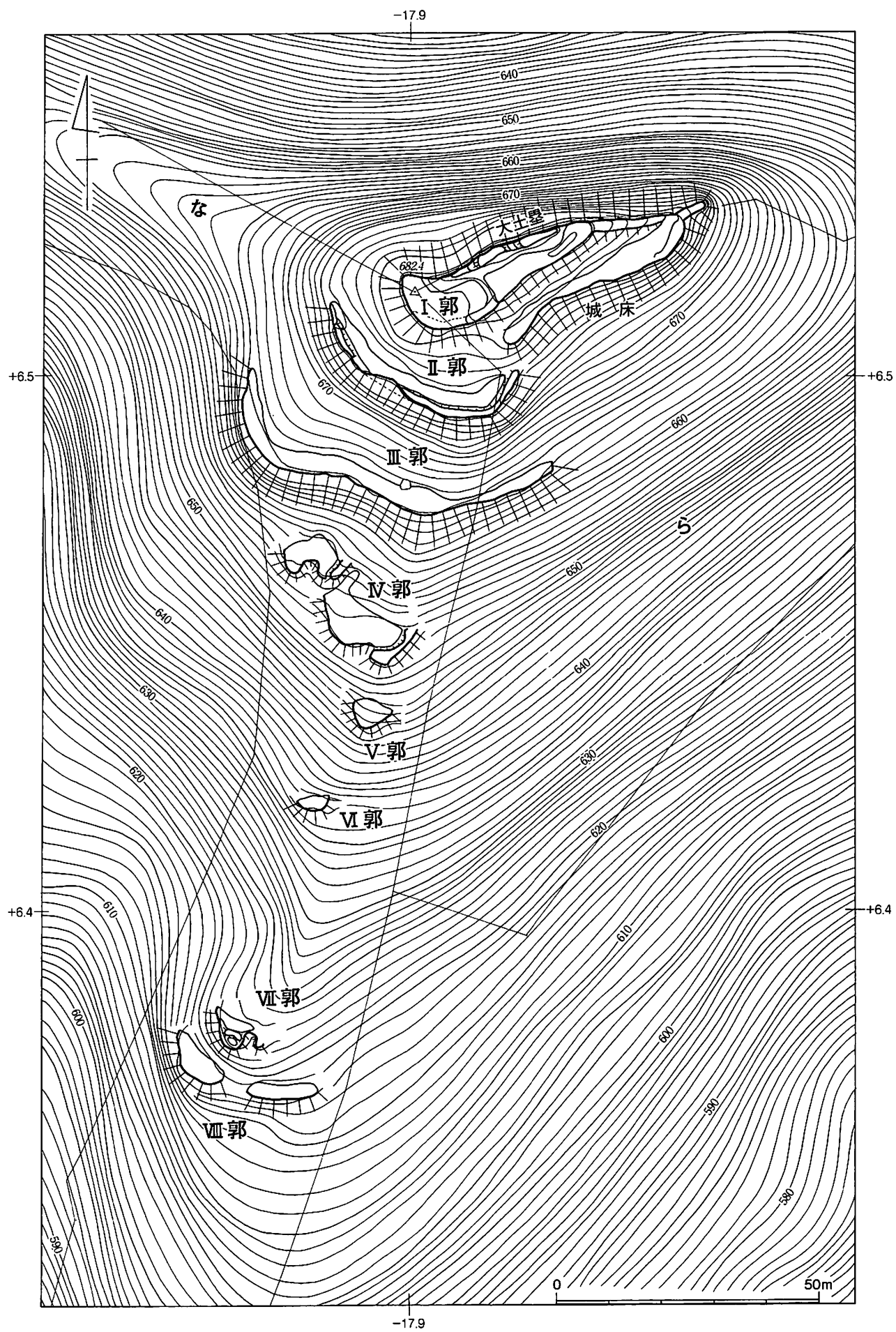
Ⅳ郭－2：Ⅳ郭－1より1.0m高い。東縁は、土塁状を呈し、高さ0.5m強、山腹から張り出す格好をしている。平場の中央部は、やや凹面状態をなす。東西の長さ10m、南北幅5.0m。西縁も東縁と同様に0.4mほど高くなっている。

〔Ⅴ郭〕標高646mラインに残る隅丸三角形の小平場である。尾根筋の北側から南側への緩傾斜地で、東西の長さ8.0m、南北幅5.5m。

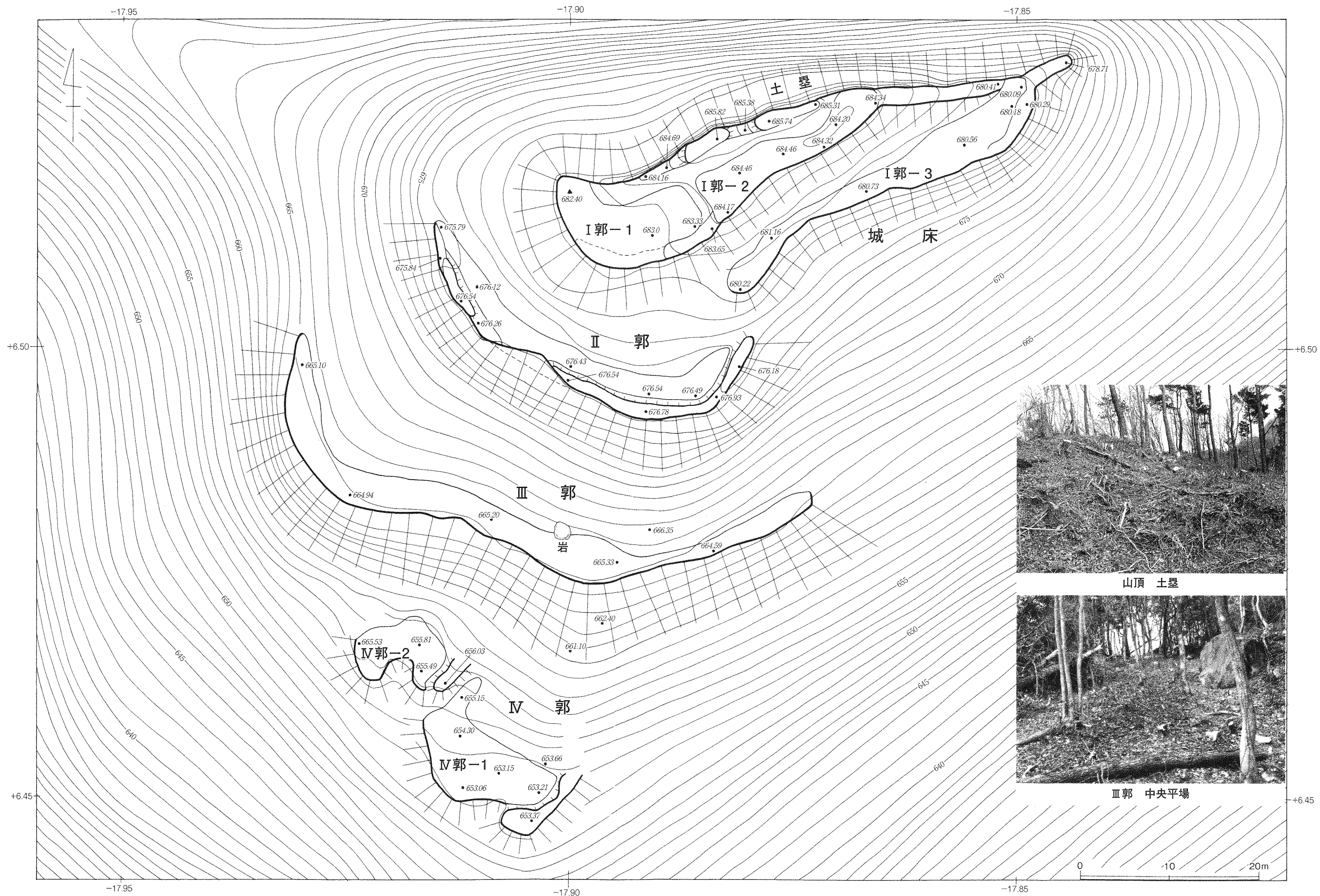
〔Ⅵ郭〕Ⅴ郭と同じ造りの平場で、標高637mラインに残っている。Ⅴ郭と同様な小平場で、東西の長さ6.5m、南北の幅3.0m。

〔Ⅶ郭〕標高622mラインに残る小平場である。東西8.0m、南北幅2.0mの半月状の平場があり、南縁は一段、高くなっている。この箇所には北縁が土塁状をなし、南側に円形状の僅かな凹地がある。「烽火穴」とも受け取れるが、山腹の下位に位置しているので疑問が残る。

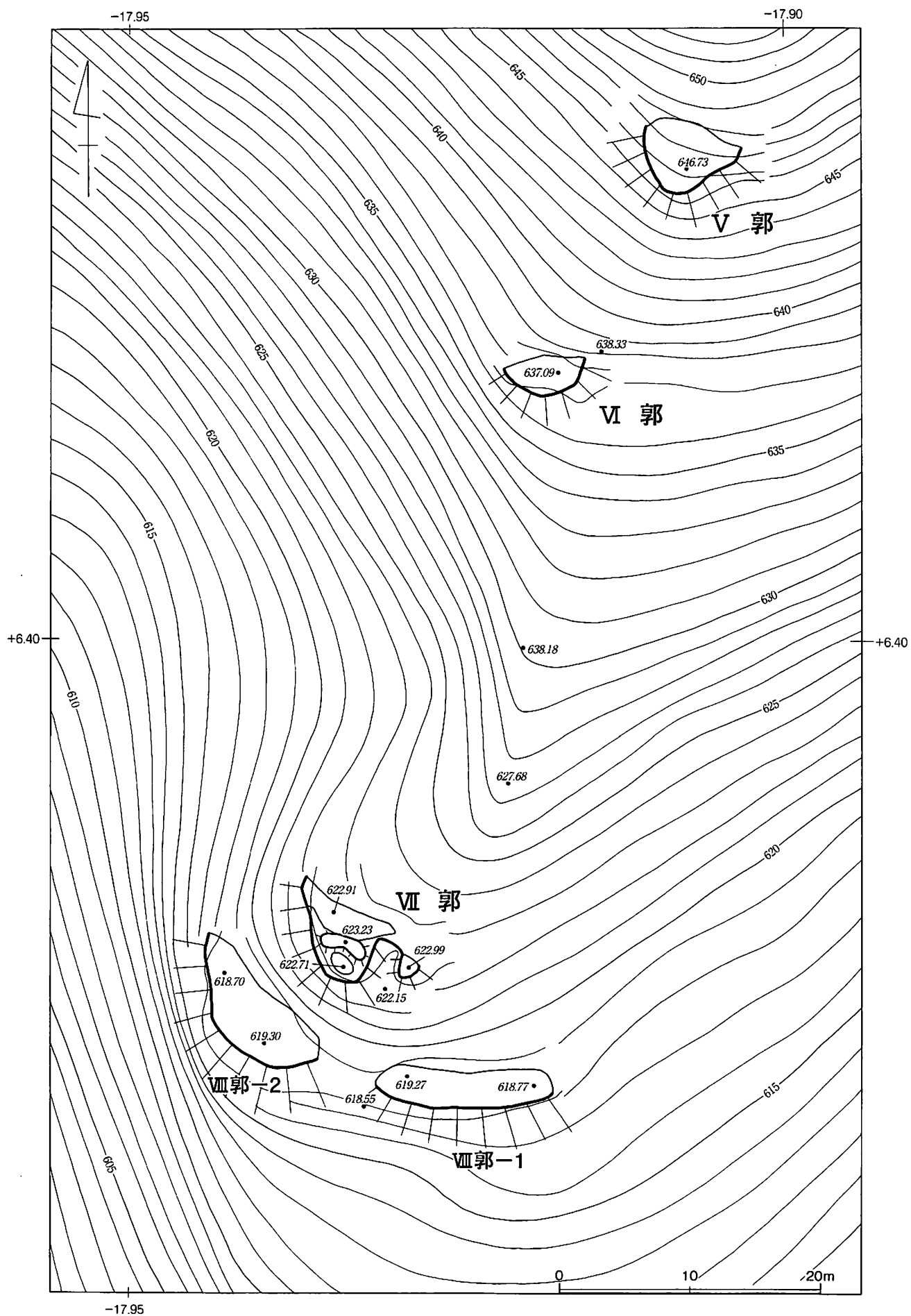
〔Ⅷ郭〕標高619mラインに残る平坦な小平場で、東西2つの区画に分かれている。山頂直下の山腹に残る遺構は、これを最後とする。



第26図 猿返城跡全体図



第27図 猿返城跡 I郭～IV郭測量図



第28図 猿返城跡 V郭～Ⅷ郭測量図

Ⅶ郭－１：東側の区画で、東西の長さは13.5m、南北幅は3.0m弱。

Ⅶ郭－２：西側の区画で、東西の長さは12.5m、南北幅は5.0m弱。

【登城道】標高590mラインの鞍部に残る長さ45m、幅2m山道が注目される。この箇所には、先に述べた岩場ルートと尾根線ルートの登城道が合流している。ここは、猿返城跡と米の山城跡へ通じる分岐点でもある。猿返城跡へは、この道から左にそれて、急な山腹を上って行くことになる。一方、米の山城跡へは、これから尾根筋沿いの道を1時間30分ほど進む必要がある。なお、米の山城跡への道は、尾根筋の南側斜面を走行しているが、城跡近くでは上面域を通過している。斜面部では1.5m幅の開削道が造られており、良好な状態で山中に残っている。

【水源】猿返城跡の山頂から東北側に、斜距離で約85mほど岩場を降りると、尾根筋の鞍部がある。ここも痩せ馬の背のように括れており（長さ14m、幅2m）、南側の真下（2～3m下）には、猿返城跡と米の山城跡を結ぶ山道が通っている。驚くべき事に、この鞍部の南下斜面部に湧水地がある。山道から55m（斜距離）程下った谷部の岩場がそれで、食用蛙の鳴き声に似た音を立てながら、水が湧き出ている。長さ4.5mの岩場に三か所の窪地があり、真中の1m幅のものが最も活動している。その窪みには、直径11～15cm大の丸い穴が横並びにあり、時間をおきながら自墳している。雨上がりには、この区域に長さ5m、幅2mの浅い池が出現する。はっきりとした水汲み道も残っている。

【猿返し山】猿返城跡の山頂から比高差約90mのところに尾根筋の鞍部がある。ここは、先に述べた登城道の一部で、この道の南端も北端と同様に、東西二股に分かれている。これらの道は、説明済みの岩場のルートと尾根線ルートであるが、これらの分岐点となっているのが猿返し山である。標高626.8mで、山頂には水準点がある。しかし、まったくの自然地形の岩場である。これより南側へは痩せ馬スタイルの尾根筋が緩やかに下っている。一方、北側は急な傾斜となっている。

山容は小碗のようで、遠目にも良く目立つ。山頂の西縁からは、隈部館の全容が俯瞰できる。さらに、猿返城の南西斜面に残る削平地を身近に一望する事ができる。近年まで、山頂には鳥居があったという。

【小結】

①測量の結果、山頂下の南西側山腹には、7箇所の削平地（Ⅱ郭～Ⅶ郭）が存在することが判明した。特にⅡ郭については、南縁に土塁が残っており、空堀が埋没している事がわかる。

これらの削平地の事を『肥後国山鹿郡村誌』は「豎堀七行アリ長三十間甚不深其下断岸」と表現しており、『山鹿郡中村郷地誌調』は「切岸ノ上ニ豎堀七筋アリ長三十間計深二尺ハカリニシテ広カラス」と記しているのが興味深い。両書とも記述者は、削平地の遺構を豎堀と解釈していることがわかる。

②猿返城跡は、山頂域を中心として、隈部館側の山腹に削平地を配した砦跡である。非常時には、各段に守備兵が配されたものと思われる。猿返し山は、尾根筋の頂きを物見に利用したものであるが、隈部館をより身近に望める場所として重要である。これらは高所である所から、敵方の動きを一望のもとに監視する事ができるし、立て籠もりや逃げ込みの場として活用する事ができる。館の後方から食料や水、武器、兵士を送りこむ事も可能である。しかし、万一、このような場所を敵から取られれば、致命傷になりかねないことは明らかである。隈部氏にとっては死守すべき場所で、おのずと砦が築かれた理由がわかる。

第Ⅳ章 米の山城跡

第1節 米の山城跡へのアクセス

標高755mの高山に築かれた砦跡で、猿返城跡と同じ尾根筋にある。両城跡を繋ぐ尾根道の実距離は約2kmで、踏査すると一時間近くにもなる。現在の登山口は、隈部館跡から東側へ3.4km離れた林道横尾線の終点にある。本来、八方ヶ岳への登山道で、米の山城跡へは、途中の分岐点から北西へ折れる必要がある。山頂までの所要時間は40分を要する。城域は桧の植林地で、山頂、南西側の山腹、南西側尾根筋、北西側尾根筋に遺構が残っている。

第2節 縄張り

〔山頂平場〕49m×21mの長円形平場で、長軸は南東側から北西側にあり、北東縁に高さ3.8mの大土塁が残っている（最高所は標高759.4m）。猿返城跡の山頂土塁と似通った造りであるが、遙かに大きく形も整っている。山頂は、北東側から南西側への緩傾斜地で、造成によって平場が確保されたものと思われる。土塁は、削り残した地山に排土を高く積み上げたのであろう。一方で土塁の北側は垂直に近く、そのまま山頂北東側の絶壁に吸収されている。この他、平場の縁部には、高さ20cm程の小土塁が周回する。

山頂からは南西方向に菊鹿町が望め、北東方向には八方ヶ岳が眼前に迫る。一方で、東方向には、猿返城跡からは眺望の利かない菊池市の山間部を全望する事ができる。これによって、米の山城―猿返城―隈部館の伝達ルートができ上がる。

大土塁：全体の長さ27m、下場幅7.0m、南側で膨らみを持ち、上場は長さ21m、幅1.0～1.5m。北東側から南西側へ緩傾斜しており、2箇所が高まりがある。一見すれば、土壇の様な感じがする。

小土塁：しっかりした造りで、大土塁に繋がる形で平場の縁を全周する。幅1m、高さ20cm、南西側の縁下には、基底部に大振りの自然石が並んでいる。土塁留めの石列で、個々の石の中には、長さ1.4m、幅0.75m、高さ20cmのものがある。南西側の小土塁の途切れ目は、虎口の可能性がある。この箇所の土塁両端は西側で45cm、南東側で30cm高くなっている。南西斜面には、崩壊しながらも登城道の痕跡が残る。

〔山頂の南西側山腹〕標高723m～標高716mに3箇所（Ⅰ～Ⅲ）の舌状平場が残っている。Ⅰは、標高723mにあり、長さ10m、幅6.0m。Ⅱは、Ⅰとの比高差6.76m、長さ15m、幅11m。Ⅲは、Ⅰから南東側へ22m離れた標高723mにあり、長さ10m、幅4.5m。ⅡとⅢは、登城道の途中にあり、これに関連した遺構と見られる。

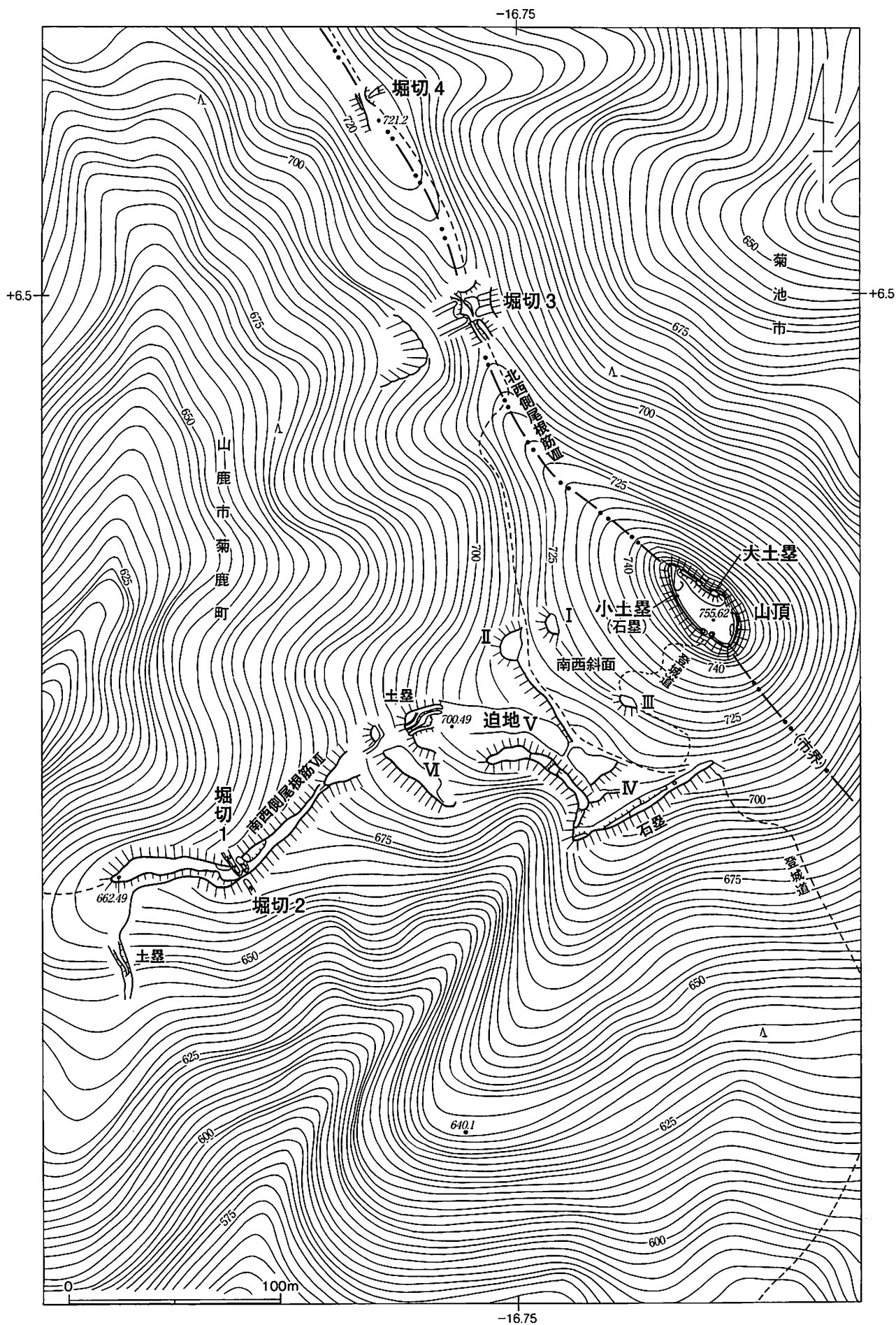
〔帯状削平地Ⅳの土塁と石塁〕標高700m～標高714mに帯状削平地があり、肩部に小土塁と石塁が残っている。幅4.0m、長さ76m、南西側から北東側へ登っているが、上位は崩壊している。小土塁は高さ30cm、上面幅3m、最下部から上部にかけて、長さ50mの範囲で確認できる。石塁は、土塁の内外側と斜面部に野面積みされており、大石が土塁の内側・基底部に並んでいる。

内側石塁：大石を根石とし、明らかに土塁の土留めである。根石の上には、角礫が積まれているが上位部分を欠損している。根石の中には、長さ1.0m、高さ0.6mのものがある。

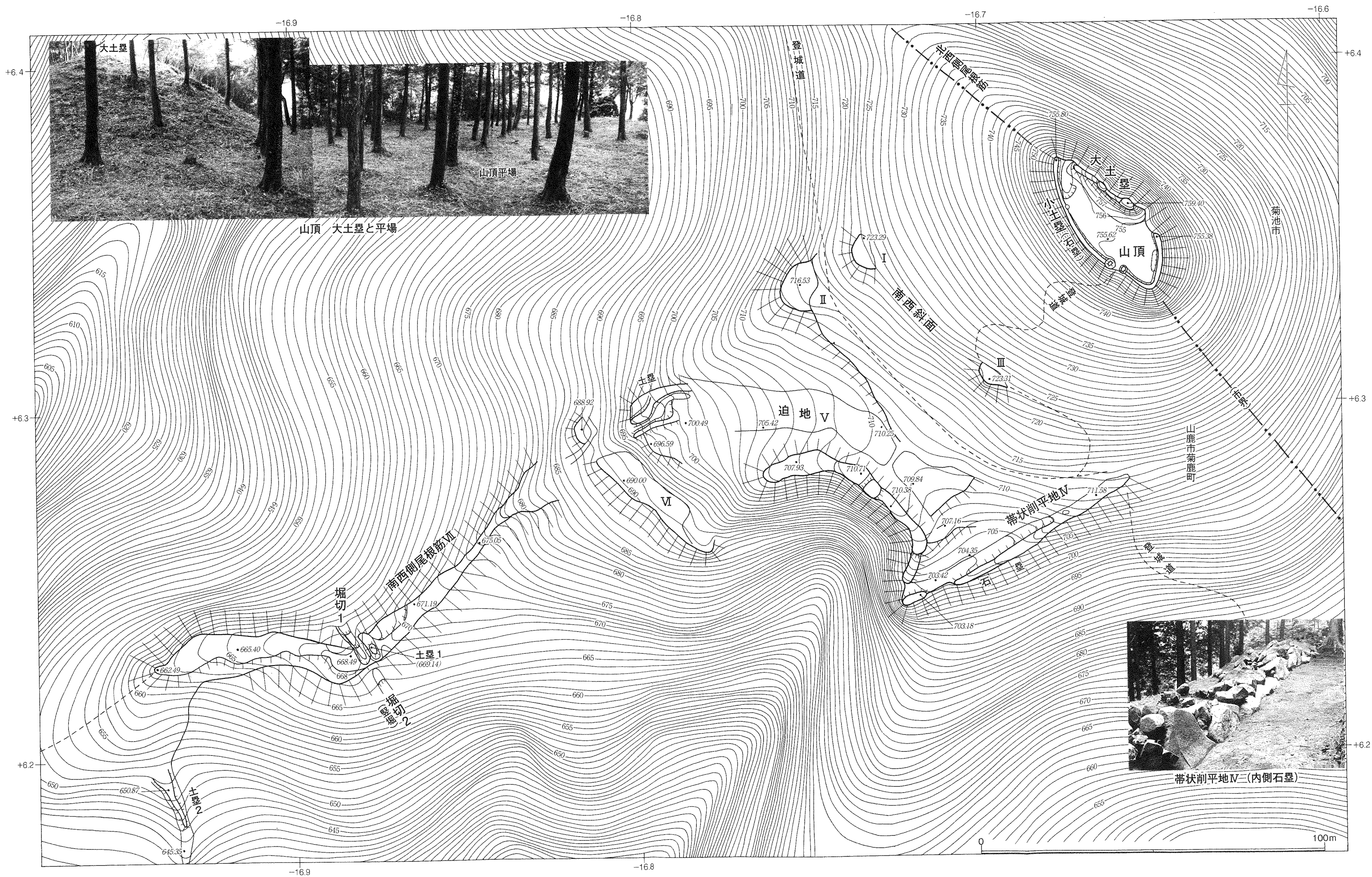
外側石塁：奥行きのある扁平な割石や自然石が、直の状態で見え隠れしている。積み石の大きさは、一抱え程度で内側の根石より、かなり小振りである。

山腹に残る石塁：個々の積み石は、しっかり山腹に食い込んでいる。上位の石塁が山腹に流れて堆積した可能性もある。

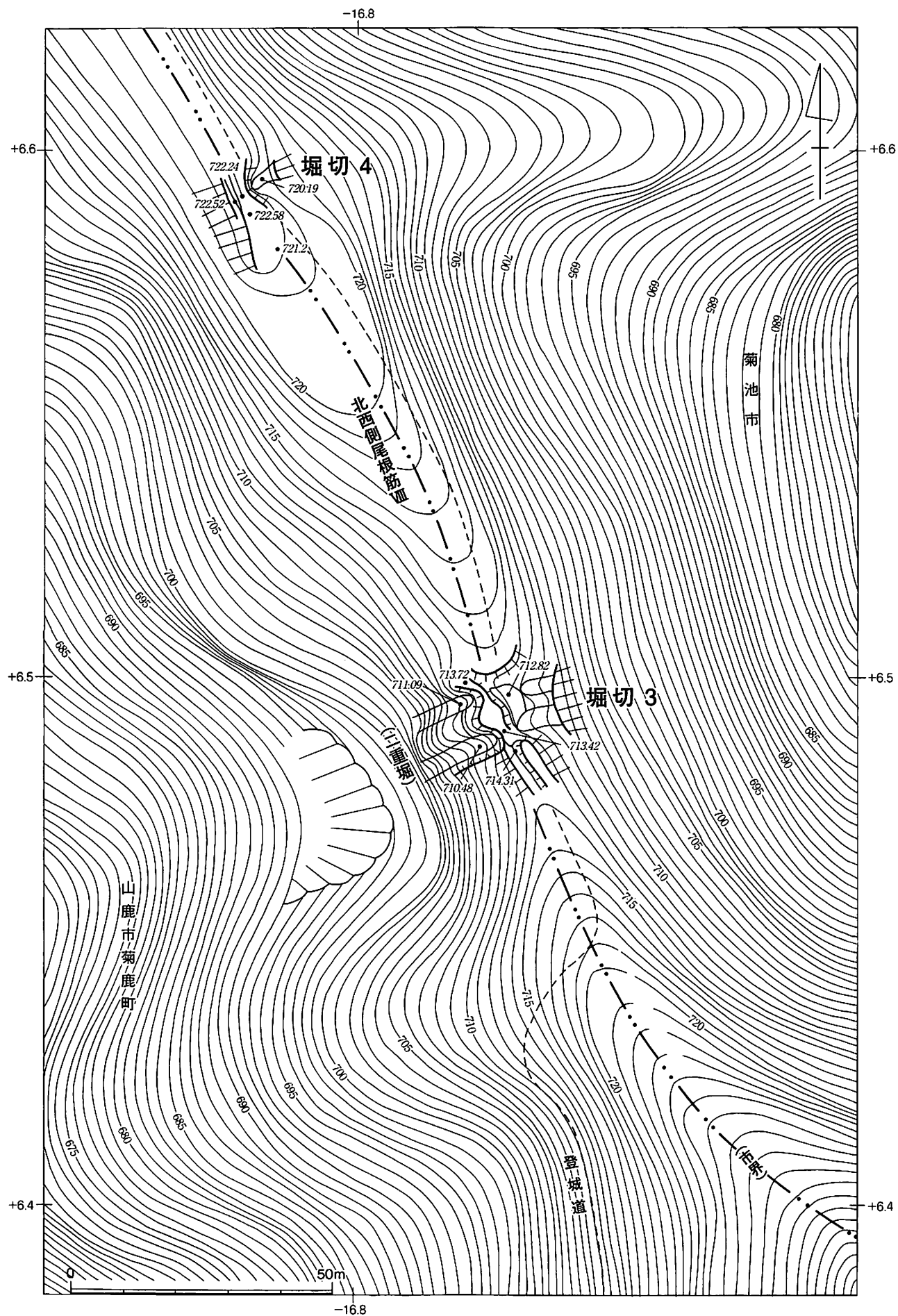
〔山頂南西下の迫地Ⅴ〕標高710mに山腹の切れ目がある。尾根筋の張り出し部分で、ここに小規模な鞍部が



第29図 米の山城跡全体図



第30図 米の山城跡 山頂～西側尾根筋



第31図 米の山城跡 山頂～堀切 4

あり、これを境に南東側と西側へ緩斜面の迫地が下っている。底部面積は比較的広く、建物等を建てるとしても、十分な広さがある。一方で、この迫地の西端部に凹地があり、周りに土塁と石塁が残っている。標高702m～標高698mで、ここを南西尾根筋からの登城道が通っている。凹地は5.0m四方の大きさで、中央部が丸く膨らみ、深さ1.9m。上部は、幅2.0m、長さ8.0mの溝状を呈する。下部は、両肩部が土塁となり、大石が野面積みされている。南側の土塁は、長さ14m、高さ2.28m、上面幅1m強。壁面の石塁は3段積みで高さ0.9m。北側の土塁は長さ9.0m、上面幅1.0～2.0m。

〔南西下区画Ⅵ〕 東側から西側への緩傾斜地で、標高692m～標高689mに平場的な箇所がある。長さ32m、幅7.0～9.0m、主軸の向きは斜面部に沿っている。

〔南西側尾根筋Ⅶと堀切〕 この箇所の尾根筋は、標高675mから痩せ馬地形に変化し、標高669m～668mに堀切1がある。

堀切1：南東縁に幅1m強の尾根道が通っている。掘底は、ここから北西側へ長さ4.5m程が平らで、深さ1.0m、底幅1.4m。端部は縦堀に変化している。この堀切の南東側には、尾根道を挟んで縦堀（堀切2）が下っているが、これは、元来、堀切1に繋がる遺構で、後世に尾根道によって分断されたのであろう。

土塁1：堀切1の北東側・肩部に積まれた小山状の土塁。長さ8.0m、幅2.5～3.0m、上場2.5m×1.5m。通常、堀切の土塁は、標高の低い側に積まれるが、ここでは逆になっている。

土塁2：標高662mから、南下へ下った山腹に積まれた土塁。標高653m～標高647mで、長さ17m、上面幅3.0～1.5m。山腹は、この土塁2を境に東側が大きな谷部となる。南西側尾根筋の遺構は、この土塁を最後とする。

〔北西側尾根筋Ⅷと堀切〕 山頂直下から別の尾根筋が北西方向へ伸びている。これが主軸尾根で、猿返城跡へ続く尾根道でもある。この尾根道には、2本の堀切が残っている。

堀切3：標高713mに造設された二重堀。尾根筋の中央部を浅く掘り残し、斜面部を縦堀としている。尾根筋の中央部は、南側で3.0m幅、北側で2.0m幅に括れ、中央部で5.0m幅に膨らむ。元来は、この膨らみ部分が二重堀の土塁に該当する。今日、土塁は崩壊している。

堀切4：標高720mにあり、尾根筋の中央部は2.0m幅に浅く掘り残されている。東側の斜面には、縦堀状の遺構が現存するが、西側は崩壊している。

〔小結〕 米の山城の存在理由の一つは、山頂から菊池方面の山間部が眺望できる点である。この方面は、猿返城から全くの死角である。米の山城を置く事で、隈部館に対する極めて広域な防衛網が形成できる。この城も猿返城の範疇に入るが、江戸期の文献の『古城考』や『肥後国誌』が別途に扱っているのは、距離的な隔たりによるものであろう。

隈部館～米の山城～猿返城を結ぶ尾根道は、兵士の広域的な移動が可能な事を示している。猿返城は、物見の場もさることながら「伝え」や「繋ぎ」の砦で、米の山城は「詰めの城」との見方もできる。

〔資料〕近世・近代の文献に見える猿返城跡・米の山城跡

『古城考』

米の山古城

山鹿由来記に、宇野七郎親徳築之と云々、隈部式部太輔親廣、米の山鶴巢に館を築て居之云々、土俗の説に、隈部親廣在城の時、嶋津兵士來て攻之、城中水乏し、薩兵是を知て、敢て急に不攻、故城兵殆んど困苦す、親廣謀て、城外より見ゆる高場の所にて、旦暮白米をもつて馬を洗ふ事夥し、寄手数日見之、城内兵糧多く、且つ水の手多き事案外也、中々急に攻ても難陷かる城に、日數を重て無益とて、人數班せし故、米の山の城と稱すと云、

（『肥後国志』も同一内容の記載文であるが、隈部式部太輔親廣につき、親永の誤りかと但し書きがある。さらに、文末に「府より行程八里也」と書き添えられている）

猿渡古城

上長野村にあり、險阻の地也、城主隈部但馬守親永也、永禄二年、隈部親永、隈府の城に行て、赤星道雲に對話し、此般木野彌次郎親政討死し家絶えて、上知八十丁、私館に近し、某に給るべし、左も有らば田底八十丁を替地に進すべしと云へば、赤星敢て不肯して謂けるは、去る弘治二年、永野近所也とて、阿佐古宮原を乞ふに任す、又今木野を望む事、遠慮なしとて不承引、隈部大に憤り、是より赤星を可討策を運らしぬ、道雲是を傳へ聞て、逆寄すべしと相謀り、幕下の國士へ觸廻し、家人赤星中務を大手の將として四百餘人、赤星藏人を搦手の將として四百、其身は宗徒七百人引率し、永野城に押寄る、親永は、豫て期したる事故百餘人にて出向、衆寡元より敵しがたく、幸屈強の切所は、山前は古閑川を隔てて、池田村灰塚に陣を取る、赤星は大勢を引率し、米原金塚に打出、敵陣の小勢を見て心驕り、手に入れて揉崩さんも、安かるべしと荒言し、木山大森の村路に入りて憩息す、藏人は今般の戦、味方衆軍を憑んで、不虞の負有るべしと深く思ひ、四百餘人引具し、隈部が陣の向なる道場に陣を取り、夜に入れば、兩陣烽火を焼連ぬ、翌れば五月二十一日、隈部赤星川を隔て三丁計り、隈部方より矢玉を發す赤星も放返し、抜連れて蒐る、藏人は三尺七寸の刀を振つて、多勢が中に駈入る處を、時雨のごとく放つ玉箭、藏人に中り、馬より逆に落ければ、隈部が軍士一度に瞳と突懸る、藏人が四百餘人、大將は討るれども、炎天停午汗流して漿をなし、眼暗み息喘き、二時計の戦に、寄手は悉く討死し、二十餘人に討成さる、今其所を合瀬川と云、道雲方には、此敗弊を不厭う、多勢を頼み手を不碎、徒に見物す、既に日數十餘日迄、攻撃の沙汰もなく、晝夜酒宴のみして打暮、同晦日、殊更大雨頻りなれば、彌怠り帶紐解きて、酒肴を弄し居たるを見て、隈部が入れし忍の者、如是と告しかば、親永老臣富田安藝守に命じ、夜討すべしと、相言を定め、枚を含んで、酉の刻に六百餘人、赤星が陣營に推寄せ、関を作つて突懸る、赤星が營室は元より懶惰なりしかば、大に周章擾亂す、隈部勝に乗り、追討して首數八百餘級を得、心の外に討勝て、内浦に堡六カ所の要害を構へ、城代をこめ、永野鶴巢兩城を築き、武威國中に輝けりと云、

（『肥後国誌』には、「永野猿返城附録」として同一内容の記載がある）

『国郡一統志』

寺社総録	山鹿郡	上永野	清潭禪寺藥師	隈部城
名蹟志	山鹿郡	日渡城		
		米山城		
		猿歸城		
		鶴巢城		
			(親)	
			右四所隈部但馬守鎮永居之	天正年中入菊池城

『肥後国誌』（卷之七 山鹿郡 中村手永）

宮崎莊 上永野村

米山城跡 山鹿由来記ニ宇野七郎親徳築之云々隈部式部太輔親廣 森徳云隈部親家ノ誤カ 米ノ山鶴ノ巢ニ館ヲ築テ居之云々土俗ノ説隈部親廣 親永カ 在城ノ時島津ノ兵士來リテ攻之城中水乏シ薩兵之レヲ知テ敢テ急ニ不攻故ニ城兵殆ト困苦ス親廣謀テ城外ヨリ見フル高陽ノ所ニテ旦暮白米ヲ以テ馬ヲ洗フコト夥シ寄手数日見之城内兵糧モ多ク且ツ水ノ多キコト案ノ外也中々急ニ攻テモ難陥城ニ日數ヲ重ネテ益無シトテ人數ヲ班セシ故米ノ山城ト稱スト云府ヨリ行程八里也

猿返城跡 永野城トモ云山鹿由来記云隈部親長所築險要ノ地也云々或記當城ハ上永野村ニアリ隈部但馬守築之在城ノ時永禄二年四月當城ヨリ六百餘兵ヲ師テ菊池郡池田灰塚ニ出張シテ敵將赤星道雲カ七百ノ勁兵赤星藏人星子中務カ八百ノ兵士ヲ追崩シ凱歌ヲ唱フ是ヨリ隈部大ニ武威ヲ振ヘリ此城跡大手櫛形ノ跡城ノ礎石并若殿 親安カ事歟 ノ部屋ノ跡庭石泉水ノ跡花園ノ跡等干今歴然タリ近世此地ノ草木ヲ取レハ崇リ有トテ土人太タ怖之魑魅ノ所爲歟最モ險要ノ地也親永平日ノ所居ハ城外ニアリ館ト云府ヨリ行程八里也

宮崎莊 上内田村

鶴巢城跡 隈部氏系図ニ隈部式部大輔親廣 森徳云親家ヲ誤レリ 山鹿郡米ノ山鶴ノ巢ニ館ヲ築テ居之云々山鹿由来記ニ當城ハ隈部但馬守親永所築也云々赤星軍談云隈部親永永禄三年ヨリ天正五年迄十八ヶ年當城并永野城ヲ構ヘテ守拒ノ專要トス云々當城ハ矢谷ニ近ク隈部親永在城ノ頃薩軍再三進ミテ急ニ攻レドモ城郭堅固ニ防禦強ク終ニ城ヲ不拔ト云

（補）事蹟通考編年考徴卷九天正七年ノ條ノ考按ニ云菊池傳記ニ云此年三月島津ノ將新納武藏守梅北宮内左衛門本郷能登來リテ隈部親永カ隈府城及城村永野鶴ノ巢ノ四城ヲ攻 似ニ山鹿郡ニアリ城村ハ崎子親安永野ハ家臣富田家治鶴巢ハ多久宗貞守之 翌八年正月河上左京來リ加リ九年十一月迄攻レドモ一城モ落サリケレハ圍ヲ解テ引取ケル云々然レドモ其比ハ龍造寺ノ勢強ク玉名菊池山鹿山本合志五郡ノ將曹其麾下ニ属スルコトナレハ薩軍遠ク敵中ヲ經テ久ク兵ヲ隈府ニ出スコト世録記ニモ不載之其是否考質スル所ナシ故ニ不取之云々

『肥後国誌』（卷之六 菊池郡 深川手永）

北通郷 虎口村

虎口城跡 隈部氏ノ城ト云隈部誰某ノ居城ノ跡ト云コト不分明親永カ城跡ト云ハ非也

附録曰虎口村ノ北ニ高城山米ノ山トテ城跡アリ鎮西八郎爲朝ノ城跡ト云

（補）翁巷按ニ大友興廢記ニ天文二十年大友義鎮肥後ニ發向シ隈部彌次郎親次カ籠タル八方ヶ嶽ノ城ヲ攻落ストアリ虎口村モ八方ヶ嶽ノ麓ニアレハ此等ノ記ニ因テ隈部氏ノ城ト云ルナルヘシ虎口半尺兩村城跡ノ事ハ半尺村ノ條ニ補記ス

『肥後国山鹿郡村誌』『肥後国山鹿郡上永野村』

古跡図添 猿蹄城墟 村ノ艮膳鼻山ノ西山ニ拠ル 三方絶嶮只南方登ルヘシ 絶頂平地アリ長二十間幅三間夫ヨリ漸夷シテ平地アリ 其下坤ノ方豎堀切七行アリ長三十間甚不深 其下断岸 城門ハ南ニ面ス 隈部親永所築 山鹿由来記東西十八間南北六間高五百五十六間 古記集覽菊池老婆記興廢年月不詳

全 隈部親永古宅趾 猿蹄城ノ坤ニアリ 東西五十間南北四十間 礎石城門ノ迹等猶殘レリ 表口ハ壕ヲ

設クル三重 裏ハ二重ノ小塚アリ 村民親永ヲ祀ル石祠ヲ建リ 親永天正十五年七月佐々成政ニ背キテ
菊池郡守山城ニ拠ル 不克シテ其男隈部親泰カ居城城村ノ城ニ走り之レヲ守ル 成政之レヲ攻レトモ
落チス 十二月秀吉公ノ命ニヨリ城ヲ出テ親永ハ柳川親泰等ハ小倉ニ預ケラレ 十六年四月二十七日皆
死ヲ賜フ 佐々伝記事蹟考

全 米山城墟 膳鼻山ノ東ニアリ 高山ニ拠ル絶頂平地長二十一間横五間 南方下ルコト四十間甚嶮也其
下東西壺丁南北三十間平坦外断岸ナリ 城門ハ坤ニ面ス 城域東西二十二間南北八間高四百間 古記集
覧菊池旧記 隈部式部太輔武治城主タリ 専立寺旧記ニ永野城主トアリ 永野城ト云ハ当城ナリ 其孫親広ニ至リ
薩軍攻之城中水乏シ 親広乃チ 高丘ニ於テ旦暮精米ヲ以馬ヲ洗フ 薩軍望テ城中水多シト囑ヲ解テ班
ル 因テ米山城ト称ス 肥後志土俗記 興廢 年月不分明

『山鹿郡中村郷地誌調』「第六大区六小区 上永野村」

一猿返城跡ハ膳鼻山ノ西ニ有高山也 三方ハ峻嶒ニシテ登ルヘカラズ 南一方漸ニ登ルヘシ 絶頂ニ長ニ
十二間幅三間半計ノ平地アリ 是ヨリ段々下リニ平地アリ 南西ニ切岸アリ 切岸ノ上ニ豎堀七筋アリ
長三十間計深二尺ハカリニシテ広カラス 城戸内周廻五町ハカリ也 西ノ方館迹ヨリ登リ拾三町程也城
迹高二十五町計也 膳鼻ハ城迹ヨリ高キコト一町其間五町計也 南ニモ山アリ城迹ヨリ低キコト一町其
間五町程也 此城ヨリ東十町計ニ米山城アリ 北二十町計ニ鶴巢城迹見エタリ 米山鶴巢ニモ此城ヨリ
通フ道アリ 米山ニハ膳鼻通り鶴巢ニハ帆柱石通り也 古城考ニ曰ク猿返古城ハ隈部親永城主也 親永
ハ宇野七郎親治 カ子孫ニテ菊池最初の家老筋也親永以前に隈部上総介忠直 秋因曰忠直嘉ハ高野瀬村田辺ニ在ト承 ト云
モノ有リ 菊池持朝 為邦重朝ヲ補佐シ文武ノ名ヲ得タル人也 文明八年重朝藤崎宮ニ於テ千句ノ連歌
ヲ興行シ 詩歌ヲ詠セタル忠直モ著述アリ 其時忠直藤崎宮草創ノ由来ヲ漢字ニ書タル文章アリ 又合
志福本村八幡宮宝殿棟柱ノ文ハ阿佐古式部少輔武貞ニ代リテ忠直自作自筆也 五山名僧詩集ノ中ニモ忠
直見タリト云リ 城主ハ館迹ノ条ニ弁ス

一米山古城跡ハ膳鼻ノ東ニアル高山也 絶頂ニ長二十一間横五間計ノ平地アリ 下ルコト四十間甚嶮也此下
ニ平地アリ 長六十間横三十間ハカリ也 東ニ切岸ニ重西ニ切岸ニ重アリ 南北ハ甚嶮也 西ト南ニ城
戸 堀切岸アリ 城戸ノ内周廻五町程也 二ノ城戸堀切アリ 地志略ニ曰ク米山城跡ハ上長野辺ニアリ
宇野親治カ築ク処也 古城考ニハ城主隈部親永トアリ 専立寺記ニハ隈部式部大輔親広米山鶴巢ニ住
ストアリ 事蹟考ニ曰ク大友興廢記ニ曰ク天文二年大友義鎮肥後ニ発行シテ隈部弥三郎カ籠タル八方嶽
ノ城ヲ陷スト アリ 八方嶽城ト云ハ米山ナランカ村民伝テ曰ク米山城ヲ攻ラル、時米ヲ以テ馬ヲ洗フ敵
見テ謂ラク此高山 ニ水沢山ナリ攻落スコト難シトテ引返ス故ニ米山ト云ト云リ

一隈部館迹ハ本村ヨリ東北拾八町ニアリ 猿返城ノ下也 東西五十間南北四十間計ノ平地也 表口門迹上リ
口石段礎泉水立石等顕然残レリ 表ハ切岸高ク堀深ク外堀モ嚴重也 裏ハ堀二重アレトモ狭浅也 此館
迹 譏三百歳ノ昔ヲ見ルニ質素儉約ナルコト後世ノ奢美ヲ戒ルニ足レリ 庶幾ハ之ヲ破却スルコトナカ
ラン 隈部氏ハ宇野七郎親治七代ノ孫持直白木須賀山ニ居館シ隈部氏ト称ス 此年文永元年 甲子 二月也
ト富田系 図ニ見エ 又専立寺系図ニハ式部大輔武治永野城主ト見タリ 武治父親經ノ墓藏音寺ニアリ
親經男武治其 子貞明墓其子親家墓清潭寺ニアレハ武治永野居城トアルニ依ヘシ 親家男親永ハ赤星親
家ト逢瀬川ニ戦ヒ 又薩州及佐々成政ト隈府城ニ戦テ勇名アリ 天正十五年 丁亥 十二月秀吉公ノ命ニ依
テ親永ニ男親房ト共ニ 柳川ニ至ル 同十六年 戊子 四月二十七日親永一族自殺スト事蹟考ニ見タリ

第V章 まとめ

隈部館跡は、戦国時代後半の館跡で、昭和49年3月に県指定の遺跡になった。著名な城主に隈部親永があげられる。中世城館跡としては、天草市牛深町の久玉城跡に次ぐ早期の指定である。全国に先駆けて、熊本県が中世城館跡の悉皆調査に乗り出したのは昭和50年からで、それ以前の指定として注目される。久玉城跡は、国道改良工事に伴う事前調査が契機となり、昭和48年3月に指定された。隈部館跡については、昭和49年の学術調査にもとづくものである。

館跡は、県北の山鹿市菊鹿町上永野に位置している。山中にあって、標高340～370m前後の山腹に築かれているために、南西麓直下の桑原・高池両集落との比高差は110～140mになる。周囲の自然環境からは、山城と呼ぶべき性格の館である。しかし、中心部の主郭は、長軸102m、短軸78～82mの広さを有する完全な平場で、発掘調査で発見された庭園遺構や礎石建物跡が長い間、野外展示されてきたので、館としての違和感はない。(伝)馬屋跡の敷地、虎口の櫓型遺構、主郭南下の大規模堀切は注目すべき縄張りで、個々の遺構にも、野面積み石垣や主郭へ上がる9段の石段が特筆される。主郭に立てば、南方向の眼下に素晴らしい景観が展開する。

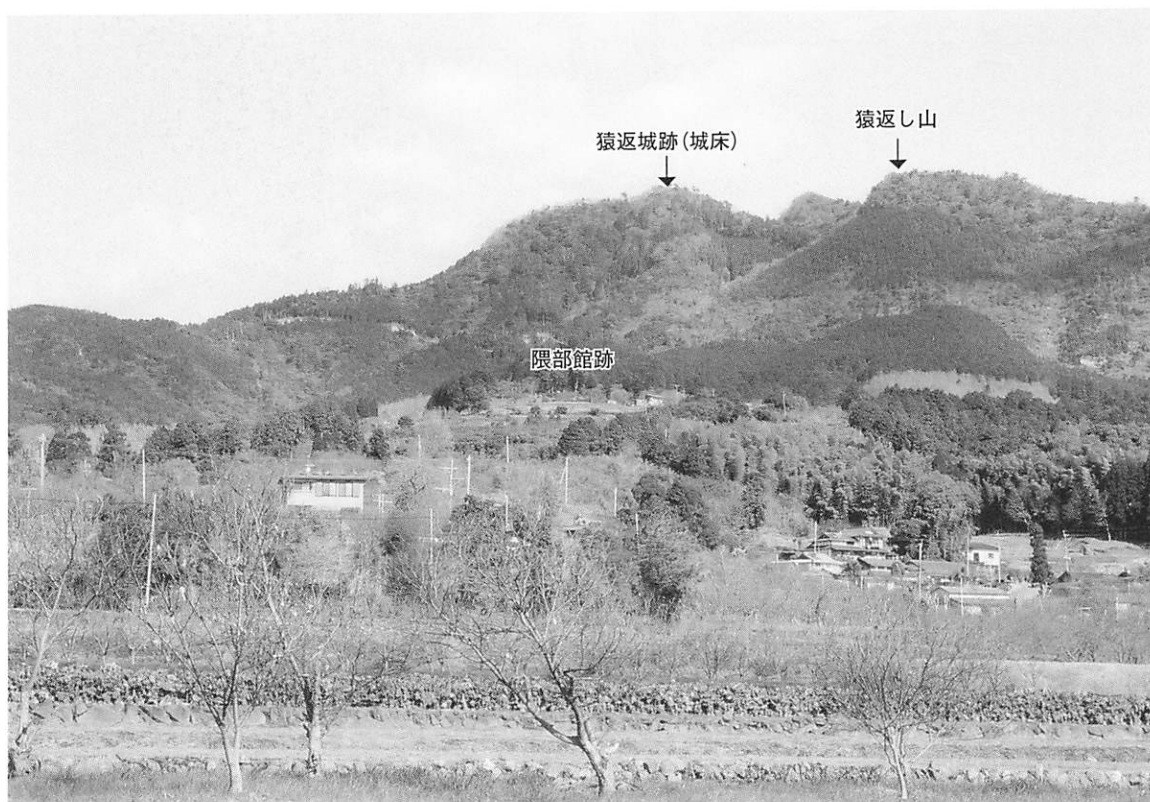
外郭部分にも館に関連した場所が残っている。主郭から登城道をやや下った標高293mラインの山腹には、(伝)富田安芸守屋敷跡がある。ここには北縁に野面積みされた石垣が残り、屋敷関連の「丈比べ石」の立石や大岩の溜まり水は「鷹の水」と呼ばれる。さらに標高246mラインにも、(伝)多久大和守屋敷跡の場所が特定できる。大正年間に掘削されて溜池になっているが、土地の区割りは、昔のままである。両氏は、隈部氏の家老である。この他にも、登城道沿いの段状地形を武家屋敷跡とする伝承があるものの、昭和40年代にミカン畑として開墾されたために実態が不明である。

外縁地区には、二つの砦跡が築かれている。館跡の北側背後には、標高682.40mの高山があり、山頂箇所には「城床」の呼称が残っている。館跡の主郭との比高差は340m、山頂から館側に面する南西側山腹に7段の削平地が造成されている。山頂とⅡ郭の南縁には土塁も残っており、この事でⅡ郭には、空堀の埋没が考えられる。館を真上から見下ろすこの砦は物見の場と考えられ、今日「猿返城」と呼ばれている。位置的にも隈部館と密接な繋がりを持つ砦で、江戸時代の文献には、総じて猿返城と記されている。一方、この砦の東北東方向には「米の山城」が存在する。標高755mの高山に築かれた砦で、猿返城と同じ系列の尾根筋にある。二つの砦跡は、地図上の直線距離で約1.3km離れているが、尾根道で結ばれており、隈部館関連の砦である事が分かる。米の山城跡には、山頂に大土塁があり、尾根筋を断ち切る堀切もある。南西下の山腹に築かれた石塁は、長さ65mに達する大規模な造りである。奥深い山中に存在し、距離的にも離れているが、隈部館の詰めの城であったと考えられる。

これらの砦跡の南麓の谷部には、「上厠」「厠」と呼ばれる所があり、つい最近まで数軒の家屋があった。上厠からは、猿返城への登城道が上っており、米の山城へ至る古道もこの両所を通過している。中世においては、小規模な軍事施設を有する居住区域であったと推定され、軍事学的にも極めて興味深いものがある。

隈部館には、大規模な麓集落が想定されている。館の直下には、南下の標高250mラインに横尾地区、西南西下の標高214mラインに桑原地区、南西下の標高225mラインに高池地区の三集落がある。高池地区の清潭寺は、隈部氏の菩提寺と伝えられる。これらは狭い意味での麓集落で、その本体は、館からかなり離れた所にある。実際、桑原地区から地図上での直線距離にして、南西方向に1.8km離れた上永野地区の三差路に「構口」の地名が残る事からも分かる。広域的な麓集落の大手門とされる箇所で、標高117mラインにある。この辺りでは、館からの比高差が228mにもなる。この大手門から館側の上永野地区には、館関連の地名や跡地が数多く残っている。上永野地区に残る隈部氏の城館跡と大規模な麓集落は、中世武将の支配体制を研究する上で貴重な資料である。

写 真 图 版



図版1 隈部館跡・猿返城跡 遠景



図版2 隈部館跡・猿返城跡 航空写真



図版3 建物跡1 西→東



図版4 建物跡2 東→西



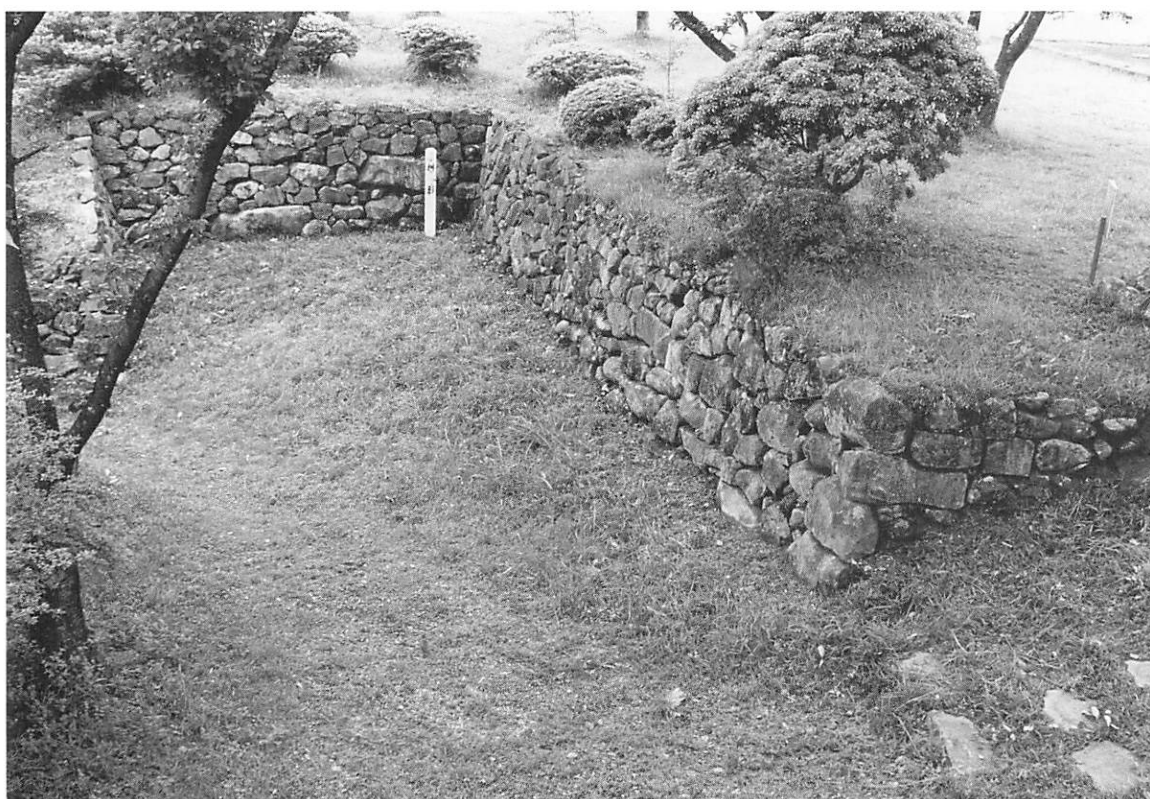
図版 5 建物跡 3 西→東



図版 6 庭園遺構 南→北



図版7 主郭入口 9段の石段



図版8 主郭南下 樹型遺構（虎口）



図版9 堀切③を西方向から見る



図版10 隈部神社北側の堀切② 東→西



図版11 隈部一族の墓所西下の堀切①（土橋より北側）



図版12 (伝)馬屋跡 西壁



図版13 隈部館跡航空写真 北→南

付 論

〔付論 1〕「隈部館跡」庭園遺構について	尼崎 博正（京都造形芸術大学教授）
〔付論 2〕建物の性格について	西島 真理子（熊本県建築士会 調査研究委員会副委員長）
〔付論 3〕肥後の中世城館跡と隈部館跡	大田 幸博（熊本県立装飾古墳館長）
〔付論 4〕戦国期の有力国衆の館跡	桑原 憲彰
〔付論 5〕城北村状調査 隈部氏編	東 亮憲
〔付論 6〕隈部氏関係基礎的資料の再検討	阿蘇品 保夫（熊本県文化財保護審議会長）

「隈部館跡」 庭園遺構について

尼崎 博正

(京都造形芸術大学教授)

昭和49年から同51年にかけて行われた環境整備にともなう発掘調査で検出された庭園遺構については、『隈部館跡』（菊鹿町教育委員会、平成5年7月）および同書所収「戦国期の有力国衆の館跡」（桑原憲彰:『ふるさとの自然と歴史』66号、昭和52年3月）の報告がある。同報告書と発掘当時の写真等を参考に、現況から考察される所見は以下の通りである。

1. 立地および空間構成

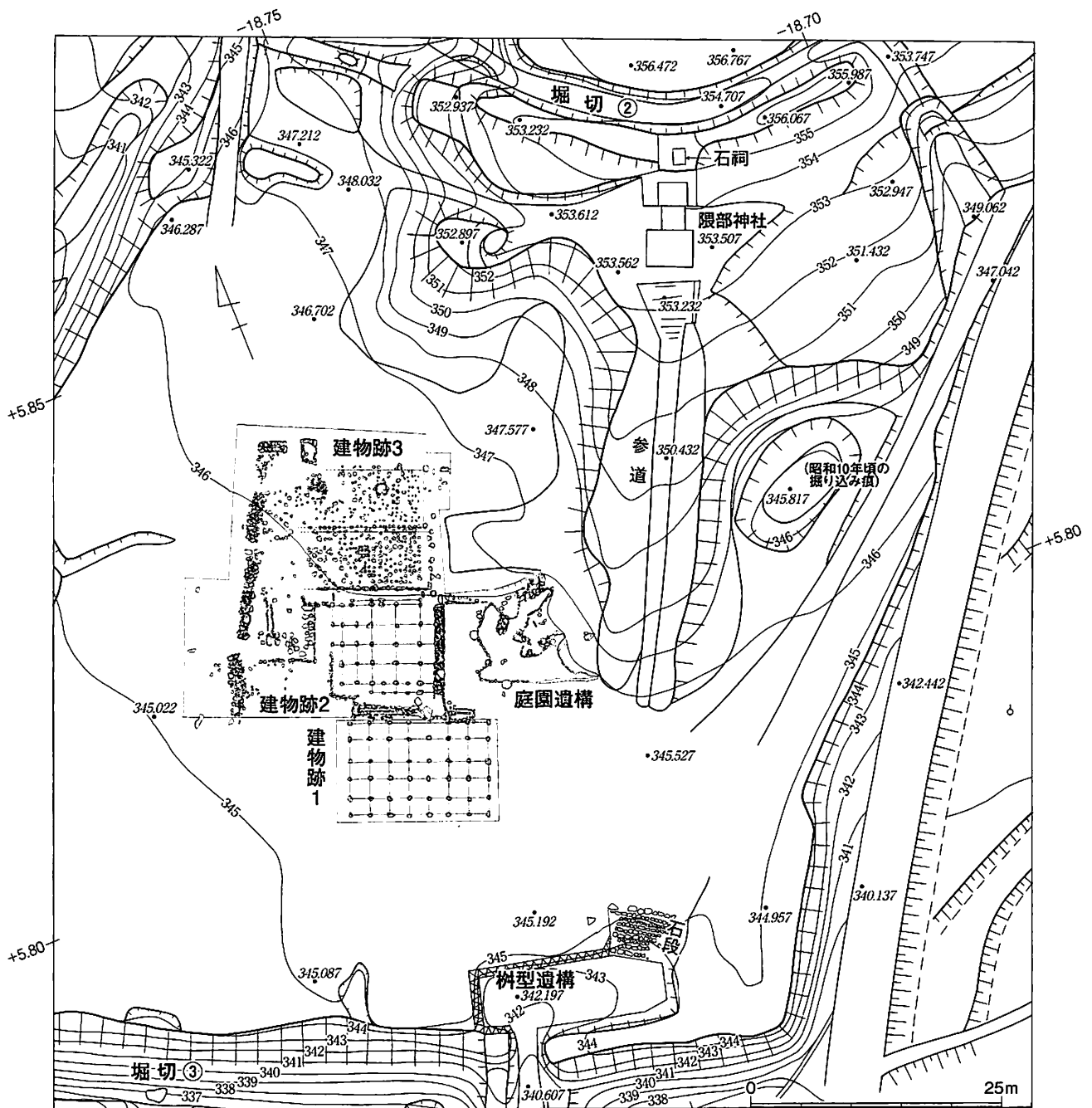
庭園は建物2の東南側（建築群の軸線が地形にならって西南方向へ振っている）に面し、背後は隈部神社（昭和11年3月建立）の鎮座する小高い丘の裾となっている。丘裾部にはその緩斜面を利用して滝石組を設え、あるいは要所に立石を配するなど立体的な構成であるのに対して、建物に近い平坦部は簡素な意匠の浅い池としているのが特徴である。また池の汀線を丘裾部では複雑に入り組ませている一方、建物側は緩やかな曲線の比較的単純な護岸ラインであり、なかでも南側の汀線が直線的に処理されている点が気になるところである。

館の空間サイズは少し小ぶりだが、時代性を鑑みて、当時の將軍邸や管領邸にみられる一町規模を意識している可能性があることから、試みに建築群遺構の全体を戦国期居館の空間構造（『戦国城下町の考古学』小野正敏 1997年）から解釈してみると次のように想定される。すなわち、建物1と建物2の区域が「ハレ」の空間で、前者が儀式の場としての「表（あるいは端）」の主殿で広場に面しており、後者が宴会・芸能の機能を有する「奥」の会所で庭園が付属するという構成になる。なお、集石遺構の建物3の区域は、「ハレ」の空間に対して、台所や蔵などのある「ケ」の空間として位置づけられる。

上記の仮説が成り立つとすれば、建物1およびその前面の広場を含む「表」の空間と、建物2および庭園で構成される「奥」の空間との間には、何らかの結界が設けられていたものと推察される。ことに、櫛型遺構から石段を登って来たとき最初に目にする「表」の空間性を考慮すると、「奥」の空間を遮蔽する堀のような構造物がどうしても必要となる。それに相当する遺構は検出されていないようだが、池南側の汀線が直線でおさまられているのは、何らかの構造物に規定された結果であるとみるのが妥当であろう。



隈部館跡 庭園遺構と隈部神社



隈部館跡 主郭平面図

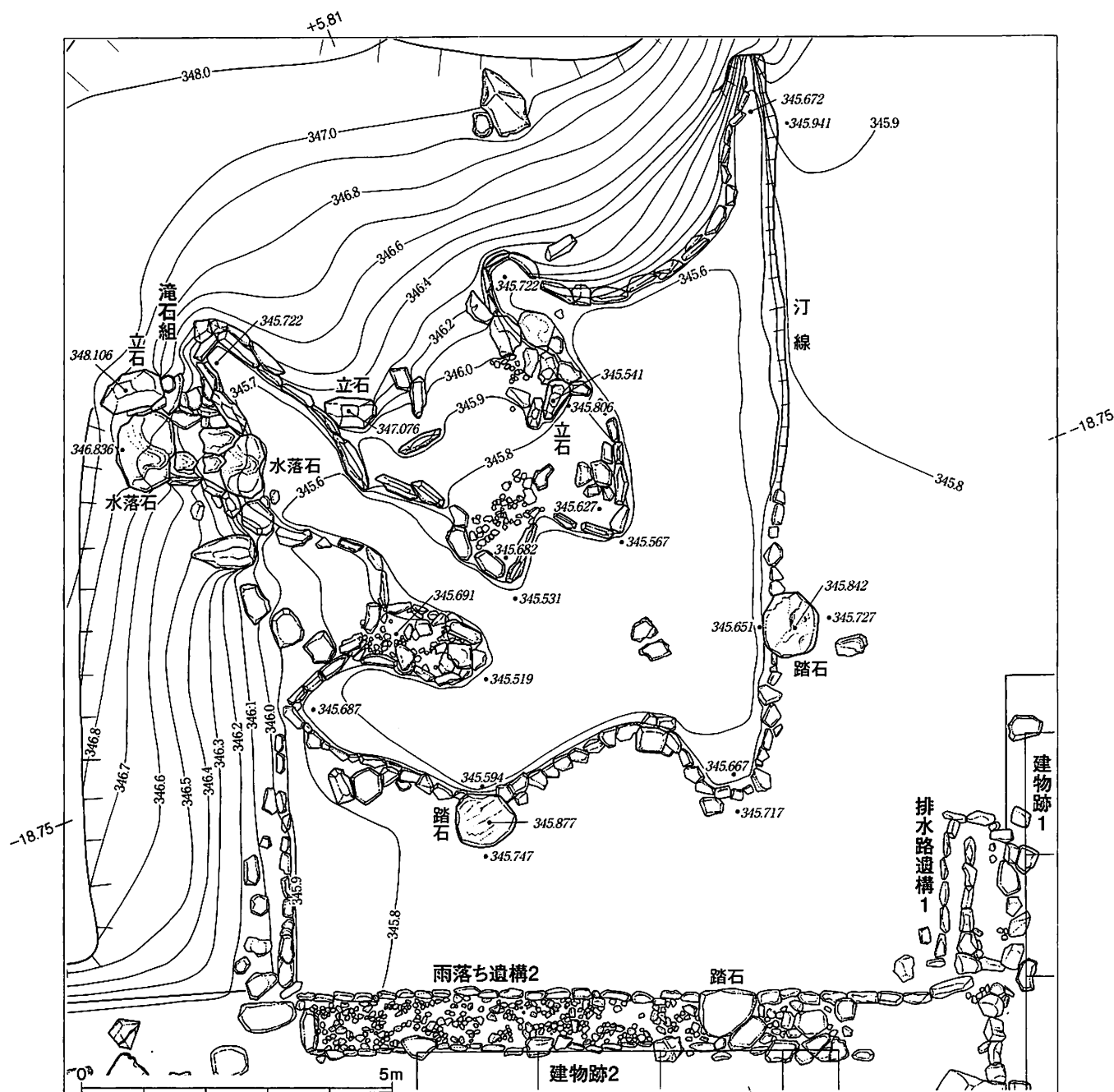
2. 地割・形態および意匠的特徴

庭園の立地と空間構成については前述したが、立石の面（つら）の向き等からみて、主な視点場は建物2であることがわかる。遠くの山並みを背景に、滝石組最上部に据えられた先頭形の立石を起点として、背後の丘が南へと下がっていく地形に呼応するかのように、順次高さを低くしながら要所に石を立てる構成は極めて秀逸である。

建築からだけではなく、庭に降り立つての鑑賞も意図されていたらしいことは、汀線の二か所に平石を据えていることから読み取ることができる。その配置は、一つが建物2内部からと同一の視線、もう一つは滝口を正面から観賞する地点として設定されたものと考えられる。また、建物2に付随する雨落ち遺構2の二か所に、踏み石となる程度の大きさの平石を据えているのは、庭への動線を考慮しての意匠とみてよい。

滝石組を中心とする立体的な石組が丘裾部に施され、その周辺の池の汀線が複雑である一方、平坦部の汀線は比較的単純で、かつ横長の石を一行に並べた簡素な護岸石組であること、また池の深さが20cm程度の浅いものであることについては前述したが、この池に水が張られていたのか、あるいは枯山水なのかは焦点となる。発掘時の写真から池底には円礫が敷き詰められていたことがわかる。その円礫が漏水防止のために施された地業の構造材が露出したものなのか、その保護材なのか、化粧材なのかを明らかにするには断ち割り調査が必要となろう。

桑原氏の報告（「戦国期の有力国衆の館跡」前出）によれば、「調査が進むにつれ池底部に土砂の沈澱が見られ、また最後に水を導入する水路が発見されるに及び、水を湛えた心字形の泉水であることがわかった」とされる。発掘調査によって検出されたという導水路の確認はできていないが、滝石組の立石脇に現存する水落石とみられる平石、池への落ち口に据えられている石、およびそれらの中間の平石に、明確に水の流れを想定しうる形状のものが用いられていることは注目に値する。池底や護岸に漏水防止の施工がなされているかどうかの確認調査と、排水口の可能性が高い池尻の精査が待たれる。





隈部館跡 庭園遺構と雨落ち遺構2

3. 築造時期と類例

隈部館の築造時期について桑原氏は、文献上明らかではないが、遺構から推定すると16世紀に入ってから構築され、その後、数代を経て現在に残る規模の館として完成されたものと思われるとしている。また本遺構の特色として生活遺物が少ない上、木炭・灰焼土等の火災を裏付ける状況も見られず、滅亡後に家屋が自然に朽ち果てたという状態でもなかったことを挙げ、これらの事実から館が営まれたのは短期間であり、何らかの理由で建物一切を他所に移転させたことも考えられるとしている。具体的には、天正六年（1578）に隈府城主の地位を獲得した後、そこへ移る際、建物も解体して移した可能性が強いという見解である。

全国的に見れば、16世紀を中心とする戦国期の居館に築造された庭園遺構として以下のような事例がある（『発掘庭園資料』奈良国立文化財研究所、1998年）。

- 1) 江馬氏館跡庭園（池庭、～16世紀初頃、岐阜県吉城郡神岡町）
- 2) 東氏館跡（池庭、～1541年、岐阜県郡上郡大和町）
- 3) 大内氏館跡庭園遺構（池庭、～1557年、山口県山口市）
- 4) 一乗谷朝倉氏遺跡庭園群（池庭、～1573年、福井県福井市）
- 5) 高梨氏館跡庭園（池庭、～1598年、長野県中野市）
- 6) 吉川元春館跡庭園遺構（池庭、1583～1591年、広島県山県郡豊平町）
- 7) 北畠氏館跡庭園（池庭、16世紀、三重県一志郡美杉村）

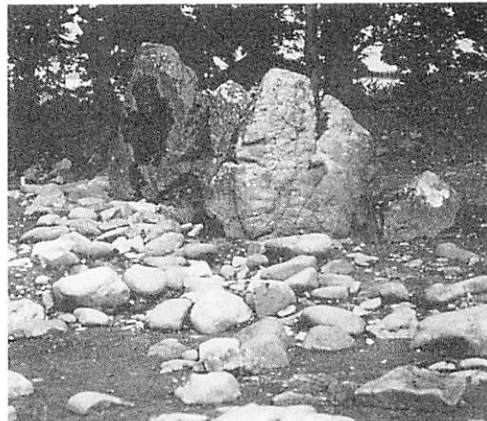
地域的には中部・北陸・中国地方に遺構が多く、九州での事例として隈部館跡庭園遺構が重要な存在であることがわかる。また様式的には本遺構と同様、すべて池庭であることが特徴として挙げられる。それらのうち、とくに高梨氏館跡と吉川元春館跡の庭園遺構に注目したい。

〔類例〕 高梨氏館跡庭園（池庭、～1598年、長野県中野市）

高梨氏館跡の庭園遺構は、庭園背後の土塁際に石組導水路をともなう滝石組を施すとともに要所に景石を配置する構成で、池は浅く、護岸に玉石一石を並べただけの簡素な意匠である。さらに滝石組付近の汀線が比較的变化に富んでいるほかは緩やかな曲線となっている点など、隈部館跡庭園遺構と共通する空間構成・地割・意匠であることは興味深い。導水路の存在から池には水が張られていたと考えられるが、池底が透水性の高い礫混じりの自然堆積層であるにもかかわらず、粘土を打つなどの漏水防止策がとられていない理由については不明である。



園池中景（北西から）



滝石組（北西から）



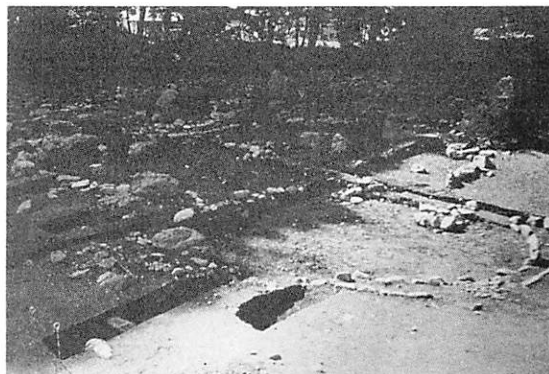
中島跡の景石（中央手前）と
直線状の護岸（左手中央）（西から）



直線状護岸石列（南西から）

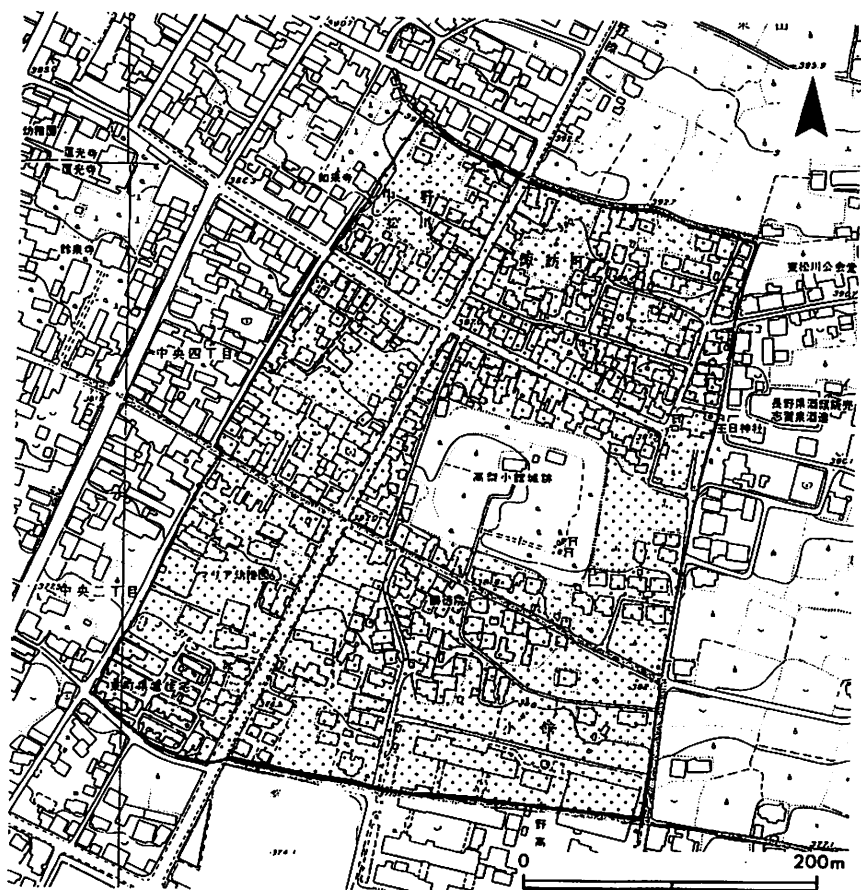


入江状護岸と閉塞護岸

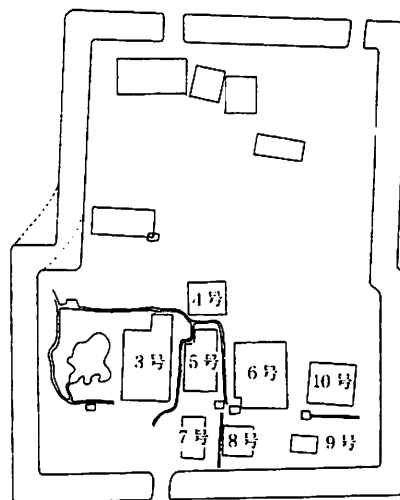


園池西北岸円弧状汀線（右手前）（北西から）

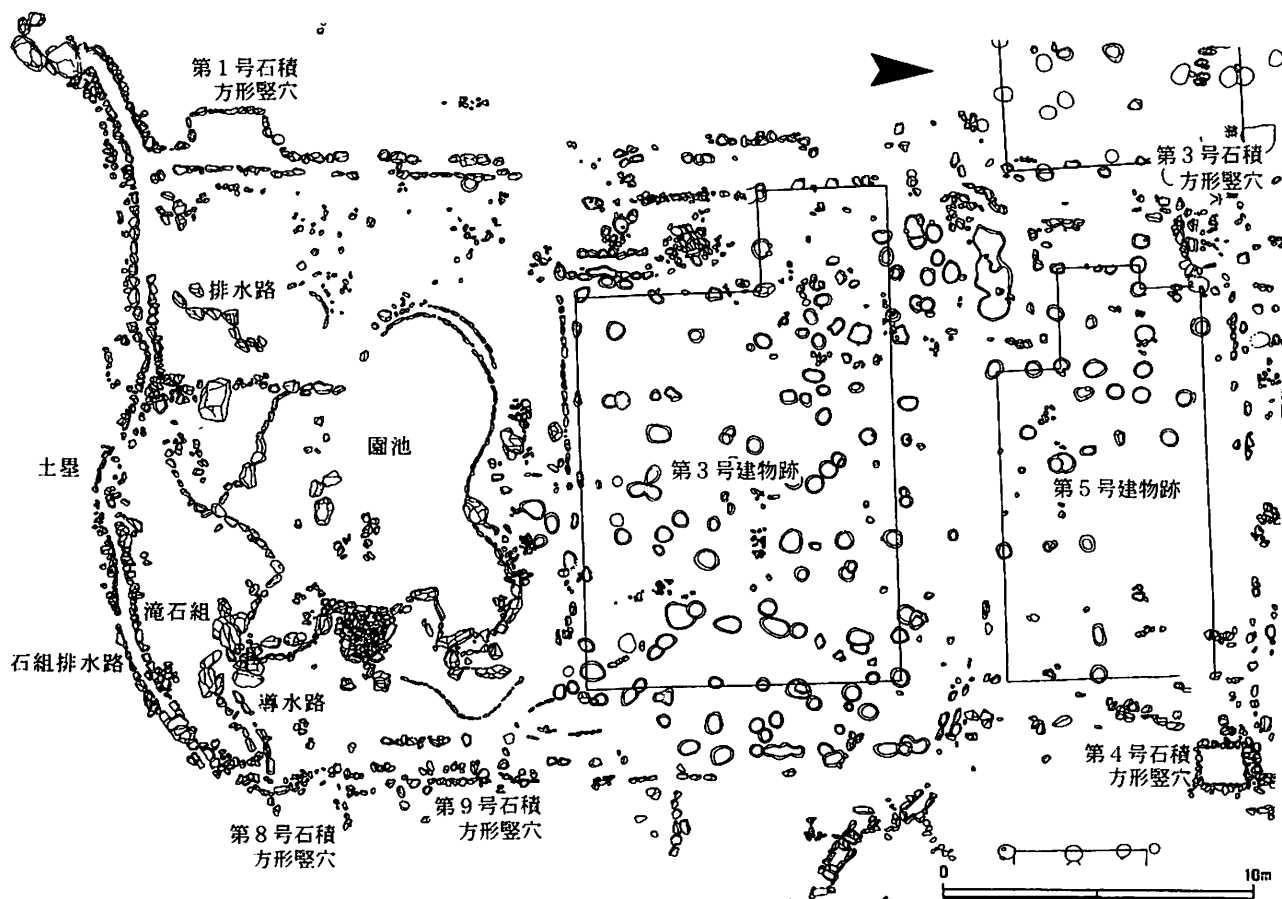
（『発掘庭園資料』 奈良国立文化財研究所 1998）



高梨氏館と館廻り



建物跡配置図

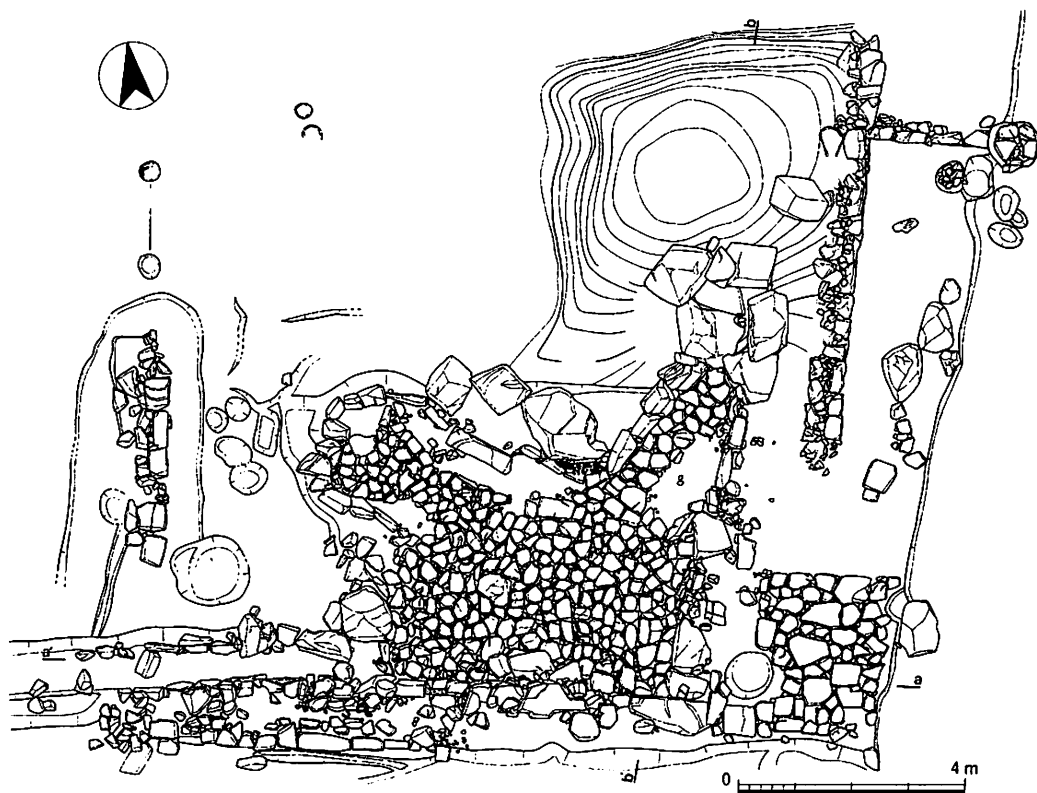


庭園遺構と建物跡平面図

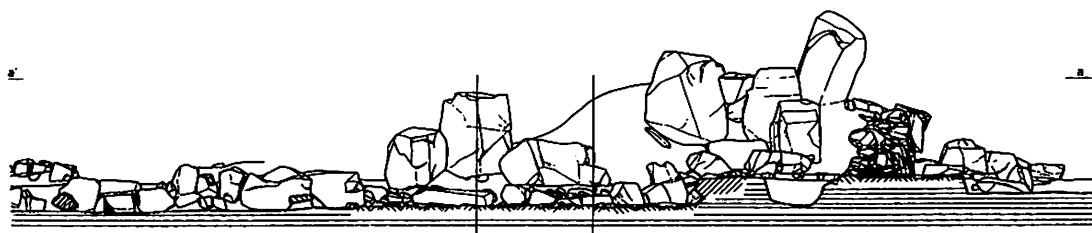
(「発掘庭園資料」奈良国立文化財研究所 1998)

〔類例〕 吉川元春館跡庭園遺構（池庭、1583～1591年、広島県山県郡豊平町）

吉川元春館跡庭園遺構は、会所に面する庭園で、三段に落ちる豪快な滝石組と築山裾部の石組を中心景とし、水深20cm程度の浅い池の護岸は一石を立て並べた意匠としているなど、立地や素材の地域的固有性を異にしながらも、隈部館跡・高梨氏館跡の庭園遺構との共通点が多い。特徴的なのは池底を石敷きとしている点で、地盤が粘土質であるため、漏水防止の処置をしなくても水が溜まる状態にあることから、水の修景を意図した意匠とみられる。導水路は検出されていないが、滝石組の最下段の水落石に隈部館跡でみられたのと同様の、水の流れを導く形状のものが用いられており、また池尻にオーバーフローの石が据えられていることから、水を張ることを前提とした池であると判断される。なお、直線の護岸は庭園の視点場である会所の建物にともなうものである。

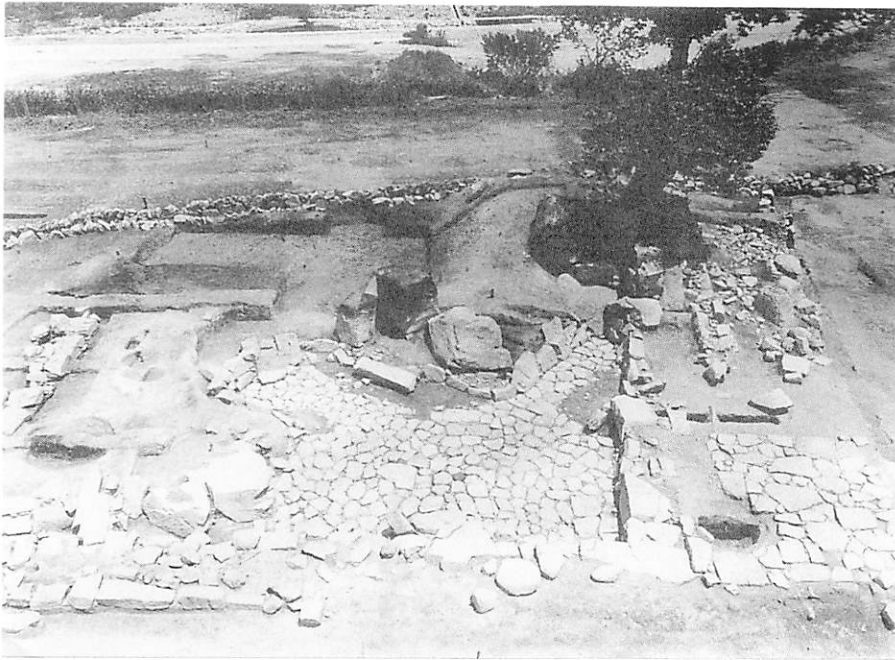


吉川元春館跡庭園平面図



吉川元春館跡庭園立面図

〔発掘庭園資料〕 奈良国立文化財研究所 1998)



庭園全景（南から）



庭園全景（南から）

（『発掘庭園資料』奈良国立文化財研究所 1998）

4. 結 語

以上のように、隈部館跡庭園遺構は戦国期居館の基準である方一町を強く意識して計画され、機能分化された空間構造の「ハレ」の場の「奥」の会所の庭園として築造されたものと推測される。庭園は格式をそのまま示すステータスシンボルであり、当時の空間概念と規範性にしがっていたとされるが、同時期の庭園遺構と比較検討することによって、空間構成・地割・意匠などの点においても共通性を有することが明らかになった。

このように、本庭園遺構は九州地域における戦国期の庭園文化を顕現するものとして、高い文化財的価値を有するといえよう。

建物の性格について

西島 真理子

(熊本県建築士会 調査研究委員会副委員長)

隈部館には、どのような建物が建てられ、どのような空間であったのかを考えてみる。近年の発掘調査から、室町時代の守護大名や在地領主の居館について様々なことが明らかにされている。足利義満によって造営された將軍邸「室町殿」(通称「花の御所」)において確立したとされる新しい武家の邸宅様式が、規範として地方の居館に取り入れられている(注1)。洛中洛外図屏風(歴博甲本、上杉本等)の將軍邸や細川管領邸に見られるように、敷地は方形で、外周は堀や塀で囲まれていた。正面には「正門」と「脇門」、その中の広場の奥には現在の玄関に当たる「遠侍」、公式の会見の場である「主殿」、社交や遊興の場である「会所」、会所に接した庭園、奥には当主の日常生活の場である「常の御殿」や「台所」等の建物群が配置されていた。特に庭園は、会所に伴うものとして設けられ、室内からの視点に対応した方向性を持ち、床・棚への美術品の飾り付けと同様に客へのもてなしの装置であるともいわれている(注2)。守護大名や在地領主達は、將軍邸を真似ることによって、その空間で行れる作法・儀式等も倣い、幕府との結びつきや自己の権威を誇示したのであろう。このような庭園を持った様式が広まっていったのは、有力在地領主館においては15世紀前半頃、守護館では15世紀末～16世紀前半頃が最盛期といわれている(注3)。

これらの発掘例の中で、隈部館と同程度の規模のものとして、飛驒の江馬氏館、美濃の東氏館、信濃の中野氏館があげられる。いずれも、規模は80～100m四方の方形の敷地で、庭園には石組みの池が築かれていた。江馬氏館には、2つの「門」、「遠侍」、「主殿」、「会所」、「常の御殿」、「台所」等が確認されている(注4)。西日本では、周防の大内氏館、豊後の大友氏館、安芸の吉川元春館等が同様な構成としてあげられる。大内氏や大友氏の館は守護館であるため大規模であるが、大内氏館の発掘調査によると、16世紀前半の遺構に、庭園(枯山水様式)と共に近接して礎石建物跡が発見されている(注5)。

これらの類例から推察すると、隈部館も同様の構成ではないかと思われ、建物1は「主殿」、庭園に面した建物2は「会所」、建物3の2棟は、「台所と居間」と考える。建物1の「主殿」は、梁間5間・桁行7間の建物で、梁間の両端は広縁と思われる。広縁のみ5.3尺であるが、部屋内は、1間=6.5尺を基準として3間×7間である。内部の部屋割りは現時点では明らかではないが、建物の性格を考えると、地方であっても床・棚・付書院を備えた正式な書院座敷が設けられていたであろう。また、瓦は発掘されていないことより、板葺き、こけら葺きあるいは草葺きが考えられる。庭園は、後方の猿返し山を背景とし、斜面となっている山の裾野を庭内に取り込み、その前に石組みの滝と池を配置している。発掘により水路が発見されたということであるので、池には水が湛えられていたであろう。この庭園に接して会所が建てられ、会所の座敷からは、座って庭園が鑑賞できるようになっていた。建物2の「会所」は、主殿のような格式を重んじた建物ではなく、武家独自の社交や遊興の場という性格を持つ空間であった。隈部氏は、会所に客を招き、四季折々の庭園を鑑賞しながら、連歌や茶を催したのであろう。建物3については、3間×6間程度の建物が2棟並んでいるように見えるが、柱位置が明確には掴めない。床は、転ばし根太を並べ、板を張ったのかもしれない。3ヵ所の環状列石が炉跡であるならば、領主の私的空間、すなわち炉を囲んで食事をしたり、くつろいだりする居間のような空間ではないかと考える。しかし、隈部館全体の発掘調査を待たなければ、この建物の性格を確認することはできない。

戦国時代には、山上に城を築き、その麓に居館を持つ例が数多くあげられる。隈部館は、詰めの城とさ

れる山上の猿返城の西麓に築かれた居館であるが、標高が345mあり、集落からは比高差が110mある高地に位置している。また、正面には、土塁や堀切、そして低い石垣を積んだ柵型の虎口、屋敷地両側面は切り立てられた急峻な土手、山の斜面と接する背面は堀切といったかなり強力な防御体制を備えており、山城そのものの内部に館を構えたとも思える。他の発掘例との相違点は、地域・地形・時代によるものなのか、あるいは特異性なのか、今後発掘される近辺の類例との比較により明らかにされると思われる。

〔遺構の建築年代について〕

隈部氏はいつからこの地に居館を建てたのか、遺物等の年代を示すものは発見されていないが、4人の領主の時代を取り上げて建築年代を推定する。

1. 忠直（1426～1494没）の時代

文明13年（1481）、守護大名菊池重朝により隈府において「万句連歌発句の会」が二十亭で催された時、忠直は第三亭の席主をつとめた（注6）。その当時の館には、連歌を催すに足る眺望や庭、また室礼などを考慮した部屋を備えた建物（注7）を整えていたと思われる。忠直は、菊池重朝に仕え、文化的なことに力を尽くした人物である。文明4年（1472）には、重朝に協力し孔子廟を建立する。そして、文明8年（1476）には、朱子学の第一人者である南禅寺の僧桂庵玄樹が隈府に下向した際に師事している。桂庵玄樹の出身地である周防には、その当時多くの文化人が集まっていた。大内氏の築山館には連歌師宗祇が訪れ（注8）、そして、玄樹と京都で親交の厚かった雪舟（注9）は、周防に庵を結んでいた。諸国を巡る宗祇などの情報伝達者によって庭園文化の情報が伝播し、その先で新奇な趣向を付加され、それがさらに伝播するといったネットワークが形成されていたのではないか（注10）とも言われている。

2. 武治（生没不明）・貞明（～1539没）の時代

隈部親養氏の『清和源氏 隈部家代々物語』に「武治…後に永野猿返城に移る。…」「貞明…八方ヶ嶽猿返城を本拠として城郭を拡張し陰を修して同城を難攻の堅城とし給う。兼々私館を城外に構えて居住されしという。…」「…猿返城は…初め隈部家の砦なりしが、武治公、貞明公の二代に亘りて城域を拡張し、…」と記されている。貞明の頃には「難攻の堅城」にしなければならなかった周囲の逼迫した状況があったのであろう。また、貞明は、天文八年（1539）館登り口下にある清潭寺に葬られている。

3. 親永（～1588没）の時代

16世紀の初めころから守護大名の菊池氏が衰退し、16世紀の半ば近くには没落する。菊池氏三家老は隈部氏・赤星氏・城氏であったが、その後、親永は赤星氏を撃破し、隈部氏の勢力が最も興隆した。

隈部氏はいつ頃からこの地に居住したかを考えてみる。「万句連歌発句の会」を行った文明13年（1481）には、隈部氏の一族である阿佐古氏・長野氏は、この館近くの阿佐古・長野地区を領していた。そして、館登り口下にある清潭寺は、もと内田相良氏の菩提寺だった寺を隈部氏が再興したとされており、寺の前面に立つ逆修塔には、「富田安芸守源直方敬白」「…大永八年（1528）…」と刻まれている。直方は、隈部忠直の長子の系統であり、系図には「修補 清潭寺」と記されている（注11）。また、伝承ではあるが「富田安芸守邸宅」の跡が館と清潭寺の間の「大手門」と言われている位置にあること等より、隈部氏は16世紀初めにはこの館に本拠をもっていたと思われる。

それでは、この礎石建物や庭園はいつ築かれたのであろうか。前述の大内氏館のように16世紀前半とされる庭園を伴った礎石建物の例もあるが、一般的には、石積みの柵型虎口や礎石建物、また1間＝6.5尺を基準とするのは戦国時代後期だと考えられる。

このように考えると、この館は、16世紀初め（武治・貞明の時代）に築かれ、16世紀半ば頃（親永の時

代)に、礎石建物に建て替えたのではないかと推定する。将来、礎石建物の下層を発掘すると、遺物や掘立て柱建物跡が出てくる可能性があると思われる。

この館跡に立ち、庭園やそれに続く小高い山そして背景の山々を眺める時、「万句連歌発句の会」などを行った忠直の、武士としての教養の高さや他の文化人との交流の広さが思い起こされ、この館は、忠直が直接造ったものではないが、彼の洗練された文化的な素養が代々受け継がれているのではないかと、私には感じられる。

(注1) 日本建築史 2003年 後藤治 共立出版㈱

(注2) 戦国時代の城館の庭園 1999年 小野健吉 奈文研 年報

(注3) 天下統一と城 2002年 国立歴史民族博物館 千田嘉博・小島道裕 塙書房

(注4) 江馬氏城館跡Ⅲ 神岡町教育委員会

(注5) 史跡大内氏館跡(枯山水庭園跡) 山口市教育委員会

(注6) 清和源氏 隈部家代々物語 1964年 隈部親養

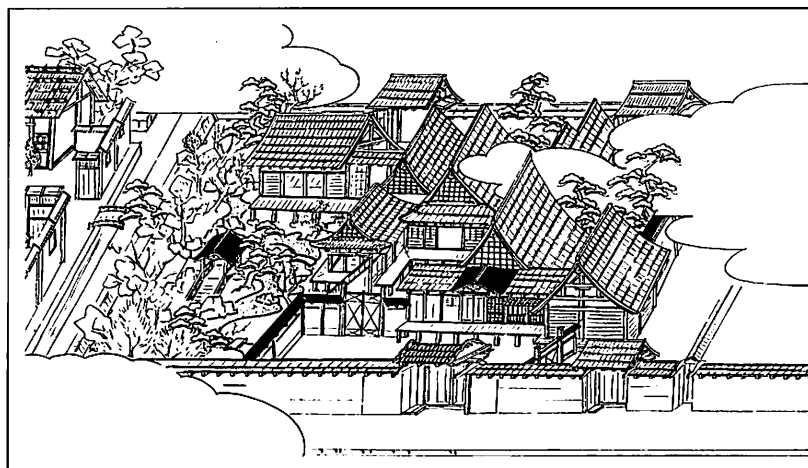
(注7) 文学(連歌張行の建物・部屋) 廣木一人 2002年 岩波書

(注8) 宗祇は、文明12年(1480)に大内氏の招きで周防を訪れている。

(注9) 僧雪舟は、15世紀半ば過ぎに周防に移り、絵画だけでなく作庭も行っていたとされる。山口市常栄寺の資料より、「『雪舟庭園』は、もと妙喜寺の庭園で康正元年(1455)の創建、庭園は大内政弘が雪舟に命じて造らせたものと伝えられている。」とある。

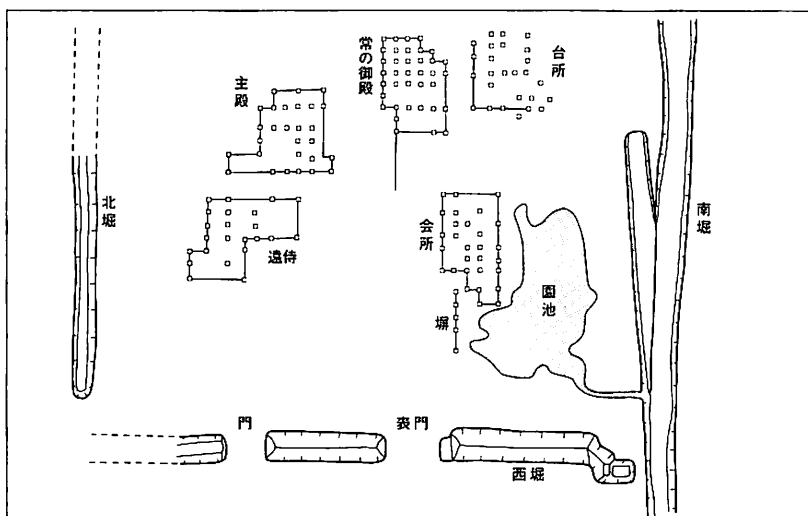
(注10) 戦国時代の城館の庭園 1999年 小野健吉 奈文研 年報

(注11) 菊鹿町史 1996年 菊鹿町



細川管領第(洛中洛外図屏風)

「日本建築史図集」日本建築学会1980年より転載



江馬氏館遺構図

※「江馬氏城館跡Ⅲ」岐阜県吉城郡神岡町教育委員会 掲載図を再トレースしたもの。

肥後の中世城館跡と隈部館跡

大田 幸博

(熊本県立装飾古墳館長)

熊本県では、文献上、最も古い中世城が球磨郡錦町の球磨川右岸の丘陵地に残っている。岩城跡で、「高野山文書」に城名の記載がある。このことで、城と表現できるものが、平安時代末には既に存在していたことがわかる。城跡内からは、昭和60年代初期に、この時期に見合う同安窯青磁（中国産）が数多く表採されていた事がある。ただし、発掘調査が実施されていないので、考古学的な実証には至っていない。城の縄張り、年月を経る中で、その都度変化を遂げていくので、早期の岩城は、今と違う形態であったかも知れない。

城の基本概念は、あくまでも「固定的で恒久的な意味を持った施設」を意味するもので、単に築地塀を廻らす程度のものでは城と呼ばない。平安時代末の城は、『平家物語』に記載があるように、せいぜい「関」程度のものと考えられる。本来、中世城は、武家社会の中で武将の活動拠点であったが、鎌倉時代でもその成立は、時期尚早と考えられる。時の將軍の源頼朝でさえ、鎌倉の地に城郭と呼べる構築物を築いていない。地方の武士団にあっては、なおさらのことであろう。この時代は、館を構えた在地領主を中心とする「点の支配」に留まり、城の配置を必要とする支配構造になかった。それが、14世紀半に世の中が騒がしくなると戦の副産物としての城が重要性を増した。建武の新政を皮切りとする南北朝時代の争乱期が到来したのである。中央の動きでは、元弘元年（1331）9月に河内国で赤坂城の攻防戦があった。鎌倉幕府軍が、楠木正成が拠った赤坂城を攻めた戦いである。元弘3年（1333）3月には、幕府軍が正成の千早城攻略に失敗した。両城跡は、この時期の城として古くから良く知られている。

しかし、この時期の城は、所在地や縄張りの不明なものが多く、我々が抱く城の概念と多少異なる様である。山や丘陵の高所に城に見たてて、自然地形をそのまま縄張りに活用した可能性が高い。実際、『新熊本市史』の編纂時に、文献から抽出された南北朝時代の城跡の調査を試みたが、ほとんど城跡地を確定できなかった。発掘調査で時代が実証された城跡も数が限定されている。県内では、唯一、球磨郡山江村の山田城跡がこの時期の本格的な山城として知られるに過ぎない。この城跡の場合、中世文書に城に関する記述があり、九州縦貫自動車道の建設時に、県文化課で大規模な発掘調査が実施され、この時期の遺物が数多く出土した。城跡内に、確たる縄張りも有しており、例外のケースである。

中世城が全国的にピークを迎えるのは、15世紀後半の戦国時代からで、この時期、中世文書に数多くの城名が登場する。肥後では、特に阿蘇大宮司家や菊池氏の活躍が目立ったが、両氏とも、その後、更なる勢力拡大に至らず、ついに戦国大名になり得えなかった。16世紀になると次第に衰退し、代わって、両氏らの家臣団が土豪として、個々に独立していった。彼らは、肥後で「国人・国侍」といわれ、全国的に「国衆」と呼ばれた。彼らは、豊後の大友氏・薩摩の島津氏・肥前の龍造寺氏らの外部勢力を利用して、徐々に小領主へと成長していった。したがって、この時期、必然的に城の数も急増した。本城を核に麓集落を形成し、陸路や海上・河川交通の要所に支城を配置して、領域境の山の稜線にも物見や連絡用の砦を築いて守りを固めた。こうして規模の差異はあったものの、各地域で「面の支配」が行われたのである。隈部氏も土豪の一人であった。隈部館を中心として、上永野地区に大規模な麓集落を形成し、背後の高所に猿返城や米の山城が配置された。菊池市での有名な「菊池十八外城」は、これを大規模に具象化したものである。

豊臣秀吉の九州統一後、肥後では国主に任命された佐々成政に対して、天正15年（1587）に52人の国衆が

蜂起した。世にいう「肥後の国衆一揆」で、首謀者の一人が隈部親永である。一揆は、菊池城～城村城～田中城へと展開したが、最後は、秀吉の差し向けた毛利氏軍などに鎮圧された。これを契機に、肥後に残存した中世的旧勢力が、ほぼ一掃された。天正16年（1588）には、加藤清正と小西行長が肥後に入国したが、この時期、肥後には、まだ中世城と呼べる城塞が各地に残存していた。文献記録にある城は、〔加藤領〕河尻城・菊池城・小代城・大津山城・内牧城・田浦城・佐敷城・津奈木城・水俣城。〔小西領〕隈庄城・木山城・矢部城・八代麓城。両氏は、これらの城に城代を置いて統治した。近年、破城の実態が明らかになった鷹ノ原城は、加藤氏の入国後に築かれたものである。

天正17年（1589）には天草合戦が勃発したが、小西氏が加藤氏の支援を受けて鎮圧すると、これを最後に肥後の国衆は壊滅した。しかし、その後も残存中世城は、まだ肥後の歴史に城名を残している。文禄元年（1592）6月に、島津家臣の梅北国兼が、朝鮮出兵の留守を狙って佐敷城を破り、続いて麦島城を包囲する事件が起きている。この梅北の乱は、あえなく終わったが、秀吉は、中世的土豪の反撃として極めて重視し、これを契機に、意に従わない状態の島津歳久を処分した。肥後でも、秀吉の指示によって、熊本城にあった阿蘇惟光が花岡山で斬首されて、阿蘇大官司の地位が途絶えた。

幕府の命令により、中世城が姿を消したのは、元和元年（1615）の「一国一城令」である。「一国に一城しか城を認めない」との幕府の命令であった。それでも肥後では、熊本城の他に、島津氏対策という理由で八代松江城が存続した。この法令で、残存していた中世城も姿を消した。

寛永14年（1637）に起こった天草・島原の乱は、キリシタン信徒の信仰の厚さが改めて再認識され、幕府は、鎖国体制の完備を急いだ。慶安4年（1651）に、肥後藩が幕府に提出とした差出『肥後国一慶安四年江戸江差上候御帳之扣』には、全部で61城跡の実態が報告されている。この中で天草郡は15城跡、益城郡は13城跡が対象とされている。両郡で約5割を占める数の多さである。乱後、17年を経過しているが、まだ乱の後遺症は、残っていたのであろう。天草郡は言うまでもなく、益城郡はキリシタン大名の小西行長が、慶長3年（1598）まで統治した経緯がある。幕府は「古城は、反乱者の拠点になる」として神経を尖らし、両郡に対して特に、詳細な報告を藩に求めた。その後、古城は、江戸時代に編纂された地誌などに城名を留めることになる。ただし、城郭専門書ともいえる『古城考』に記載された城跡数は275城跡に過ぎない。平成10年度の時点で、熊本県文化課が把握している中世城跡は533城跡。大方が、無名の城として郷土の歴史の中でさえ、埋没したのである。

現在、県が把握している中世城跡は533城跡。これに古代山城の鞠智城跡と、近世城の5城跡（熊本城・宇土城・八代松江城・富岡城・人吉城）、中世城と近世城の過渡期にあたる3城跡（鷹ノ原城・麦島城・佐敷城）があり、計542城跡に及ぶ。平成の市町村大合併で死語となったが、つい最近までは、熊本県下94市町村の中で城跡を有しない行政機関は、産山村・鏡町・泉村・五木村の一町三村に過ぎなかった。まさに「一村一城」の状態であった。

その中であって、隈部館は、戦国時代後半の館跡と見なされる。特色は、標高340～370mラインの山腹に位置しながら、石垣を伴う樹型遺構の虎口をはじめ、庭園遺構や主殿・会所と推定される礎石建物跡が現存しており、県内でトップクラスの城館跡として位置づけられてきた。背後の高山には、猿返城や米の山城と呼ばれるネットワークを形成する砦が配置されており、山中の谷間に「^{かこい}罎」の地名を残す小集落の存在も興味深い。さらには、上永野地区の広域な麓集落の存在も特筆される。

※『菊水町史』通史編 2007年 第四編 中世

大田幸博著：第五章 第一節 肥後の中世城跡 に一部加筆した。

戦国期の有力国衆の館跡（熊本県指定史跡隈部館）

桑原 憲彰

『ふるさとの自然と歴史』第66号（昭和52年3月刊行）

はじめに

一面の蜜柑畑の間を縫って蛇行する坂道を登りつめると、蜜柑畑の途切れる中腹部分にやや平坦をなす場所がある。現在、隈部一族を祀る隈部神社が建てられているが、ここが隈部氏の館跡である。

館跡は昔から上永野部落の共有地であり、この館に登ることを部落の人々は「館上り」と称して、昔日の先祖達の行動を今も言葉の端々に残している。このように部落の公有地であること、殿様の館跡ということ、高所にあることが幸いして、約四百年前の遺構がそこなわれることなく現在まで保存されてきた。

このため隈部館は、昭和49年3月に県の史跡として指定を受けた。

指定を期に菊鹿町では昭和49年度から県費補助を受け、年次計画をもって館内の環境整備に着手した。町ではこの一環として、県の指導を得て過去2回に亘って発掘調査を実施してきた。

その結果、保存状況では現在も発掘調査が続けられている国指定特別史跡の福井県一乗谷朝倉氏遺跡に勝るとも劣らない遺跡であることが判明した。

ただ、朝倉氏は越前の守護職であり、単なる肥後の国衆の一人であった隈部氏とは、その性格および規模において相異はあるが、館跡を比較するとただその遺構が小規模であるというだけで基本的には変わらない。

今年は継続調査の三年目にあたるが、調査によって若干の知見を得たので、その概略をここでご紹介致したい。

一、隈部氏と隈部館

隈部氏は、宇野親治を先祖とする大和源氏の出身で、赤星・城の両氏と共に、菊池三家老の一人して重きをなした家柄である。親治は保元の乱（1156）後、菊池に下ったと伝えられ、子孫はいつしか菊池氏の家臣となり、六代の持直の時隈部を名乗ったという。南北朝の頃には菊池氏とともに、征西將軍を奉じて南朝のために戦い、九代の当主隆朝は筑後において戦死している。文明年間には文武の名将と言われた十三代の忠直が出て、一族の名を高からしめた。さてその孫親朝の頃にはすでに猿返城主であったと思われる。更にその子孫は周囲に、米山・日渡・山内等の城塞を築き猿返城及び隈部館を難攻の堅城とした。

隈部一族は平常は城に居らず城外の館にいたが、これが今日の県の史跡に指定された隈部館跡である。

二、防禦施設

元来、隈部館遺構は、現在残る深い内堀に囲まれた本館部分のみではない。昭和4年頃現地の上永野小学校に勤務されていた東氏の残された見取図によると、内堀の外に麓部分と中腹部分の二カ所に掘割りが走っていたという。

また、現在の舗装された蛇行する道は、後世設けられたもので、旧来の「館上り」に使用された道は、館正面入口に連なる麓よりほぼ真っすぐに延びる道路である。その一部は舗装されているが、現在はあまり使用されていない。この道路に沿って、左右の平坦地に若干の武家屋敷が建っていたらしく、現蜜柑畑に関連する地名が残っている。

間道沿いの多久大和守屋敷跡には、丈くらべ石とか土塁等が残っているが、これらは武家屋敷に付属した庭園の跡と思われる。地元古老の話によれば、蜜柑畑の造成以前には、これらの平坦地の一枚一枚に登り道から水路が引かれており、平坦地の土手面には石垣が築かれていたという。

さて南側の開口部分から館内に足を踏み入れると、二重の土塁に囲まれた25m×30mの面積を持つ、ほぼ

方形の馬屋跡と伝える広場がある。当時、馬を繋いでいた所で、いわば館の玄関口にあたる。道は、この馬屋跡の空地の真ん中をつきつて深く掘りくぼめられた内堀を横切る。この部分は土橋となっており館敷地への唯一の入り口であり、最後関門を形造っている。この部分にはもともと7段の石段が設けられていたが道路整備のため今は失われた。

土橋を経て館内にはいると、正面に野面積みの石垣が立ちふさがる。通路はここで右に折れ、再び石垣によって行手をさえぎられ北へ向う。ここで7段の石段を登りつめると建物の存在した平地となる。この石垣によって囲まれた鉤状の窪地の部分を一般に柵型と呼んでいる。近世城郭である熊本城等に見られる大規模な柵型の祖型と見ることができよう。

この館の東および西側は、切立てられ急峻な土手となっている。また裏山の斜面と接する北側は堀切と土塁を設けることにより館敷地と一線を画している。

このように館地は完璧ともいえる防備体制を備え、弱肉強食の戦国期のきびしい現実を我々に直に伝えてくれる。

三. 家屋礎石群

敷地にはこの外、当時の家屋数棟分の礎石群がほぼ完全な姿で残っている。現在調査中で正確な棟数は不明であるが、泉水を持つ庭園を囲んで対面所及び茶室と推定される2棟分の礎石が現在までに確認されている。第一棟家屋礎石群については昭和49年11月に実測を終了しているので隈部館家屋の一例として紹介したい。

この家屋は入口柵形部に一番近い場所に建てられた桁行7間、梁行5間の、平の部分が南面するやや長方形の家屋である。表土に礎石上面をのぞかせ、四百年の星霜を経ながらも、殆んどの礎石が失なわれず原位置を保っていたことは、まさに驚嘆に値することであった。

桁行の全長は、両端の礎石の芯から芯まで13.72mを数える。柱間が7間あるので、13.72mを7で割ると、桁行の1間の長さは196cmとなる。

梁行の全長は9.08mで5間となっている。1間の長さは、桁行と同様196cmを数えるが両端の1間は160cmとなり、やや狭くなっている。共に柱の芯から次の柱の芯までの長さである。

196cmは現在の本間の六尺五寸に相当し、160cmは五尺三寸に相当する。梁行の真中の三間は三者共に196cmを数えるので、桁行の7間と梁行の三間の範囲については、全二十一坪となり、縦六尺三寸×横三尺一寸五分の現在の本間用の畳が42枚敷きつめられることになる。桁行と梁行の長さが等しいということは畳の縦横の自由な敷かえが可能であり、中世的な家屋というより、近世的家屋の色彩がより強い。このことから、この家屋の寸法は、内法柱間制をとっており、すでに16世紀から、豪族の家屋では現在とほぼ同様の畳が敷きつめられていたことがわかる。

なお、一間の数値の異なる梁行部の両端の160cmを数える部分は、縁となっていたのであろう。

家屋入口は不明であるが、柵型部分との兼合いから考えると、南側にあったと推定され、平入であった可能性が高い。屋根は、瓦破片等の出土が一片も見られないので茅葺だったのであろう。

また、この家屋の性格としては、玄関部に近く大広間で、しかも庭園部に面していることなどから、対面所的性格を持つ建物であったと思われる。

四. 発掘された室町時代の庭園

昭和50年3月の第二次環境整備の際、第一棟北側の裏山の斜面から、室町期（16世紀初頭）の作庭と推定される庭園が、ほぼ完全な状態で発見された。

室町時代には、優秀な作庭が数多く成されたにもかかわらず、熊本県下ではこの時期の庭園として知られるものは少なく、現存するものは県指定の阿蘇郡小国町の満願寺の庭園、記録保存されているものとして

は、上益城郡矢部町の浜の館庭園等僅か二例を数えるにすぎず、今回の隈部館跡庭園の発見は学術上きわめて価値あることといえよう。

庭園は、北側の山の緩斜面とその裾部平地を利用して構築されており、簡素で小じんまりとまとまった庭園である。山の斜面に石を配し、深山の溪谷を二カ所に形造り、平地部には泉水を掘りあたたかもこの溪谷から流れ出た奔流が平地部に出て淀みをつくった情景を、この泉水で写している。

使用された庭石は、遠くから取り寄せた奇岩・名石といった類のものではなく、人が持ち運びできる程度の小さな手近にある石を利用して構築しており、このためか全体的に質素な感じの庭園となっている。

現代庭園の石組に多く見られる、上部に平面部を持つ背の低い石の使用は少なく、山の斜面に立てられた先の尖ったやや大き目の立石2～3個が当時の庭園の特色をよく表わしている。

当初、水の乏しい場所であり、泉水にあたる窪地部分の底が浅く、枯山水ではなからうかと思われたが、調査が進むにつれ池底部に土砂の沈殿が見られ、また最後に水を導入する水路が発見されるに及び、水を湛えた心字形の泉水であることがわかった。

戦乱に明け暮れた天正年間、国衆一揆で肥後の新国主佐々成政に叛き、秀吉から死を賜わり波乱万丈の生涯を終えた悲劇の武将隈部親永も、庭園に沿って建てられている対面所（現在の応接間）推定家屋あたりからこの庭園を眺め、しばし、心をなごませることもあったことであろう。

さて、現在、造園ばやりで、巨額の金を費やし巨石、名石を集め各地で贅沢な庭園がつくられている。室町末期隈部氏は肥後の国衆ではもっとも勢力を持つ一族であった。この隈部館の質素な庭園を眺めていると、いまの造園のあり方に何か疑問を感じずにはいられない。

五. 隈部館に関連する遺跡

この隈部館を取り囲んで数々の遺跡が存在する。館の裏山には、猿返城、米の山城の二城が設置されている。猿返城は隈部館の詰の城の役割を持つものと思われる。米の山城には馬蹄形状の土塁が山頂を取り巻いていると伝えられているが確認はしていない。また、館裏手に横たわる深い谷奥の要の部分には、隈部さんの井戸と伝えられる湧水池がある。清水が湧いている。また、館の北東部分にも約200m離れて湧水が見られるが、この2つの泉が館を養っていたようである。

館裏手の谷ひとつ隔てた冷水谷には隈部さんの刀鍛冶跡と伝えられる鉄滓が多量に散在する場所がある。やはり、館に関連した製鉄跡なのであろう。

また、館の前方（南面）の上永野の諸部落名には構口や造音寺等館に関連する地名が残っている。造音寺は隈部氏の創建と伝えられる寺院跡で、境内に五輪その他の古塔が存在している。

また、館の麓部分には、隈部氏の菩提所であった清潭寺もある。この寺院の裏手墓地には、隈部一族の五輪・宝篋印塔が数多く残されている。

六. 出土遺物と水鳥の石

初年度に土師質土器（燈明皿片）2個体分、二年次に泉水底部より、土師質土器破片が2、3片出土した。本年度に影青青磁と思われる楕円の口縁をなす湯呑み片、飴釉のかかった陶器片、明代の青磁片が3片、それに鉄製の角釘が3本出土している。

その外、凝灰岩を楕円状に削りぬいた水盤と思われる足の付いた石製品が2個分出土した。

過去2年に亘って調査を実施してきたが、このようにほとんど見るべき遺物は出土していない。

この外に既出土品としては、鳥を線刻した石が残っている。この石は元々、館の馬屋の南入口部分の左下に置かれていたものであるが、路停に面しており、傷がつきはじめていたので、四九年に樹型の左上に移転した。この鳥は背丈が13.5cm、横が12.5cm程度の大きさで沈線で描かれている。単純な線刻で、鳥が胸をはり、嘴を上を空を見上げた姿を写しているが、刀の鐔の象嵌や漆器等の文様に描かれる、秋の月に向って鳴く鹿の

姿等に見られる日本的情趣と一脈相通じるものがある。

先年、発掘調査を実施した同時代の阿蘇大宮司の居館跡「浜の館」からも、同型の高趾三影と呼ばれる水鳥の焼物（鳥型水注）が二対も出土している。恐らくこの線刻の鳥も水鳥であろう。これら同時期の2つの館に見られる水鳥は何か共通の意味を持つような気がしてならない。

また、ある人から水鳥を館内の石に刻み込んだ理由として、このような山地の水に乏しい城館の場合、空堀に水を呼ぶために好んで水鳥を刻んだ例があるということを知った。その例が福岡県の城に存在するそうであるが知っておられる方があったら御教示願いたい。

この他、館内には文字が刻まれた石がある。庭園の泉水の汀線石として使用された2個の凝灰岩のむかつて右側の石で、その上面に小さく二文字が刻み込まれている。

昔から館敷地内には隈部氏の埋納金が隠されているという伝承があったが、発見当時、この二文字が「妹金」と読めた。このため「まいきん」つまり埋納金の在りかを示す文字だということになり、地元で暫らくは話題をまいた。しかし、その後、よく水洗をし丁寧に拓本をとった結果「妙金」であることがわかった。恐らく五輪の塔の法名の刻まれた地輪部が泉水の汀線石として使用されたものと考えられる。

しかしながら、自然石を利用して作庭されたなかに供養塔もしくは墓碑として使用されたとはっきり判る方を泉水の汀石として使用するかどうか疑問であるし、また、置かれ方が蝶つがい半開きになった状態で2個の石が立てられていること自体も不思議である。あるいは後世の別の意味を持った遺構とも考えられるが不明な点が多い。

七. 隈部館の構築時期とその終焉

隈部館の構築された時期については、文献上明らかでない。しかし、館敷地内に残された数々の遺構から推定すると、16世紀に入ってから構築され、その後、数代を経て現在残る規模の館として完成されたものと思われる。館は先にも述べたように深い空堀を始め石塁・土塁・切落し等の施設により堅められ、戦国期の城館の特色を備えている。

隈部館は、このような完璧な防備体制と、庭園や家屋に見られる居住性を兼ね備えているが、戦国末期における隈部氏の勢力の伸展と併行して中世城郭から近世的城郭への移行がすでに開始されていることを、これらの遺構は物語っている。

館内の各所に残る鋭く切立てられた土手、深い空堀、小型の櫓型、館城を囲む石塁に、戦国期の生命を賭した防備へのひたむきさと、近世城郭として未だ完成されていない工法の未熟さとの醜し出す不思議な美を垣間見ることができる。

さて、今年度の整備事業に関する調査は、10月初旬より開始し、現在も続行中である。すでに昨年度の発掘箇所西側の中庭部分から千鳥足状に並べられた飛石が発見された。前年度には、殆んど見られなかった遺物も台所部分家屋に近づくにつれ、若干の出土を見るに到っている。

しかし、生活遺物は依然として少なく、この種の遺跡としては異例のことといえる。

さらに発掘区域には木炭・灰焼土等の火災を裏付ける状況も見られず、残された礎石群にも、火に遭った形跡は認められなかった。また隈部氏に滅亡後、家屋が自然に朽ち果てたといった状態でもなかった。

これらの事実から次のようなことが考えられる。

先ず生活遺物の出土が少ないことは、この館が営まれた時間が短期間であった。ということがいえようし、この種の遺跡に見られる兵火もしくは失火によって焼亡した形跡が全然ないということは、何らかの理由で建物いっさいを他所に移転させたということも考えられる。因みに、当時の隈部氏の動向を探ると親永は永禄二年（1559）に当時の隈府城主の赤星道雲と戦い、撃滅し、その勢力を失なおせ、やがて天正六年（1578）に隈府城主の地位を獲得している。その後の隈部氏は隈府城に移るのであるが、現在までの発掘結果とこれ

らの歴史上の事実を併せ考えると、この時、隈部氏は城も隈部館も廃棄して支城の米の山城だけに守兵を残してこの上永野の地を引き払ったことが考えられる。その際、建物いっさいも解いて隈府の方へ移した可能性が強い。

八. 保存と復元

発掘調査に並行して、館内の環境整備を進めている。現在まで対面所推定家屋の礎石については礎石間に碎石を入れ、アスファルトを3cm程度充填し、家屋跡全体をコンクリート製の道路の縁石で囲い込んでいる。

礎石の固定と雑草のカットという点では完全といえるが、見かけが悪く最上の策とはいえない。そのほか、庭園跡、引き続いて発掘を進める第三棟・第四棟の礎石の固定、保存対策については、まったく目途が立っていない。

とくに、泉水部分の保存については苦慮しており、旧来どおり水を湛えたとすれば、何らかの防水設備が必要であろうし、技術的にも解決しなければならない点が多い。

石垣については、柵型部分の正面石垣が崩壊していたため、高さ2m長さ4mに亘って築き直した。石材は崩壊した石を主にして、不足の分は館敷地内に散乱する石を使用した。つぎ方は野面積みで横つぎとし、周辺の石積みと外観的にも類似させた。元々が野面積みで裏込み石も施されていなかったため、比較的容易に作業を終えた。

以上の外に、各所と石垣の修理、庭園部の倒れた庭石の原移置への復起、抜かれた石の新規の充填など問題は多い。文化財の場合の修理の耐久年数は永久を目的としており、また、これらの整備にあたっては、現況を損なうことなく、また旧状に即した復元を必要とするため、これらの条件を満たすまでには幾多の障害がふさがっている。大方のご教示をいただきたい。

〔桑原 憲彰氏 略歴〕

昭和14年 山鹿市生まれ
昭和41年 宮崎大学教育学部卒業
昭和42年 熊本県立矢部高等学校教諭
昭和45年 熊本県教育庁社会教育課文化財係 教育研究所研究員
昭和47年 熊本県教育庁文化課文化財調査係
平成3年 熊本県立装飾古墳館建設準備室主幹
平成4年 熊本県立装飾古墳館主幹兼学芸課長
平成6年 同 副館長
平成10年 同 館長
平成13年12月17日死去（享年63歳）

【主な調査歴】

（山鹿市）弁慶ヶ穴古墳・チブサン古墳・隈部館跡
（和水町）江田船山古墳（山都町）浜の館跡（天草市）久玉城跡
（宇城市）竹崎城跡

隈部氏の諸政

隈部氏の諸政は此れとて取り上げて書くべきものはなけれども、世に傳ふる傳説遺物よりて少しく述べん。

思ふに隈部氏は、菊池氏に臣属せしために、その臣属の時代においては見るべきものなし。只、隈部忠直が菊池氏を補佐して文教の府たらしめ、その名を天下に現はせし時代はありしなり。然し、その他にはなく、独立の状態となりたる時も、諸政を立て民政を整ふるが如き、いとまなかりしが如し。

豊臣秀吉の起りて九州征伐、佐々成政の肥後統治等、中央はよく整理されしも、地方遠隔の地は戦国時代の余波未だ治まず、世相混乱の状態なりしなり。故に上永野に於ける隈部氏の行政も、武の方面にのみ施護せられしものの如し。又、親興氏の臣下にも、武勇あり戦略にすぐれたるものはあれども、民政に対して貢献したるものは、古き傳へにも古文書にも見ず。此に於ては「武家手習教訓書」といふべきものを作りて、武士の守るべき道及び規則をしらしめて、取締をなさしめ、又、大いに隈部武士を教育したるなり。その原本といふべきもの、清潭寺にあり。

又、此の他年に数回、鷹狩りをなさしめ、武を奨め体力を練り、万一の場合の用意をなさしめたり。今の横尾部落の上なる「鷹の水」といふは、その跡なりといふ。又、規則に違反せしものは、圍といふ所に牢をもうけて、その非を改めさせ、重大犯は上圍に永牢を命じ、又、井手ノ口に於て斬罪に處したりしなり。

猿返城の麓水口といふ所に於いては、刀工を置きて武士の魂なる刀剣を鍛へしめて、武士道精神の養成の一助たらしめ、此の他古老の傳ふる戦死山といふ所には、幾多の戦場に於て戦死せしものを集めて合葬して、亡き勇士の魂を慰め、又武士をはげませしなり。

かかる優美なる真情も当時の武士にありしかと、そぞろ感懷に勘えず。又、隈部氏は所々に寺院を建立して信仰心を植えつけ、然して、後世の安楽を思はしめ、安心して戦場に臨み得る精神を涵養し、大いに消極的にも積極的にも武士を養成したり。

原口の現在、拂い山といふ所は、往時、倉米を取り立てし役所の跡を傳ふる所あり。此處に於いて兵糧の徴発をなせしものならん。此の他にはあぐるものなし。

此の二三の事によりて想像する時、文の地でなく、武の地であったことが伺われるであらう。

隈部親永時代の上永野

今ここに、隈部氏の全盛時代なる隈部親永当時のことを古文書傳ふるままに記述して、遠き世を追憶せん、上永野といへば、現在に於ては、疋田、造音寺、構口、井手口、幸山、勢中、原口、屋敷、犬丸小路、高池、横尾の十二の小部落に分かれているが、その当時に於いては、五郎丸、桑原なども今もっていひたるが如き事実あり。

即ち、五郎丸中の三郎丸は、親永時代後に生まれしならんと想像されんも、又かく語るもの多し、又、五郎丸に通ずる或る道路など、町道といふところもあればなり。

隈部氏の館は、城北校より5.5kmあまり距りたるところ猿返城の山麓にあり、その館より西に下りて幅3m位の略直線なす道路長く上永野を縦貫して構口に至る。此の両側、館より700m位まで（現在は畑と山の境界まで位）は、武家屋敷と称し、それ以下、構口に至るまでを恐らく町と称ししならん。今もって学校の西100m位の場所を西町と称しているのでも判断せらるであらう。西町があれば、恐らく南北東の三つの町もありしならん。少なくとも東町と称するが如き所は、必ずやありしことと思ふ。

武家屋敷と称する所は、総て石垣を以て築かれ、その屋敷盡くる所に隈部氏の三段要塞（私は、かく呼ぶ）と称する最長のものが終わらんとしている。傳説によれば、その武家屋敷の終わりと言う所、現在、溜池のある場所は、隈部氏の重臣多久大和の屋敷跡と称す。その溜池の下より構口までの間に下れば、右は小路と言ひ、左を犬丸といひ、小学校の西一帯の地を西町といひ、その通路の一つは五郎丸に通じて、五郎丸中の小春に出て、現今の町道と称するものとなる。

又、此の西町の一帯は、今は田畑となれるも古老の話によれば、井戸など数個ありしと。又、このあたり（棕の木の下あたりか）一個の堂宇ありしを今、来民町に遷祭すと、その跡より数個の貨幣を出せしと傳えられる。かかることより考察するも、かなり廣き地域に亘りて町を形成せしならん。又、学校の下溜池の横を拂ひ山といひて、お倉米を納めしといへば、かかる地も相当の要地なりしか。

その下、富田末喜氏の直ぐ上には、昔日山なりしを開きしといふが、その当時であつては、一個の堂宇の跡と思はるる場所、即ち、廣さ4坪あまり、高さ1m余りの地域ありて、その中より瓦の破片など出でしと。又、その100m余り下の現在、桑畑となれる地に、周り40cm位の柿のある側にもやはり小高きところありて、白砂などつみありしと傳ふ（其地を開墾せるものの話）。それより勢中幸山を経て造音寺に至る。造音寺とは、その当時、隈部氏の建立したる寺院の名を取りてつくりたる部落名であつて、今、造音寺の寺院はなけれども、その跡は、現在、岡嘉一氏宅の上の藪の中にあり、今、一小堂ありて、その奥に隈部氏の墓碑二つあり。

又、そのすぐ下の部落を構口といふが、そは此の上永野に出入りすべき最も緊要なる所なれば、此處に或るひは、関所を設けておりしならん。即ち、役人を出張せしめて、此處の出入を厳にせし所か。その跡といふべきものはなけれども、見るものをしてうなづかしむるに足る地形なり。かくの如く隈部氏の用意は、かかる所まで及んで、戦国時代の威を一層、強からしむ。

〔東 亮憲氏 略歴〕

本籍地：熊本県鹿本郡菊鹿町池永1929

明治37年 菊鹿町池永生まれ

長年、教育関係、保護司、文化財保護等に活躍

昭和47年11月1日 菊鹿町文化財保護員を委嘱

昭和51年5月8日 死去

治は忠直の脇役的存在であった。

いずれにせよ忠直が背負ったのは、為邦から重朝への当主の交替が間違っではいなかったことを内外に周知させることが重要な役割であったということが出来る。五山僧侶との交流で重朝の好學と文芸の才能を中央に伝えることで菊池氏の評価を国外に広め、藤崎宮の鑄鐘や阿蘇山本堂造営を後援して重朝の功を国内に周知させることができた。一方、重朝政権の宿題であった筑後回復は、訴訟も出兵も成功せず、却って五条氏の離反という不利すら生じた。さらに、大友氏は大内氏との対立関係を修正したので地理的に不利な位置にある菊池氏は内外に面目を落としただけの結果となった。

一方、大内氏は豊前・筑前二国を手中に収め、文明十二年（一四八〇）に当時の連歌界の第一人者である飯尾宗祇を九州に招いている。宗祇は筑豊の武家に歓迎され、各地で連歌の座に招かれて大友氏の新領国安定に貢献している。文明十三年に菊池家中の侍を集めた菊池万句は、内には家中に批判勢力を生み出しかねない政治情勢を抑え、外には菊池家中の結束力の健在をアピールせねばならなかった忠直の演出であつたという視点も可能である。とすれば、隈部為治は為邦・重朝時代の菊池氏の歴史の裏面と深くかわつた存在であつたことになる。

その他、隈部忠豊も系図には記載されていない人物である。永正三年（一五〇六）十月十三日の相良文書「城政冬外二名連署状」（『隈部館跡Ⅱ』所収）では、政隆が阿蘇惟長援兵として来陣した大友勢と戦って両度勝利したと述べているが、この文書に連署している「外二名」とは、内空閑重載と隈部忠豊である。文書の上書きには「隈部弥八郎」とあり、名乗りからは忠直系・忠門系に近いし、弥八郎からは弥七郎衛年と兄弟かとも想像される。同様の連署状は牛島文書の「菊池家老臣連署宛行写」（熊本県史料中世編第四）にも見られ、反政隆方に傾いた大勢に背いて政隆方とし

て終止したのであろう。隈部親春「隈部家代々物語」は、島原に隈部姓が存在すると指摘しているが、関わりあるとすれば、政隆の島原亡命に随従した忠豊に由来すると見るのが妥当であろう。

五、まとめ

隈部の地は、菊池郡北部の迫間川が山間から平場に出た兩岸の隈府扇状地一帯を指し、東に所在する菊池川右岸の木庭などとは対峙する位置を占める。

隈部氏の苗字は、この地域に由来し、南北朝内乱初期の隈部城は同氏の城であつたと見られるが、やがて菊池武光の代に菊池本城となり、隈部氏の城ではなくなつたといえる。しかし、隈部氏は苗字を変えていないと見られることから、本拠を他に移していないと云えよう。これは、隈部氏が菊池氏宗家の旗本（直属軍）として主家と一体化した存在となつた故であるとすれば説明できる。

隈部氏は、城氏・赤星氏のように菊池氏と同族ではなく、室町時代から源姓を称していたことが、隈部忠直母の供養塔銘文で明らかである。このことから隈部系図のいう大和源氏宇野親治始祖説は、他の可能性とともに再検討の余地が生じる。近世前期の記録により、宇野を称する家が山鹿湯ノ町別当として、少なくとも中世末期には存在していたことが明らかであり、その間の隈部氏との関係はさらに考えてみる価値はある。

室町期の隈部氏は、二系統を中心とした複数の五十六家の同族集団として、菊池家中では最大勢力であつたが、系譜上著名な最後の宗家である親永・親泰の親子とどう繋がるか、傍証する史料は未確認である。一方で、菊池の歴史展開の過程で重要な存在でありながら系図に洩れている人物も指摘できる。

書の隈部為治関係文書は、その間の事情と絡む文明九十年のものと推定される。

菊池氏は伝統的に肥後に近い南筑後の国衆たちとつながりがあり、その出兵が彼らの呼び水となって大友勢と筑後で対抗し、南筑後の実力支配が確保できるという目算があったと考えられる。

しかし、為治が言うように、大友氏は菊池氏の訴訟の年から筑後国衆の抱え込みにかかって味方につけており、それまで大友氏と通じることのなかった五条氏をも五百町安堵を条件に菊池方から離反させたから、菊池の出兵は効果がなく、却って背後を襲われる危険さえ生じたのであった。これは旧菊池家重臣として、山を隔てた筑後国境の向こうにいる五条氏とは本来周知の關係にあった為治でなければできなかったことであり、政親の為治への上意(態度)も丁寧であつたわけである。

しかし、隈部為治がなぜ他国に出て大友と通じ、系図にも名を残さぬ結果となつたか。為治が菊池を出た背景には、菊池家中の内紛と關係があつたとしか考えられないが、それは為治の名乗りからみて持朝の時代は考えられず、為邦・重朝時代のことであろう。この間に変つたことといえば、壮年三十六才の為邦の隠居と若年十七才の重朝の家督相続という不自然な事件がある。この件については歴史は語らないが、なぜか相良文書に残される「菊池重朝書状案」では、

「御教書之事、父子不快無御存知、肥後守と被成下候之由承候、不審之至候、既家督相続之段致注進候之間(略)」

と、幕府の上使に対し、為邦との間に「不快」(対立)があり、家督相続の報告は済ませているのに幕府は肥後守宛ての文書を送ってきたのは納得できないと述べている。文明十年十二月日付の「室町幕府奉行人連署奉書」(大友文書録)は、重朝に宛てて「菊池十郎殿」とあり、肥後守と幕府は認めていない。或いは、幕府は当初、為邦から重朝の家督交替を認めていなかったのかも知れない。この不自然な家

督交替の原因を直接語る史料はないが、交替のあつた文正元年(一四六六)は、寛正六年の翌年に当る。寛正六年は高良山合戦があつた年であり、大友・菊池の筑後守護の半国の分割の幕府裁定を無視した実力行使で菊池勢が敗北し、大將肥前為安が討死し、筑後守護職を菊池氏は失つたのである。

この問題では、恐らく菊池家中内部で受諾か実力対決かの意見の対立があり、為邦は寛正三年以来、為治を幕府との交渉役として和戦両様の姿勢であつたが、大友に時を与えるという批判が根強く、結果は出遅れた出兵で敗北となつた責任が問われたのであろう。多数派となつた為邦批判勢力は重朝を擁立して為邦を隠居させ、和平派の為治の亡命という結果となつたとみるのが妥当なところではないか。それ故に重朝政権では、筑後権利の回復は果たさねばならない課題であり、文明九年の幕府訴訟・十年の筑後出兵となつたものといえよう。

十七才の重朝が、父為邦との対立の形をとり、家督を相続した背後には、重朝を表に立てた菊池家中の侍たちの多数の総意があつたのであり、この菊池家中の侍の総意は、対能運の袈裟尾合戦、宇土為光の推戴、反政隆勢力の結集、阿蘇惟長の推戴と菊池氏宗家の歴史の節目のいずれにも現れており、菊池氏当主を規制し、変革する原動力として歴史に作用したのであつた。

その中で、最大勢力である隈部氏の影響力は大きかつたはずである。そして重朝政権を補佐し、家中を動かしたのが隈部忠直であつた。ただ忠直が反為邦派として重朝擁立の中心人物であつたのか、為治亡命により結果的に隈部一族代表者として城・赤星氏とともに重朝政権を支えたのかの判断は下せない。忠直はその名乗りが持朝から与えられたと推定されるところから為治より年上であつたと見られる。しかし、為邦時代には為治が一族を代表し、忠直は脇役にあつたと推測される。忠直が重朝の老者として一族を代表している時、為治の後継者と見られる次郎右衛門武

為邦の一字を得ての名乗りと見て、文書・内容とも矛盾はない。

これら文書五通は、筑後守護の大友氏が、これまで所縁を作ることのできなかった筑後国八女郡矢部の五条氏を味方につけた事情を示すものであり、これに隈部為治が関わっている。文書には年代を欠くが、後述するように内容から判断して文明九十年（一四七七）一四七八）であろう。

検討の前に、各文書の内容の要約を述べる。

①隈部為治文書（十二月十二日・五条氏宛）

筑後山中勢力の去就は未定のようなのだが、筑後の大半は大友方となったこと、五条氏は千町の安堵でなく、五百町の安堵を条件に、大友方を表明すれば安堵状を入手できる。大内氏・島津氏も大友に音信があった。

②大友政親書状（十二月二十九日・隈部為治宛）

五条良邦が大友方となることを申し入れてきたこと。所望の地を筑後の内五百町の預け状として出すので、五条氏が太友としての立場を明らかにするよう指示。

③大友政親預け状（十二月二十九日・五条氏宛）

大友政親、五条氏に五百町の預け状

④隈部為治書状（正月十二日・五条氏宛）

政親の預け状を受け取り、守護代に持参して内容を確認したことを伝える。

⑤隈部為治書状（二月二日・五条氏宛）

豊後への五条氏からの使者派遣を政親が喜び、為治も面目を施したこと。新給地を早々治めること。昨日の五条氏からの書状は持参（館へ）して御前に置いてきたこと。

この五通の文書内容から、為治は、大友政親の館のある府内に滞在していると見られること、大友政親と直談できるような関係にあること、政親不在の時は御前（執務室力）に書状を提出しておくなど、館の出入りが認められているほど、大友方に信用されていることが推定される。

為治の名乗りは、一族の中で唯一、菊池為邦の上の一字を与えられたものであり、但馬守の受領名（官職）を称しているところから、隈部一族では筆頭の地位にあった人物と考えられる。このように菊池三重臣家隈部氏の筆頭といえる人物が、国外に出て大友氏と五条氏の間を仲介し、従来の菊池氏との結び付きから五条氏を離反させる画策を行っている事情をどう理解すればよいか。

南北朝内乱以来、大友氏と菊池氏との確執は続いているが、この問題は筑後守護職に端を発している。一方、海を隔てて向かい合う豊後の大友氏と長門の大内氏も対立・抗争があり、大友持直は大内盛見と戦い、盛見は討死している。その間に足利義教は、菊池持朝に大内氏を助け、大友氏討伐を命じ、筑後守護職を与えることを約束しており、永享四年（一四三二）、菊池持朝は筑後守護となった。しかし、幕府との関係を修復した大友氏は筑後回復に動き、寛正三年（一四六二）、足利義政は大友政親に筑後半国守護職を与えた。菊池為邦はこの処置に納得せず、寛正六年（一四六五）、大友氏との間で高良山合戦となったが、大將肥前為安の討死による菊池勢敗北の結果、筑後一国すべてを失うことになったものである。

その後も大友・大内対立の中で、菊池は大内氏に近く、親幕府路線の大友氏に対し、反幕府の行動を取った鎮西探題渋川教直の亡命を受け入れるなど、反幕府の姿勢があった。

文明九年（一四七七）、菊池重朝は幕府に対し筑後半国守護を訴訟したが認められず、翌十年には筑後に出兵したことが知られるが、その成果はなかった。五条文

特に、人数の多い隈部姓で複数の家の存在の可能性は、両史料を通していくつかの世代のグループを推測することができる。仮に別表(資料二)に関係図の案を考えてみたが、万句連歌で三家から五家、諸侍連署起請文で三家から五家に隈部一族は分かれていたのではないかと想像される。その中で忠直系(直)と武治系(治)が主流ではなかったかと思われ、なお、忠直の父・朝豊の名乗りと官名につながる朝系は忠直系の傍流であろう。

主流と見られる直系と治系について、忠直が重朝の老若代表であったことは確かであるが、彼が文明四年に阿蘇山本堂造宮棟別銭について、肥後国内の国衆たちの依頼責任者として奔走していた時、その補佐役であったのは次郎右衛門武治であるが、彼は永正二年の諸侍連署起請文では式部少輔を称し、連署の位置から見て直系統の和泉守宗直より格上であり、赤星・城・隈部三老若代表の一人であると推定される。この直系・治系隈部姓のどちらかが系譜上で最後の隈部氏宗家である親永・親泰につながるはずである。筆者は、本来、治系が宗家であったと見てはいるが、後述の為治事件で忠直が重朝老若となったことから、どちらとも判断しかねている。

(二)隈部為治の存在

隈部氏の中には、系図には記載されていないが、関係史料を検討する時、歴史上無視できない人物をも挙げることができる。

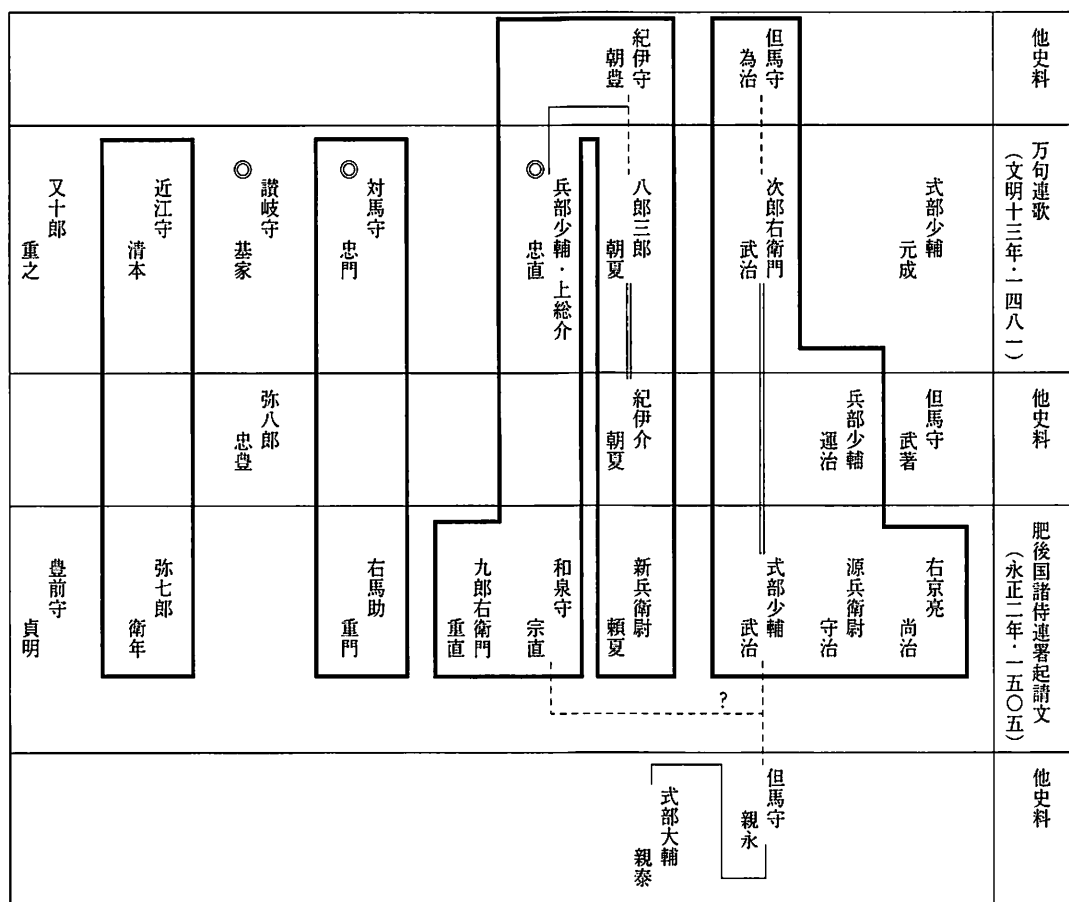
五条文書の中に残されている隈部但馬守為治である。この為治関係史料は、隈部武治書状三通・大友政親書状一通・大友政親預け状一通の計五点で、『隈部館跡Ⅱ』の関連文献史料に収録しているので文書紹介は省略する。為治の名は他の肥後関係の文書や隈部系図にないことで、従来知られていなかった人物である。彼が隈部一族であることは「隈部但馬守為治」の書状の上書きで動かないし、為治の「為」は

〔資料二〕

隈部一族系統図(試案)

◎連歌会席主

—— 同一人物



文亀元年(一五〇一)菊池能運は老臣ら家中の侍と対立し、一部の側近と隈府を脱出、玉名の一族肥前家や南筑後の兵を率いて隈府の西の袈婆尾原で隈府の老臣たちの軍と戦ったが敗北し、肥前高来に亡命した。隈府の家臣たちは、養子となって宇土氏を嗣いだ持朝の子・為光を守護に擁立して隈府に迎えたが、文亀三年に能運はその地位を回復し、宇土氏滅亡、宇土氏に協力した八代の名和氏は本拠八代城を失う結果となった。ところが永正元年(一五〇四)、能運が急死し、後嗣ぎがなかったで、遺言により迎えられたのが、一族肥前家の政隆であった。政隆の父・重安は、先の袈婆尾原の合戦で能運方として討死している。政隆は隈府に入って家督を嗣いだ、家中は政隆派と反政隆派に分裂し、永正二年九月、反政隆派二十二人は阿蘇惟長に起請文を送り、武力対決における後援を求めているが、さらに、大友氏もこれに介入し、大友義長の二男(後の菊池義武)を送り込む案も生じた。しかし、大友二男は幼少の故に、結果として惟長を守護とする案に決着し、送られた起請文が十二月三日のものである。この段階では反政隆・惟長擁立の連署者は万句連歌発句者八十六人に匹敵する八十四人となっている。もちろん、この中には一族は含まれていない。当主政隆への賛否は宗家内部の問題であったのである。また厳密に言えば、城政冬や隈部忠豊・内田重国・山北邦統などの政隆派は含まれていないが、内古閑重載のように連署に参加しながら政隆派となっている例も存在する。これら両史料の菊池家中の侍を検討するに、隈部姓の人数は他姓に比べて格段に多い。万句連歌では隈部姓は十人、次に四人記されるのが赤星・佐藤・伊牟田姓、三人が城・小森田・内古閑姓であり、諸侍連署起請文では、隈部姓八人、次いで赤星姓五人、内古閑・小森田・竹崎姓四人、内田・城姓三人である。したがって、重朝時代・能運時代の菊池家中で隈部一族が最大の勢力を占めていたことは動かさない。さらに永野・阿佐古氏は独立しているが、隈部一族とされているのである。

この隈部姓の侍たちは、その数からみて親子・兄弟といった近い一家の者だけとは考えられない。万句連歌では隈部氏三人が席を提供しており、それぞれ隈府に館を構えていることは確かである。また、受領名(国司)あるいは、これと同格の中央官職を称している者やそうでない者には格差があると見られ、受領名等を称している者は独立して一家を構えた存在として考えられる。万句連歌では式部少輔・上総介・対馬守・讃岐守・近江守は、少なくとも独立した存在であるとみられ、諸侍連署起請文では式部少輔・和泉守・豊前守は格上で独立の存在であると見られる。もちろん、若年の当主の場合は、官名低く、後に上昇している場合が、次郎左衛門から式部少輔となっている武治、八郎三郎から紀伊介となっている朝夏もいるので、一概に云えない部分もあるが、これだけの隈部一族は数代を経て独立分流の家の当主たち複数の集合体であると考えられる。その内、早く分かれ、隈部の西方に苗字の地を称した阿佐古・永野氏のような一族もあったが、多くは菊池氏宗家直属の家臣として隈府城下・隈部の地を離れなかったので、独立しても隈部姓を称する結果となり、また、主君の直臣団としてその周辺にある故に結束力も強い存在であったと推測される。

また、一般に名乗りは、その家の一字を継承することが多く、官職もこれに準じる。官職を得ていない者は、まだ若年か家格の低い者であろう。ただ、名乗りについては、この時期に主君の一字を与えられる場合も生じ、為邦の「為」や「邦」、重朝の「重」や「朝」を称する者が見られるが、一字を得た彼らは、主君と所縁強い者であり、一族代表者は主君の一字でも格の高い上の字を名乗っている。文明十三年(一四八二)と永正二年(一五〇五)の両史料は、二十余年の差があり、武治のように同一人の場合もあるが、その間には親子、あるいは孫までの世代の差が推測される。

[illegible]

万句連歌発句作者と場所一覽

(資料一一)

(文明十三年(一四八二)八月一日)

重朝館座敷

(菊池 肥後守)重朝

周持

北 高房

湯郷 式部少輔 賴種

赤星 九郎 重規

城 為冬亭

城 右京亮 為冬

長田 式部少輔 其秀

合志 太郎 重隆

馬見塚大和入道 有盛

木山 三河守 惟之

隈部忠直亭

○隈部 上総介 忠直

石貫 民部少輔 安元

西福寺 広替 孝空

宗 大和守 重信

宮崎重作亭

宮崎 兵部少輔 重作

白石 常陸介 頼道

方保田 丹後守 守経

吉田 兵部少輔 公夏

弥生 式部少輔 朝氏

竹崎惟岑亭

竹崎 伊豆守 惟岑

延命軒 慈載

竹崎 安芸守 惟氏
嶋崎 右京亮 公興
高倉 因幡守 守俊

山北邦統亭

山北 对馬守 邦統

鬼嶋 出羽守 邦久

伊牟田兵部少輔 家吉

西山 河内守 経道

赤星 遠江守 有信

関部邦宗亭

関部 伊豆守 邦宗

高嶋 近江入道 元雄

嶋 長門守 宗次

平川与三左衛門 高冬

北嶋 新左衛門 氏世

平山盛世亭

平山 遠江守 盛世

赤星 中務丞 有繼

佐藤 駿河守 邦佐

○隈部 又十郎 重光

市田 美濃守 惟実

若蘭忠幸亭

若蘭 山城守 忠幸

西山 伊賀守 安貞

伊牟田加賀守 守親

城 六郎 重岑

小森田八郎左衛門 邦治

小森田重世亭

小森田兵部少輔 重世

石貫 主税助 広政

小森田 三河守 経世

宇都宮 次郎 貞綱
塚本 伯耆守 親勝

隈部基家亭

○隈部 讃岐守 基家

桜井 播磨守 公綱

南福寺 長朝

荒尾 和泉守 泰直

伊牟田上野入道 宗与

山口朝昌亭

山口 九郎右衛門 朝昌

佐藤 兵部少輔 邦則

久多良木 伯耆守 良直

安樂院 契教

桜井 大藏少輔 公岑

阿佐古武貞亭

阿佐古 式部録 武貞

瀬田 兵部少輔 武宗

竹崎 出雲守 惟円

岩野 山城守 遠時

秋蔵 備前守 公尚

早岐邦政亭

早岐 山城守 邦政

早岐 六郎次郎 元昭

合志 藏人佐 隆門

平川 和泉守 惟親

山井重統亭

山井 勘解由允 重統

内古閑 図書助 頼統

石貫 広福寺 源有

内古閑 周防守 誠長

○隈部 八郎 重治

内古閑為載亭

内古閑 刑部 為載

佐藤 大和守 為春

○隈部 八郎三郎 朝夏

霜野院主 祐泉

○隈部 次郎右衛門 武治

長野重郷亭

長野 太郎 重郷

鹿子木 兵部 重貞

長野 修理亮 右俊

○隈部 式部少輔 元成

佐藤 式部少輔 為成

隈部忠門亭

○隈部 对馬守 忠門

城 伊豆守 朝成

○隈部 近江守 清本

赤星 修理亮 有直

道田 加賀守 邦世

(願成寺座)

願成寺 弥阿

願行寺 吾阿

伊牟田 勘解由 朝広

方保田 藤左衛門 良清

木葉 遠江守 信治

(多聞院座)

勝蔵坊 長尊

高倉 出羽守 家俊

○隈部 新左衛門 弘直

多聞院 珠長

常樂寺 長勢

折ふし、彼国に下り国侍とも手に不入難儀に及事あらハ、互に頼れ申へしと契約有、政隆を当国にて菊池殿と号す、案に不違、親重国侍にせはめられ、日向にたまりかね、菊池をたのミ、当国に引越、隈府に移住し給ふ故、隈府殿と申、

『肥後地誌略六』（宝永五年）〔追加史料三—三〕

(一)「鶴山城跡、宇野七郎親治、鶴山に城を築きて居住す(略)七郎親治は大和源氏にて、保元の乱に洛中にて平基盛と戦て擒となる、菊池に預けられて山鹿に住す、其子孫隈部と称号を改め、菊池代々の家臣なり(山鹿由来記)」

(二)温泉郷 土俗の説に昔山中の鹿冬日此所に集り、浴して身を煖むるを見て、温泉を見出す、因郡の名を山鹿と号すと云う、隈部上総介忠直建てたる温泉の十境(略)

『中原雜記』（寛文三年）(肥後古記集覽 所収)〔追加史料三—四〕

一、山鹿湯ノ町別当ハ、たとへバ昔ハ宇野七郎親俊嫡子宇野小次郎親治、此代ニ湯ノ町ノ別当役ニ宇野を御免被成、宇野源四郎と申、是より代々宇野を名のり役を勤、寛文中にて別当跡絶、

四、万句連歌と肥後国諸侍連署起請文

(一) 両史料にみる隈部一族

この両史料は、性格や目的は異なるが、守護大名菊池氏を直接支える人的・領域的構成が推測されるものとして古くから紹介されているものである。その中に見出される隈部一族の名と系統、菊池家中における位置付け、また、両史料間の二十余年の時間差から検討されるべき内容を含んでいる。両文書とも関連文献史料として

報告書『隈部館跡Ⅱ』に収録されている(ただし、万句連歌は隈部氏一族の分のみ抄出)。

問題となるのは、両史料に列記されている菊池家中の人名である。そこで理解を助けるために別表(資料一—一・資料一—二)に整理した。

周知のことであるが、「菊池万句」と呼ばれる連歌は、文明十三年(一四八二)八月、隈府において菊池重朝が主催したもので、千句を二座で受け持ち、二十座の席で成就させた一万句連歌で、その全句は伝えられていないが、各百句の発句(最初の句)のみは、弘治二年(一五五六)に城越前守親賢の自筆写本(県指定重要文化財)が伝えられており、その発句と作者名、また席主の名が記されている。

これら参加者の人名は、寺家を除いて菊池重朝の直臣たちであり、彼らは、菊池・合志・山鹿・山本・玉名・鮑田・詫磨の肥後国北部七郡の領主たちである。ただこれには被官化した城氏・赤星氏は別として、宗家に対して一応独立している一族は含まれていない。彼らは、木野氏・山鹿氏(山鹿郡)、高瀬氏・肥前氏(玉名郡)・千田氏(山本郡)・出田氏(鮑田郡)・菊池詫磨氏(詫磨郡)、宇土氏(宇土郡)である。これらの一族が家臣とは別扱いされて、国内の国人領主並みに扱われていることは、文明四年(一四七二)の阿蘇山本堂造宮棟別銭の催促からも明らかである。

万句連歌は、肥後国守護大名である菊池氏宗家が直接把握している直轄領内の領主たちを連衆として集めて催したものであった。

一方、その二十余年後の永正二年(一五〇五)十二月三日作成の「肥後国諸侍連署起請文写」(阿蘇文書)も、菊池家中の侍たちが連署したものであるが、これは主君の催しによるものではなく、同意の侍たちだけが連署したものである。その前書きの大意は、肥後国の守護として阿蘇惟長(大宮司)を推戴することを皆で申し定めたので、今後二心なく行動すると誓っているものであるが、この理解のためには時を遡っての説明が必要である。

また一時代前の永正二年の諸侍連署起請文の代表者隈部式部少輔武治は、九月五日の連署起請文についてだけは「山鹿式部少輔武治」と記しており、山鹿の地との間に何らかの関係も考えられる。

(二) 宇野親治伝承の展望

隈部氏が中世後期に源姓を称していたことが明らかであるとすれば、宇野親治始祖説と絡むものとして親治伝説の検討は避けられないであろう。

江戸時代の隈部氏の祖に関する伝承記録の中では、山本郡系と山鹿郡系のものが考えられる。山本郡系は『霜野物語』・『花群山参詣記』がそれであり、山鹿郡系は『山鹿由来記』によるという井沢幡竜の『肥後地誌略』である。山本郡系は内古閑氏関係の中に伝えられたもので、戦国期に内古閑鎮資の養子に、隈部親永の次男が迎えられて鎮房と称したことから隈部氏に言及している。

その他『昔噺聞書』にも城村城籠城の中で、保元物語を中心とした隈部氏の始祖に言及するが、それは国内各地の伝承を集録したものに含まれる一つに過ぎず、時代は遅れるのではないかと思われる。

後記抄出の(追加史料三)の内容から伺われることは、江戸時代前期の城北地方の伝承において、温泉・宇野親治・隈部氏との関係が異なっていることである。すなわち、山本郡系では、宇野親治と隈部氏は結びつけず、山鹿温泉と宇野親治の関係を伝えているのに対し、山鹿郡系では、宇野親治と隈部氏のつながりを伝えるが、温泉と宇野親治の由来は認めていない。したがって、前時代の隈部氏と菊池氏との関係についての共通の歴史認識はあったが、江戸前期の段階では、宇野親治については別の伝承も混在していたと推測せざるを得ない。では、宇野氏伝承の根源は何かということであるが、筆者には『中原雜記』の伝承は示唆するところが多く興味深

い。この記録は山鹿郡西牧の中原某がその祖父や同村蓮政寺の住職了巴の証言を寛文三年(一六六三)にまとめたものであるが、蓮政寺は山鹿湯ノ町とも所縁深い寺であった。したがって、戦国末期における山鹿湯ノ町の動向がいろいろ紹介されているが、その中に町の統領である別当家の伝承を、その部分のみ抄出紹介した。

それは、別当家が宇野親治の許しで宇野源四郎と称することに始まり、代々宇野姓を名乗り、中原雜記が成立した頃まで、その子孫は続いていたというのである。これは山鹿湯ノ町において、中世に遡って宇野を苗字とする家があったことを示す証言として重要である。この家が宇野親治伝承と結びつく根源であり、商人と武家の身分が未分化であった中世山鹿湯ノ町の町衆集団を支配する別当家の権威を支える伝承であったことは確かであり、別当家本家は断絶したが、一族はその後山鹿で伝承を伝え、祖先の称揚を行ったことが知られる。中世後末期に宇野姓を称した山鹿湯ノ町別当と戦国後期に山鹿郡を支配した源姓隈部氏との関係については明らかではないが、隈部系図理解には、これらの伝承も念頭に検討されるべきであろう。

『霜野物語』(元禄年間成立カ)(肥後古記集覽所収)(追加史料三一)

(略)親永の先祖を大膳大夫親重といふ、延久五年に日向国を給り下向せられしが、国中の者にせばめられ、国の住居成りかたく、菊池をたのミ肥後に来たり、隈府に居住し給ふ故隈部とぞ申しける(略)

『花群山参詣記』(享保八年享 元禄九年成立カ)(肥後古記集覽所収)(追加史料三一)

(一)(略)町に温泉有、此湯治と申せしは、大昔此所鹿住山にて有し時、宇野源次郎親春、鹿をねらひに此山にわけ入、此場を見付、

(二)(略)隈部八本名何と申せしとも知らず、大膳大夫親重とて、延久五年に日向を給り、又七条大納言道隆卿ハ肥後菊池庄を給て、同前に都を打立下り給ふ

ない。これは家の名乗りの字以外に主君の名乗りの一字が与えられる例が生じていることを示す。朝豊は持朝というより、その父・兼朝から与えられた「朝」であろうが、忠直の「忠」は何か。持朝は將軍義持の一字を与えられていたので「持」は与えられず、代わりに家臣に与えたのが「忠」であつたと推測される。

為邦の老者と見られる宮崎右衛門大夫忠利・某忠治の名が相良文書にあり、阿蘇文書には正長二年の「菊池持朝加冠状写」では「惟忠」と与えている。忠直の名乗りも持朝が与えたのであろうが、親子とも歴代主君から名乗りの一字をもらっていることは、朝豊・忠直の家系は一族の中でも格の高い家で、主君菊池氏とのつながりも深い地位にあつたと見ることが出来る。ただし、「万句連歌」には忠直とともに「隈部八郎三郎朝夏」の名があり、彼は後に「紀伊介」を称し、相良氏に使者として来たことを沙弥洞然は「沙弥洞然長状写」（相良文書）に記している。忠直は誕生の翌年母と死別している故に異母弟がおり、父の名乗りや官名はそちらに継承されたと見てよいであろう。そして、永正二年（一五〇五）の「肥後国諸侍起請文写」には「隈部新兵衛尉頼夏」の名があり、この系統は忠直系の傍流として存続したのではない。

また、忠直は「上総介」の官名で知られているが、銘文の寛正二年（一四六一）には「兵部侍郎」の唐名で記されているので、この時は兵部輔であろう。輔には大輔と少輔の上下があるが、後年の上総介の称からみて、称していたのは兵部少輔ではないか。

また、隈部氏が中世当時に源氏を称していたことが碑銘で明らかであるならば、隈部系図の大和源氏、さらには宇野親治始祖説との可能性も無視はできない。

しかし、また、別の発想も可能である。先述の正観寺文書・広福文書に見られる「隈部対馬守」と註記される文書の「源秀」なる人物であるが、これを「みなもと

（の）すぐる」と読むこともできる。源姓に一字の名乗りを持つ武家には、摂津国の渡辺党が知られているが、その同流とされる肥前松浦党の武家たちも、源姓で一字を名乗る。松浦の浦々や島々や五島列島は、伊勢神宮領「宇野御厨」と呼ばれている。松浦党の武家たちは平安末期以来、この御厨の在地領主としてその支配権の一部を継承していた。さらに下松浦の山代（源）弘は父の正から元亨元年（一二三二）、筑後国八院村地頭職を譲与されているが、これは三潴郡三潴荘内とみられ、宇野御厨の住人源姓の武家の九州内陸来住の可能性もあるといえよう。いずれにせよ、隈部氏が宇野親治と結びつくには、山鹿との接点が考えられねばならないが、山鹿と隈部の関係が証明できるのは天文十九年（一五五〇）以降のことである。

菊池能運死後の紆余曲折の肥後国戦国時代史の展開は、最終的に菊池義武（大友義長二男）と鹿子木氏の没落した天文十九年をもって菊池氏分国が名実共に完全に消滅し、菊池家有力家臣は大友氏分国肥後の中で一郡規模の国人領主として認められた。具体的には、城北七郡の菊池旧領は、飽田・詫磨郡を城氏、城氏の後の山鹿郡を隈部氏、隈部や菊池本城を含む菊池郡を赤星氏、合志郡を合志氏、山本郡を内古閑氏に分け与えられたのである。

したがって、隈部氏は本来の苗字の地である隈部・隈府の地を捨て、山鹿郡に移らざるを得なかったが、城氏の本拠となっていた山鹿郡城村城ではなく、隈部の地と隣接する永野の地に移った先が、いわゆる隈部館であろう。ここが、その後の本拠となったことは、後年の合瀬川合戦における隈部・赤星勢の布陣の伝承からも納得できる。隈部氏の隈部の地に対する未練はかなり強かったことを推測させる。

隈部氏本宗は、山鹿郡の中心山鹿の地を本拠とすることはなかったが、親永の子の親泰が城村城に居城し、また弟の親広が山鹿西部の西牧村を領したと伝えている。

の事或は異なると雖も、而れども子母の情は乃ち同じ、我襁褓の中に在つて母を喪い、遂に願氏の志を承くること勿し、此れ豈命に非ずや、然れども生成鞠養の恩栄は、消塵して之に酬ゆること能はず、今や石廟一基を立て、先妣の徳齒を録して、之を□後昆に伝え、以て所謂刻木・感隣・不飲・泣血等の遺徳に擬せんと欲す、公銘せんとして再三に請う、余□至、頗る其梗概を述べ

銘に曰く

藤家の賢女 源氏の閨媛

貞心素有り 懿行虧くるなし

内外和協し 壺彝孔宜し

世に住むこと十八 日嶠嶠に逼る

報恩一句 蓮経七枝

字なり石なり 何ぞ曾て磷緇ならん

屹然たる靈廟 之を瞻之を仰ぎ

慎んで遺躅を奉じ 伝うるに誅辭を以てす

寛正二年辛巳夏五月二十五日

野釈徳願謹んで誌す

①「嬰」は母の字か(原孝治氏の指摘)

②「輟」復徒宮兆域(「菊池風土記」訳)なら「輟」今復た兆域を徒宮し」となる。

③「輟車」は「輟社」の誤り(原氏の指摘)

④「勿遂承顔」志」とすれば「承顔の志を遂ぐる勿し」となる(いずれも原氏の指摘)

読み下し文によつて文意は理解できるが、内容は、忠直の父は紀伊守朝豊、母は藤原朝行娘で、十四で嫁ぎ、十七歳で忠直を生むも、翌年十八歳で死去したこと、長祿三年(一四五九)は、三十三回忌となるので供養の後、小石を拾い集めて法華経を一字一石に写し、寛正二年(一四六一)に完成したので供養塔を作つて埋経したこと、忠直は撰者に対し、中国古来の孝子の例を挙げ、生後すぐ母を失い孝養の機会がなかったのは運命であろうが、生み育ての恩は月日を重ねても報いることができずにいたので、今、供養塔を作り、亡母の恵みを子孫に伝え、中国の孝子たちの故事に習いたいと云い、撰文を再三依頼されたので(引き受け)、概要を述べる、というもので、これに四字、十六句の銘を加えている。

撰者については「徳願」と読めるかどうか自信はないが、「野釈」の冠字から、正観寺などの住職ではなく、桂庵玄樹のように菊池に滞在中の禅宗系の学僧ではないかと推測される。表現・刻字からみても当時のものとして問題ないとすれば、銘文の内容は撰者が忠直から直接得た知識が即表わされているもので、隈部氏に関する史実として重要な意味を持つといえよう。この銘文から明らかになることは、次の三点である。

①忠直の父の名と官名が判明すること。

②忠直のもう一つの官名が判明すること。

③隈部氏は源氏を当時称していたことが明らかであること。

隈部系譜の中で、親子関係が他の史料によつて確かめられるのは、この朝豊・忠直と最後の親永・親泰だけである。ただし、朝豊と忠直という名乗りはつながりが

告余曰 疇昔子羔為母殫泣
血三季之哭、曾參為母極不

餘七日之哀 王修為母動轅車

之誠、隱之為母發於感鄰之

歎、丁生為母存于刻木之敬、雖

今昔之事或異 而子母之情乃同、我

在襁褓之中喪母、勿遂兼顏氏

志、此豈非於命哉、然生成鞠養

之恩榮 消塵不能酬之、今也立石

廟一基、錄于先妣德齒 傳之

□後昆 以欲擬于所謂刻木感

鄰不飲泣血等之遺德 公銘

請于再于三也、余

至願述其梗概

銘曰

藤氏賢女 源氏閨儀

貞心有素 懿行無虧

内外和協 童孺孔宜

住世十八 日逼崦嵫

報恩一句 蓮經七枝

字也石也 何曾磷緇

屹然灵廟 瞻之仰之

慎奉遺骸 傳以誅辭

寛正二年辛巳五月二十五日

野沢徳願謹誌

隱部忠直母供養塔銘文(読み下し文案)〔追加史料二一〕

兵部侍郎源忠直之母

義雲慈孝禪定尼は、將監藤氏朝行の女也、庚寅の誕の質也、姿容端麗、四德兼備す、十四歳にして嫁して紀州刺史源氏朝豊の室に配せらる、内に克く婦礼を尽し、外は允に九族に親しむ、十七歳にして忠直を生む、其明年嬰疾を徴し、遂に粧に掩はる、春秋十有八、葬に長塲の礼を用う、実に応永三十四年丁未正月二日酉刻也、茲の長祿三歳己卯正月は三十三年の忌ノ辰に当る、是において孝子忠直、□之日を遂え、追遠の誠を伸べんと、躬拳石を收拾し、漸く蓮經六万余字を写す、□の一字一石なり、寛正□年辛巳五月二十五日に其功既に畢る。輒ち役徒らに命じて兆域を営み、壇墠を封き石經を藏せしむ也、寔に孝道の深厚なるに匪ざれば、孰れか能く此に至る者あらんや、忠直余に告げて曰く、疇昔子羔は母のために泣血三年の哭を殫し、曾參は母のために不飲七日の哀を極め、王修は母のために轅車の誠を動し、隱之は母のために感隣の歎きを発し、丁生は母のために刻木の敬を存す、今昔

誌」では、菊池郡河原手永の西迫間村、桑林山光九寺の補記（割註）において、

「其銘曰、翁基云、本書銘文誤謬アリ 依テ事蹟通考・陣跡誌ニ拠テ訂之、尚蛭

村明治十七年（一八八四）四月石碑ニ拠テ査定セシ筆記ヲ参照シテ以テ載之」

そして再調査訳文も加えて校合している。

これら解説文を検討するに、寺本は、その場で忽々の解説であり、旧状の白石銘故に見にくかった故か誤読も多い。また、撰者・筆書も忠直であると誤った。洪江は地元の強みで余裕を持って解説したと見られ、句点を入れて読解案を含めた解説文としているが、何故か「五月」を「七月」と誤っている。また撰者については「野秋徳顯」と読み、正観寺十一世と比定しているが、同人著作『菊池風土記』の「正観寺住持次第」では、同寺十一世は「周讓徳恭」とあり、応永以前の人であると記され、一致しない。八木田は洪江の読みに従って五月を七月と誤っているが、他の訳文と校合していると見られ、かなり相違がある。水島はさらに再調査の訳文も参照したと前書にも註記しているが、誤りの七月二ヶ所のうち一ヶ所を残しており、再調査者の読解力に問題があったか、むしろ校合が多くなっただけ混乱も生じた点が推測される。

この銘文は、これら諸書によって世に周知のものであったが、近來その所在が不明であり、筆者も既存の解説文で校合を進めていたところ、地元の公民館に保存されているということで、その写真を手し、解説した。欠落部分もあるが、解説文案（追加史料二）を作り、読解と読み下し文については、原孝治氏の御教示を得た（ただし、同氏には写真確認の機会がなく、筆者の訳によっているので、責任は筆者にある）。

隈部忠直母供養塔銘文〔追加史料二一〕

兵部侍郎源忠直之母

義雲慈孝禪定尼者、將監藤

氏朝行之女也、應永十七年

庚寅誕質也、姿容端麗 四德

兼備 十四歲嫁 而配紀州刺

史源氏朝豐之室 内克盡於

婦礼、外允親於九族、十七歲

生忠直、其明季嬰^{（年）}微疾 遂掩

粧矣、春秋十有八、葬用長塲

之礼、實應永三十四年丁未

正月二日酉刻也、茲長祿^{（年）}三

歲己卯正月當三十三□□

忌辰、於是孝子忠直遂□□

之日、伸追遠之誠、躬收拾拳

石、漸寫蓮經六萬餘字□□

之一字一石焉 迄于寬正□□

年辛巳^{（年）}五月二十五日其功

既畢矣、輟^{（力）}命役徒宮兆域、封

壇墀藏石經也、寔匪孝道之

深厚、孰能至于此者與乎 忠直

申候、使者永野右京亮 長田彈正忠方まで遣之候、委細定令申候、恐々謹言

六月二日

賀々丸

阿蘇殿

天授元年（一二七五）、菊池攻めに大軍を催して肥後に侵入する九州探題今川了俊との対戦を控え、菊池賀々丸（武朝）が阿蘇惟武に協力を求めたところ、惟武がこれを承諾したので出された札状である。所謂、水島合戦を控えての文書であるが、謝礼の使者となった永野右京亮は、阿佐古氏とともに隈部氏から分かれて独立した家とされる。永野氏が南北朝後半期に菊池家臣として隈部氏から独立した存在であるとすれば、宗家の隈部氏はそれより以前から存在していたという傍証となる。

隈部氏は南北朝期には菊池氏を支える戦力として存在していたと推測されるが、それは苗字の地にからむ隈部城からの推測とも結び付くのである。

三、隈部忠直母供養塔銘文

（一）再解説と歴史的価値

隈部氏歴代の中で、具体的にその個人像が知られているのは隈部忠直のみである。菊池氏三代に仕え、特に重朝を補佐した能臣として中央にもその名を知られていたことは、江戸時代以来の諸書に紹介されている。それは儒学や詩文を通じた五山系禅僧たちとの交流であり、中でも菊池に来遊した桂庵玄樹との間には、その後も長く詩文の応答があった。近來の川添昭二『中世文芸の地方史』にもこれらがまとめ紹介されている。

一方、江戸・明治期には忠直の叙述においては常に紹介されながら、近來、忘れられているものに旧西迫間村光久（久）寺所在の忠直母の追善供養一字一石塔銘文

がある。この銘文は、その都度、校合・解説が加わって紹介されてきたので、訳文に異同がある。

その初例は、天明四年（一七八四）、寺本直廉著『肥後見聞雜記』所収で、著者が明和二年（一七六五）五月十五日に探訪・解説したものである。著者は、西迫間村光久寺の塔銘文紹介のうち、

「又夕門前三道を隔て田の中ニ忠直建立之経塚有、銘文者忠直之自作自筆也、銘左ニ出、但台石之四面ニ銘有、塔之図略之」

と前書を加えて解説文を紹介しているが、その上端の注記で、第一面が東、第二面が南、第三面が西、第四面が北に向いていることを記していることは、塔が後年動かされたので、旧状を示す重要な指摘である。

次いで、寛政六年（一七九四）、洪江公正著『菊池風土記』巻七の「光久（九）寺に在る墓」の項では、

「（略）光久寺の道下に在り、昔は此所迄寺の境内なり、安永八年（一七七九）己亥十月十一日、今の寺内に改め埋む、経塔の銘左に記す」

と前書があり、塔が移されたことを記している。

その次は、天保十二年（一八四一）成立の八木田政名著『新撰事蹟通考』系図編のうち、系図之十「隈部系図」の中で、忠直の項に注記として銘文解説を紹介するが、前書に割注して、

「菊池風土記二曰、此塔始ハ在光久寺ノ道下、旧光久寺境内也、安永八年十月移建光久寺後庭之岩上」

と記すが、菊池風土記は「今の寺内に改め埋む」と記し、「光久寺後庭之岩上」とは記していない。さらに動かされた可能性もある。

さらに、明治二十一年（一八八八）の水島貫之（翁巷）による『増補校訂 肥後国

球磨を抑え、芦北に進出した相良長統は、隈部に使僧を派遣し、菊池為邦に芦北郡支配の承認を求めた。芦北郡では、二見城の藺田氏を最前線として高田・八代の名和氏と対立しており、その優位を確保するため、守護の承認を求めた訴訟であった。

この時、相良氏の使者は為邦・隈部・その他の老若達からねんごろに扱われ、為邦から確約の文書も得たことを述べている。この守護館の中で、隈部氏は為邦に次ぐ老若筆頭の地位にあると扱えられている。これには、その後の関連文書があり、為邦の安堵状・同書状・菊池氏老若書状・菊池氏使者書状（いずれも相良文書）がある。

さらに五条文書の「菊池為邦自筆書状」（『隈部館跡Ⅱ』所収）は、菊池方の為清の戦果を伝え、その反動として、筑後山中（五条氏の所在地・八女郡内）の反菊池の動きを警戒するよう隈部式部丞に申し付けたことを報じ、一方で、筑後表口への出兵については、守護代城兵部大夫を山鹿まで進ませ、玉名の肥前為安も出陣したことを知らせている。この内容から、この文書は菊池勢敗北、大將為安討死の寛正六年（一四六五）の高良山合戦直前の時期に発せられたと推定される。

筑後をめぐる菊池と大友の対立は、足利義教が菊池持朝に大内盛見を援け、大友持直討伐命を下し、大友分国の筑後を菊池氏に与えたことに始まる。その後、大友氏は幕府との関係を復し、寛正三年（一四六二）、足利義政は筑後半国を大友政親に与えた。菊池為邦は納得せず、大友氏との間に寛正六年の高良山合戦で敗北し、筑後国守護職は大友氏に移った。

為邦の自筆書状は、菊池氏軍事行動における一方の責任者として隈部氏を起用している。隈部氏は本拠地の関係もあつて、表ではなく裏方の隈府防衛や筑後山中の異変に備えての警備と情報収集を命ぜられたのである。この五条文書の式部丞が、相良文書の持朝書状の式部少丞と同一人かどうか、その間の二十年の時間差は可能ではあるが断定はできない。

さらに、隈部氏の存在を遡らせる可能性がある史料について追加検討しよう。

①「源秀書状」（正観寺文書・広福寺文書）『隈部館跡Ⅱ』所収

正観寺文書の源秀は、寺の訴訟を主君（菊池氏）に取り次ぎ、決裁を得たことを寺に伝えているものであり、広福寺文書の源秀は、菊池一族の肥前家遺族の妙悟の寄進田地問題を肥前家当主との折衝で解決したことを寺に伝えている。

この正観寺文書の源秀書状には、「応永三十三年（一四二六）」と小字注記があり、奥端裏には「隈部対馬守」と記されている。寺の訴状の取り次ぎや、寄進田地について遺族当主と寺の間の仲介に立つことは、家中で当主菊池氏に近い相応の地位にある人物でなければ難しいことであり、応永三十三年と隈部対馬守は、後筆としても、その史実としての可能性高い。

②光九寺五輪塔碑銘（追加史料一—三）

後述の隈部忠直母供養の一字一石塔銘文内容と一致し、忠直建立のものであろう。

紀伊守源朝豊

潭月延龍禪定門

嘉吉三癸亥八月二十二日

応永三十四年未

義雲慈孝禪尼

正月二日

『菊池風土記』からの引用であるが、忠直の父・朝豊が嘉吉三年（一四四三）、母が応永三十四年（一四二七）に死去していることを明らかにしている。

③「菊池賀々丸武朝書状写」（阿蘇文書）（追加史料一—四）

先日申入候處、預委細御返事候之条、恐悦無極候、（略）今愚身貴方之外無憑申方候、随而可被懸御意之由、蒙仰候、恐悦之至、難尽紙狀候、此等次第、先為

木庭は本来、菊池一族・城氏の本拠地で、字「古城」の城跡は城林城と呼ばれてきた。豊後から出兵してきた大友勢が、隈府の菊池本城と対峙して陣を構えるため確保した地であり、したがって隈部は木庭の西側を指す地名と言える。

さらに、木庭に陣を構えた朽網親満は、手始めに「隈部 西寺」に出勢、さらに木野・山鹿・隈庄・山本・内古閑の敵城を攻めたと述べるが、西寺は隈府の西南の平坦地である。この西寺の地を隈部の内と見るか、隈部と対する地と見るか、見解の分かれるところではあるが、隈部とは菊池郡北部の菊池本城とその城下町隈府を含む迫間川流域一帯、すなわち、大まかに隈府扇状地を指している地名と見てよいであろう。

(二)隈部氏の初見

隈部氏の名が文献上で確認できるのは十五世紀中頃のことである。「菊池持朝書状」(相良文書)は次の様に述べる。

〔追加史料一―一〕

前日進隈部式部少丞候之處、殷勤之御返^(書)喜悅候、隨而泰朝^(書)逗留山門院之由其聞候、御領中^(書)吏候間、佐敷同前候哉、早速可被仰付候、并佐敷相殘人々^(書)吏御成敗候者可然候、為其兼申^(書)定子細候、同者能御申御沙汰候者歛心候、恐々謹言

六月十日

持朝(花押)

蘭田主計允殿

菊池持朝は、前回、隈部式部少丞を使者に派遣し、問題は解決していたと思っていたところ、不充分であると、相良支配下の芦北衆代表者と見られる二見城主の蘭田氏に宛てたものである。

この文書については、それに先立つ二月十八日付、四月二十二日付の持朝書状

(いずれも相良文書)が関連している。持朝は一族の高瀬泰朝と対立し、追われた泰朝は一族とともに相良支配下の芦北郡佐敷に亡命していた。持朝は相良氏に使者を送り、泰朝は「一身当敵、孫々子々煩候」と敵意を強調し、国外追放を要求し、その使者となったのが隈部式部少丞であった。持朝と泰朝の確執の原因は定かではないが、対朝鮮貿易権に関することであろうか。高瀬氏は菊池川河口高瀬津を抑えており、内外貿易に関わっていた。球磨から芦北に進出した相良長統も、八代海に出口を得て内外貿易に関心を持っていたはずであり、高瀬氏の経験を吸収したいと佐敷滞在を認めていたのであろう。しかし、持朝は隈部氏を使者として交渉し、泰朝の国外追放を承諾させたのであった。しかし、泰朝に未練のある相良氏は、泰朝だけを薩摩国山門院に移し、持朝の要望に答えたとみせたが、持朝は、他国ではあるが山門院は相良領であるから認められないこと、また佐敷に残留している泰朝関係者も同じく処置するように求めたのであった。この四月二十二日付の持朝書状は、関連文書から持朝の父・元朝の死去、文安元年(一四四四)以後のことであり、持朝死去は文安三年(一四四六)のことであるから、その間に出されたものである。次いで長祿四年(寛正元年・一四六〇)の「相良長統書状」(相良文書)は次の様に述べる。

〔追加史料一―二〕

(前略)又、くまへ二光東寺坊主進^(書)て候、昨日罷帰られ候、殊外屋形・隈部方・其余達行達ねんころ二申候、これに就、芦北の事、肥州より八幡二御かけ候て^(書)せいこん^(書)状をあつかり候、同りはうもせいこん^(書)状をもて念比二申され候、目出候、委敷重々可申承事候、恐々謹言

三月十六日

長統(花押)

蘭田主計允殿

菊池氏宗家を嗣いだ武光の政務や軍事には、武重が定め、武士の時代に機能していた一族を結集した「内談衆」と、その代表「管領」によって支えられていた痕跡はない。他姓の郡内武家領主たちを被官化して直属兵力を増強し、その中から守護代を命じて政務も担当させていたと推測される。もちろん、合戦において、従来の一族の戦力の比重も相応のものがあつた、肥前守武澄が副将となつてゐる理由も一族の戦力の結集が必要条件であつたとは見られるが、武澄には肥後守武光の下で政務上の役割があつた痕跡はない。

戦国後半期まで、隈部氏には居城はなかつたのではない。隈部氏は隈部城ごと武光の直臣団となつたと見るのが妥当であろう。隈部氏から分かれた一族とされる永野氏・阿佐古氏には、菊池市西の旧菊鹿町（現山鹿市）に苗字の地がある。隈部氏本流は隈部の地を動かず、隈部城周辺に居住した故に苗字を変えることがなかつたといえよう。

南北朝内乱期に隈部氏の名は見られない。隈部氏とともに室町期の菊池家三重臣の家とされる赤星氏と城氏は『太平記』にその名を残している。この二家は、当時一族として兵を率いた一方の将であり、後に家臣化したものであるが、隈部氏の場合、その武力は菊池宗家の直属の戦力として、主君の手柄となり、その名が表に顕れることのない存在であつたと考えられる。南北朝内乱期、武光以降の菊池氏宗家は隈部氏に支えられているところが大きかつたと推測されるが、これを確認できる史料は見出せない。

次いで地名は、その場所・範囲を指示するものである。永正三年（一五〇六）の「山北邦統・内田重国連署状」（相良文書）と、同年の「朽網親満書状写」（碩田叢史）は、隈部の地を「木庭」と対比してとらえている。

菊池能運が死去し、遺言により菊池家に迎えられた一族肥前家の政隆に対し、菊

池家中では親政隆派と反政隆派の対立が武力対決へとエスカレートしたが、その均衡は、なかなか破れなかつた。この時、豊後の大友氏が反政隆派を助け、軍勢を派遣したので、政隆派は隈府を捨てることになるが、同派の山北・内田氏は、大友勢が隈部の近所の木庭に陣を置いたと述べ、山鹿・隈本・隈庄防衛線確保のため政隆は内古閑城（山本郡）に移つてゐると述べている。



中世地名「隈部」の概念図

一、はじめに

中世隈部氏の歴史把握については、文献史料の上からはきびしい状況下にある。

天正十五年（一五八七）の「肥後国衆一揆」の張本として隈部氏は滅亡しているので伝来の文書はなく、他家史料の中から関係文書等を拾い出す作業を菊鹿町文化財調査報告第十一集「隈部館跡Ⅱ」で行ったが、その数量は、本稿で今回追加紹介したものを加えてもわずかな量である。

また、菩提寺に歴代の墓碑や供養塔がまとまって存在していると言えるほどでもなく、一方で『隈部物語』・『隈部軍記』などの記録は天正の「国衆一揆」に限られた内容である上、古老の記憶に頼った近世の編纂物である。

隈部系図についても、伝来文書はないので、何を基に作成されたか由緒が分からないし、系図人名の存在を証明できる史料を提示できる場合もあるが、世系のつながりを証明する手がかりは、殆どつかめない。

本稿は、当初、隈部系図の構成と増補の分析により、隈部氏世系確定への可能性を求めたが、考察・判断を加えるほどの史料を見出し得ず、基礎的史料の把握と内容の再検討によって、親永以前の隈部氏世系を含めた歴史の確認と、派生する問題を含めた隈部氏の歴史的評価の試案にとどめた。

二、地名隈部と隈部氏

（一）地名としての隈部

「隈部」という言葉は地名であり、隈部氏はその地名を苗字とする一族であることは明らかである。

隈部の初見は城名として現れる。南北朝内乱前期、正平四年（一三四九）と推定される「恵良惟澄申状追書写」（阿蘇文書）であり、次いで内乱末期の康暦元年（一二七九）と見られる「今川了俊書状写」（阿蘇文書写）である。

恵良惟澄は、菊池武光が合志幸隆に奪われていた菊池本城を攻め、外城を奪い焼き払ったが、さらに翌日には「隈部城」の敵を追落したと述べている。この時、武光は菊池本城を攻め落すことができず、転じて隈部城を一日で落したのは、城の規模も小さく、守備兵も少なかったであろう。

一方、今川了俊は、菊池攻めの最終段階において「菊池事ハ、陣の城、くま目の城、木野城など、更々兵糧なき時分にて候間」、やがて落城するであろうと述べているが、この「くま目の城」が「隈部城」であることは他の史料から推定できる。

ただ、この菊池城攻防戦の最終段階で、菊池方の防衛拠点が、隈部城を本城に、西の木野城、南の平坦部の陣の城として構成され、二文書を比べる時、菊池氏の本城移動が明らかである。内乱前期、合志幸隆が奪った菊池本城とは「深川菊の池の城」を指すが、それは今川了俊のいう「陣の城」であり、北の山際にある「隈部城」は後衛の城であった。ところが、内乱に末期には「陣の城」は「くま目の城」の前衛の城となり、後衛の城であった「くま目の城（隈部城）」が本城となっている。

これは早くから指摘されて知られているが、系図等のいう武政時代のことでは、状況から考えて無理があり、それに先立つ武光の時代に本城を移したことは確かであろう。武光は菊池氏当主となつてから山地を背景とした防禦力の高い隈部城を改修して本城としたのであり、以後、菊池氏宗家の居城として定着する。

しかし、隈部の地名により隈部氏の苗字が生じたとすれば、隈部城は、本来、誰の城であったか。隈部氏の城であったと見るのが妥当であろう。菊池氏が隈部城を本城としたとすれば、隈部氏はどうなったか。

隈部氏関係基礎的資料の再検討

阿 蘇 品 保 夫

(熊本県文化財保護審議会长)

一、はじめに

二、地名隈部と隈部氏

(一) 地名としての隈部

(二) 隈部氏の初見

三、隈部忠直母供養塔銘文

(一) 再解読と歴史的価値

(二) 宇野親治伝承の展望

四、万句連歌と肥後国諸侍連署起請文

(一) 両史料に見る隈部一族

(二) 隈部為治の存在

五、まとめ

報 告 書 抄 録

書 名	隈部館跡Ⅳ（総括集）
シリーズ名	山鹿市文化財調査報告 第9集
編 著 者 名	原口隆志
編 集 機 関	山鹿市教育委員会菊鹿分室
所 在 地	熊本県山鹿市菊鹿町下内田165
発 行 年 月 日	2009年2月28日

所収遺跡名	所 在 地	調査期間	調査原因
隈 部 館 跡	熊本県山鹿市菊鹿町上永野字高池	2006年4月～2009年2月	学術調査

遺 跡 名	主 な 遺 構
隈 部 館 跡	礎石建物跡3棟 庭園遺構 石畳み 石塁 樹型遺構 堀切①～③ (伝)馬屋跡 石垣 小段群

山鹿市文化財調査報告 第9集

隈部館跡Ⅳ（総括集）

平成21年2月28日

〔編集発行〕

山鹿市教育委員会菊鹿分室
〒861-0406 熊本県山鹿市菊鹿町下内田165
☎0968-48-3115

〔印刷〕

西本印刷
〒861-2241 熊本県上益城郡益城町宮園564-2
☎096-286-4151

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『山鹿市文化財調査報告第9集 隈部館跡Ⅳ(総括集)』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成17年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名：山鹿市文化財調査報告第9集 隈部館跡Ⅳ(総括集)

発行：山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話：0968-43-1651

URL：<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2025 年 7 月 9 日